

《異文化講座》

はじめに

JAL で、ヨーロッパ系外国人キャビンアテンダントが乗務を開始したのは、1989 年の年明け早々でした。外国人キャビンアテンダントを大幅に増やした年です。従来からあった香港基地やサンパウロ基地に加え、ロンドン基地、フランクフルト基地、シンガポール基地を開設しました。その後、上海基地が加わり、それぞれの基地で、キャビンアテンダントの採用を行いました。そして、旧 JAL ウェイズ社では、バンコク基地を開設しました。一時は、JAL だけで、8000 人の客室乗務員のうち、1000 人近くの外国人が乗務していました。さらに旧 JAL ウェイズ社では、タイ人キャビンアテンダントが 1300 人余り乗務していました。

最初の頃は、邦人キャビンアテンダントも外国人キャビンアテンダントも、一緒に働くことに慣れていないため、一種の緊張状態が続きました。機内では、多少の摩擦や軋轢もありました。

現在では、彼女たちも、すっかり日本社会に溶け込み活躍しています。日本社会を知らずに飛び込んで苦労した第 1 期生やそれに続く Senior(ベテラン CA)たちが、今や Junior(後輩)たちに、日本社会での仕事の仕方を教えています。

一方、邦人キャビンアテンダントも、彼女たちのことが分かるにつれて、彼女たちを特別な存在だと思わず、自然な姿で一緒に働いています。

筆者は、教官時代、ロンドン基地乗務員の最初のクラスと次の年のクラスと、2 クラスの担任でした。その前には、少人数のブラジル人クラスの担任もしていました。乗務の現場に戻ってからも、外国人キャビンアテンダント関係の仕事に携わっていました。

初めの頃は、ヨーロッパ系外国人を教える Know How もなく、手探りの訓練でした。彼女たちについて、知っていたようで知らないことが多くありました。そのような手探りの中での訓練でしたので、毎日が異文化との出会いでした。それらについて綴っていきます。(以後、キャビンアテンダントを CA と書きます)

イギリス人キャビンアテンダント訓練奮闘記

—異文化との出会い—

プロローグ

《光がまぶしい》

日本人にちょうどよい明るさは、ヨーロッパ人にとって、やや明るすぎるらしい。授業中、訓練生から、
「教室の蛍光灯がまぶしいので、

消してもいいですか」

と何回か言われた。教官の方は、なんとも薄暗くて、
「電気を消したら、テキストや黒板に書いてあることが、よく見え

ないでしょう?」

と返すのだが、彼女たちは、

「私たちは、電気を消してもよく見えます」

「電気を消したくらいのも明るさの方が、

授業に集中できます」

それ以後、私のクラスでの授業は、室内照明なしで行うようにした。

〈そうなのだ、青い目は光に弱いのだ!〉

これが異文化なのだ、と変に感心してしまった。ロンドンで、ホテルの会議室を借りて授業をしていたときは、何も言わなかった。それが、東京での授業が始まったとたんに、教室が明るすぎるというのだ。そういえば、欧米人はよくサングラスをかけている。ただ伊達(だて)にかけているのではない。太陽がまぶしくてしょうがないのだ。

TV や映画に出てくる欧米の家は、どの部屋も部分照明になっている。ソファの横やダイニングテーブルの上や部屋のコーナーにという具合だ。日本人からみれば、何となくうす暗い感じがする。あの明るさが、欧米人の好きな明るさなのだ。

CA 経験者なら、思いつくフシがある。ヨーロッパのホテルに泊まると、部屋の中が暗い感じがする。本や新聞を読むとき、ソファ横の照明スタンドを近くに寄せて読むことになる。ベッドで本を読むときも、スタンドの明かりがもの足りなく感じることもある。

北ヨーロッパの冬は長く、どんヨリとした雲に覆われた日何日も続く。そして、外は厳しい寒さだ。冬は雨期と重なって、毎日じとじとしている。イギリスでもドイツでも、冬に太陽を見るのはまれである。国によって多少違うが、10 月頃から 6 月頃ま

で、このようなどんよりとした日が続く。ヨーロッパ人は、長い歴史の中、このような気候風土の中で生きてきた。光に強い目は必要としなくなってしまったのだ。

同じヨーロッパでも、スペインやイタリアやギリシャのように地中海性気候の国では、日本よりも太陽が強いので、人々の目は、光に強い黒い目(実際にはブラウン色)をしている。

《太陽がうれしい》

ヨーロッパの中でも、ドイツ人が一番旅行するそうだ。ドイツを含め、北ヨーロッパの人達は、太陽を求めて、南ヨーロッパへ、パクスに出かける。休暇を長くとり、一年分の太陽を浴びに行く。

教室の着席位置は、特に決めていない。自分の好きなところに着席してよいことにしてあった。教室の広さは、ークラス20名用になっている。今回はそこに16人の訓練生しかない。机の数に少し余裕がある。

訓練は1月に行われた。東京の1月は晴れた日が続く。窓からは太陽がさんさんと差し込む。

教室の電気を消して欲しい、といった訓練生たちが、窓に近い方に片寄って着席している。何人かは、太陽の光を直接浴びている。

〈電気を消せといったのに、これは何なのだ！

明るい方に座っているではないか〉

邦人クラスも含め、シンガポール基地や香港基地のクラスでも授業に出た。ブラジル人のときは担任もした。今まで、陽があたる窓側を好む訓練生を見たことがない。邦人訓練生にしても、シンガポール訓練生や香港訓練生も、窓側に座るのを嫌がった。陽光が差し込み、ホカホカして眠くなってしまうからだ。いくら冬とはいえ、陽光を直接浴びれば、暑くてしょうがない。授業中、あまり日が差し込むときは、カーテンを閉めている。

「真冬に太陽を浴びられるなんて、最高！」

暑ければ、脱げばよい。眠気もホカホカも、なんのその。電気のまぶしさと太陽のまぶしさは別というのが、ヨーロッパ人CAたちの言い分なのだ。

「水と安全はただではない」という言葉があるが、「金を払っても、太陽を浴びよう」という言い方もできるくらいだ。日本人もリゾート地は好きだが、「太陽を求めて旅行に行きます」とは、あまり聞いたことがない。

そのようなヨーロッパ人CAたちので、一人前となり、乗務で

日本に滞在するとき、夏はもっぱらホテルのプールサイドで日光浴をする。ところが、白い肌は、強い太陽の光に慣れていない。2、3時間焼いただけ真っ赤になり、水ぶくれになってしまう。そして乗務できなくなることが起きる。たいてい、新人の時に、この失敗をする。

9月初旬に、フランクフルト・東京間を一緒に乗務したドイツ人CAが、

「東京の天気がよいといいけど…、晴れていたらプールサイドで焼くの」

「ドイツは、もう気温が15℃くらいなの。東京でしっかり太陽を浴びなくちゃ」

と言っていたのを思い出す。

《痛み嫌い》

訓練ピックのひとつに、イギリス人訓練生を救急車に乗せ、大病院に運び込んだことがあった。

イギリス人は痛さに弱い。日本人だったらガマンできる痛さでも、耐えられないという表情をして訴えてくる。イギリスの会社では、欠勤が多いという話をよく聞く。これは、労働価値観の違いもあるが、イギリス人が痛さに弱いので、欠勤が多くなるのかもしれない。

東京訓練を開始して2週目の月曜日。午前中の授業もそろそろ終りという時、ミッシェルがお腹を痛がっていると、クラスの間が教えてくれた。

社内診療所に連れていき、診察を受けさせた。英語でのやりとりなので、どのくらいの痛さか、医師も通訳している。筆者も、いまひとつ感じがつかめない。とにかく痛がっている。本人はウーウー唸っている。診療所の医師は、もしかしたら虫垂炎かもしれない、会社が提携している大学病院へ運んだ方がよいと言う。先生のアドバイスに従い、救急車を呼ぶことにした。

お医者さんは、問診で、どのような病気か、ある程度推測するのだが、外国人だと、どうも勝手が違うようだ。設備がしっかりしたところで検査したほうがよい、と判断したらしい。救急車には、パトリシアと私が付き添って乗ることにした。病院には、診療所の医師が連絡してくれている。

連絡を入れておいたので、病院側は準備して待っていてくれた。さっそく救急治療室に運び込まれ検査が始まった。1時間程で検査が終り、担当医が出てきた。訓練が始まったばかりなのに、手術となれば訓練に支障をきたすことに

なる。あれやこれや心配していた。ところが、担当医の話では、病状はたいしたことなく、疲れと食べ合わせが悪かったことが原因らしい。しばらくしたら帰宅させてよいと言われ、安堵したのを思い出す。あとで本人に聞いてみると、訓練で疲れていたけど、週末にサタデーナイトフィーバーしたらしい。

〈どうしてあんなに痛がるのだろう〉

食べ合わせが悪かったくらいで、日本人はあれほど痛がらない。

彼女たちは、痛さが伴ったら、もうダメだ。痛みに対する耐久力はあまりないようだ。痛みをガマンするという発想はないらしいことが判った。仏教の影響もあり、日本人は小さいときからガマンなさい、がんばりなさい、と言われ育ってきている。痛みに対しては、欧米人よりガマンできるようだ。

第1章 ロンドン初採用 CA を訓練

《オリエンテーション》

開講式が終わるとさっそく授業に入った。最初に、訓練の全体概要が分かるように、これから始まる訓練について、オリエンテーションを行う。欧米の航空会社で働いていた者もある。欧米の航空会社では、新人訓練に 2 ヶ月以上も時間をかけない。せいぜい 2~3 週間くらいと聞いている。欧州の航空会社とは訓練スタイルは違う。前にいた航空会社の訓練のつもりでいてもらっては困る。欧州の航空会社では、新人には、後部客室(エコノミークラス)のサービス訓練を主に行って乗務を開始させる。ファーストクラスのサービス訓練は、新人乗務員には行わない。

当時、会社の訓練に対する考えは違っていた。訓練の半分以上は、食事サービスや一般機内サービスの実技訓練である。新人といえども、ファーストクラスのサービスも教えていた。もともと、邦人 CA 訓練の発想からきているのであるが、邦人 CA のたまご達で、西欧料理のことをよく知っている者はほとんどいない。サービス方法についてもしかりである。これから国際線を乗務する以上、欧米の正式なサービスを知っていなければならない。ファーストクラスではフルコースサービスを行っている。フルコースのサービスを知った上で、他の客室のサービスをさせないと、訳の分からないサービスになってしまう。エコノミークラスのサービスは、食事トレイが入ったカート客室に押

していき、カートの中から食事を取り出し配るスタイルとなっている。ややもすると、料理サービスではなく、ただ配膳しているだけになってしまう。配膳スタイルも、飛行機の中という特殊な環境では、止む得なくそうしている。それでも、本来の正式なサービス方法を知らなければ、CA たちはただの配膳係りになってしまう。そうなると、コーヒーカップを旅客のテーブルの上に置くことひとつとっても、ただ置くだけとなる。品格のあるサービスでは、いかに置くかが重要となってくる。旅客が CA に期待するのは、サービスマナーに則ったサービスである。

もう一つの理由は、CA の戦力化である。幸いにして日本では、優秀な女性が CA に応募してくれている。いろいろな仕事をこなせる CA がいてくれることは、航空会社にとってもメリットがある。ファーストクラスができない CA を抱えていると、毎回のフライトで、乗務員を配置する時に、この人はファーストクラスを担当できる人かを注意していなくてはならないので、人員も余計に確保しておかなくてはならない。(1995 年の CA 契約制度導入以降は、最初は国内線乗務、そして国際線へ移行する制度となったため、訓練カリキュラムが変更になり、国際線移行後は、ビジネス/エコノミークラス中心の訓練となっている)

今、目の前にいる訓練生は、欧米の学校教育を受けてきた人たちである。訓練内容も説明する必要があるが、訓練システムというか訓練のやり方も説明しておかなくてはならない。訓練部での授業の行ない方や訓練システムは、日本の学校教育がバックグラウンドにある。ときには、日本的なやり方で行われることがある。例えば、授業の始まる前には、訓練生は起立・礼をする。そして授業が始まる。接客業は「礼に始まり、礼に終わる」と言われるくらい挨拶を重要視している。そのためにも、授業の始まりと終りの「起立・礼」は、大切な訓練なのだ。日本の航空会社で働く以上、知っていなければならないことである。

まず、ロンドンでの座学授業内容を説明した。知識課目は、できるだけ現地訓練中に行う。これらの課目は、東京でテストがあることを事前に伝えておいた。

また、東京の訓練では、「緊急脱出訓練」や「航空医学と救急看護法」「ミール・サービス(料理サービス)」「リカー・サービス(酒類サービス)」「ビューティーレッスン」「日本語機内会話」「サービス実技訓練」があることや、テストはすべて 80 点以上が次第点であること、80 点以上取れない場合は追試があること、追試を行っても次第点を取れない一般課目が、3 課目以上

あと乗務員になれないこと、さらには、日本語のテストも 3 回あることも伝えておくことにした。

「そんなに勉強しなくてはならないのですか?」

と言っていたが、それでも皆、神妙に聞いている。

《私が担任です》

私がこのクラスの担任(Instructor in charge of the class)で、全員を無事卒業させる責任があることも説明する。

日本の教師は、授業をするだけでなく、家庭訪問まで行い、生徒の日常指導までする。生徒に問題があると、担任が家庭と連絡をとったりする。CA 訓練は企業内訓練であり、会社の一員になる人たちを教えているので、学校の先生がするようなことまではしない。それでも、邦人 CA の場合は、未熟なので、社会人として、しつけ教育も行わなければならない。それらもクラス担任の仕事のひとつとなっている。若い女性の集団なので、訓練生たちも、それなりの悩みも持っている。話を聞きアドバイスをすることも必要だ。というわけで、訓練部も、日本の学校にほぼ近い発想で授業を行っている。

異文化の人たちを日本に迎えるわけである。訓練をとどこおりなく終了させ、無事に CA として送りださなければならない。日本の生活にも慣れさせなければならない。彼女たちが日本に到着した時から、訓練を終えて、所属の基地に帰るまで、日本での生活面の面倒を見るのも担任の仕事になる。訓練生に関して、第一義的な責任をすべて負わなければならない。

学校システムも違う。例えば、欧米の学校では、課目担当の先生は自分の教室を持っている。時間割にもとづいて生徒が教室を移動する。日本では、先生が教室を移動する。

ホームルーム制の違いも説明する。イギリスでは、一般的に、朝ホームルームに集まり出欠をとった後、生徒は自分の選択した課目の授業を受けるため散らばっていく。そして、1 日の授業が終わるとまたホームルームに集まり出欠をとって帰る。授業をさぼって帰ってしまっていないかを確認するためだ。

訓練部では、ホームルームとは、自分たちが 1 日過ごす教室であり、そこでほとんどの授業が行われる。自分たちの教室を、常にきれいに保つため、授業後に、黒板をきれいにしたり、整理整頓をさせたりする。自分たちの教室を自分

たちで管理させる。欧米の学校では、教室の清掃を生徒にさせることはない。

これらの事前説明をオリエンテーションというが、このオリエンテーションでもう一つ話したことがある。それはチームワークのことである。機内はチームワークが必要な仕事場である。サービスの良し悪しはチームワークで決まるといっても過言ではない。個人行動は許されない。皆で協力して、どの旅客に対しても、分け隔てないサービスをしなければならない。そのため、訓練中からチームワークの醸成をしておかなければならない。

目の前にいるイギリス人訓練生たちに、「クラス全員が協力し助け合い、訓練を全員無事に終わって欲しい、それにはチームワークが必要」であることを強調したが、理解されたかどうか確信はない。

日本では、誰かがミスをしたなら全員に注意をする。全体責任の発想がある。個人主義の発達した欧米人には、なかなか理解できないところではないかと思いつつも、邦人 CA のクラスでは必ず言うことなので話してみた。

最後に、訓練そのものも、朝 8 時半から午後 5 時半まで、1 日 8 時間授業であり、大変ハードである。1 日中いろいろなことを覚えなければならない。毎週テストもある。つい先日始まったばかりの日本語授業も毎日行われる。しかも、まったく文化や気候風土の違う環境で生活しなくてはならない等々…。緊張しているのか、日本の企業に入っただけで、これからどんなことが起きるのか…というような顔をして、みな黙って話を聞いている。

《自己紹介》

チームワークを作るためには、まずお互いを知る必要がある。すでに同じメンバーで日本語授業を約 1 週間受けている。お互い少しずつ知り合いになり始めているが、この際、人前で、話をする訓練を兼ねて、あらためて自己紹介の 3 分間スピーチをさせることにする。

まず、担任の自己紹介から始める。筆者自身も乗務員であり仲間であることや名前の由来などを話し、

「私は何才だと思いませんか」

と聞いてみる。日本人は若く見られる。私も 5 才くらい若く見られた。白髪(英語では "Grey Hair"と言う)が目立たなかったからかもしれない。ロンドン基地 CA の訓練を 2 度担当した後、白髪が目立つようになってしまった。これを教官仲間がイギリス人白髪と呼んでいる。

履歴書をあらかじめ見ていたので、一番歳の若い 19 才のフニーに、君が生まれた年に乗務員になったと教えたら目を白黒していた。「えー、けっこう歳がいったー」というような顔をしていたのを思い出す。

授業のやり方は、邦人 CA に対してもそうであるが、できるだけ授業が一方通行にならないようしている。訓練生と一緒に考えるスタイルをとり、訓練生に発言をさせながら授業を進めるようにしている。発言をさせるようにした方が、訓練生も授業に参加している気持ちになり、訓練効果も高い。結果として、眠くならないというメリットもある。特に欧米では、（これは後から知ったことであるが）対話方式の授業が行われており、生徒はいつも自分の考えを述べさせられてきている。自分の考えを意思表示できる人を尊重する、という社会的背景がある。

《名前の呼び方》

自己紹介のとき、私を呼ぶ時は、「Mr. Kawai」もしくは「トシ」でもかまわないと伝えた。ついでに日本社会での習慣も教える。日本では日常生活では、相手を呼ぶときは、「姓」に「さん」をつけて呼ぶ。そして、会社の中では、上司を呼ぶ時は、名前の代わりにその人の役職名を呼ぶ習慣があること。したがって、邦人 CA たちは、「教官」と呼んでいることを…。

「君たちの場合はいずれの呼び方でもよい」

と言っておいた。彼女たちには、役職名を呼ぶ習慣がないので、「教官」と呼んだ者はいなかった。中国系の訓練生は日本語授業で習ったのか、「センセイ」と呼ぶことがあった。クラスの 2/3 の訓練生は、「カワイサン」もしくは「ミスターカワイ」と呼び、残りの訓練生たちは「トシ」と呼んだ。名前の呼ばせ方一つとっても、どうさせなければならないか決まっているわけではなかった。ある女性教官は「姓」だけを呼ばせていた。次のロンドン基地 CA を担当した時、名前の呼び方を説明した折、

"Call me Toshi." (トシと呼んでもよい)

と、最初から伝えたところ、その場から、全員が「トシ」と呼びはじめた。今でも、このクラスの人達に会うと「ハイ、トシ、元気？」という具合である。ところが、彼女たちが飛び始めてしばらくして、ロンドン基地担任が、訓練生に自分のことを「トシ」なんて呼ばせている、と言っているマネジャーたちがいると、仲間の乗務員が教えてくれた。機内でサービス中に、

「ミキ」とか「テル」とか呼ぶことを、邦人 CA の間では許されていない。邦人 CA のたまご達には、社会人になったら、人前ではそのような言い方はしないようにと指導している。特に、学校を出たばかりの若い女性たちは、つい「ミキちゃん」とか「テルちゃん」と呼んでしまう。しかし、飛び始めると、仕事中とオフ時の使い分けができるようになる。

機内で、邦人 CA たちが外国人 CA を呼ぶとき、姓に「さん」をつけて「スミスさん」とか、名前の方に「さん」をつけて「ジェーンさん」とか、人によっては、「ジェーン」に「さん」をつけないで呼んでいる。ロンドン基地 CA 同士では、機内でもファーストネームで呼び合っている。この点に関しては、日本式にしないとは言っていない。

《階級社会》

「イギリスは階級社会の国だ」といわれている。幹部社員と一般社員、将校と兵卒、貴族と一般市民等々…。幹部社員は幹部専用の食堂で食事をする。将校も同じだ。日本の社員食堂のように、部長も一般社員も肩を並べて食事をとるということはない。したがって、ヨーロッパ社会は、私たちが思っているほど、気楽でフランクな社会ではない。ファーストネームを呼ぶのが習慣なのだなどと思わない方がよい。

アメリカ人はフランクなところがあり、上司といえども部下に対して「ジョージと呼んでくれ」というようであるが、ヨーロッパ社会は、その点、アメリカとすこし違う。イギリスもヨーロッパ諸国のひとつである。上司を呼ぶときは、その上司が「ファーストネーム (First Name) で呼んでかまわない」と言うまで、部下は上司のことを「Mr. OO」と呼ぶ。そして、上司は、かなり親しくなるまで、ジョージとかジョンとは呼ばせない。同年配同士でもそのようなところがある。その点、アメリカ人は、早く親しくなろうとして、早めに「First Name で呼んでくれ」と上司の方から言うことがある。

《ドイツは日本式》

名前の呼び方に関して、ドイツ人 CA から、イギリス人の場合とは違う反応があった。教官といえども、訓練生を呼ぶときは、ファミリーネーム (Family Name 姓) で呼んでほしい、と要望が出されたのである。ドイツ支店からも、同じ依頼が届いた。名前の呼び方に関しては、ドイツは日本方式と同じと考えてよい。学生同士でも、会社の仲間同士でも、日本と同じように、姓を呼ぶ社会なのだ。

それ以来、ドイツ人 CA に対しては、教官たちは「ミス、フラインガー」とか「ミス、シュミット」というように呼んでいる。日本人は、外国人がお互いにファーストネームで呼び合っているのだから、ファーストネームで呼ぶのが西欧諸国の習慣だと思いがちだが、それは少しばかり注意した方がよい。教官も相手が訓練生だからと言って、はじめから訓練生をファーストネームで呼ばないようにしている。現場の邦人 CA たちから、

「ドイツ人は面倒くさいことを言う」

という不満にも似たささやきが聞こえてきた。そして、機内でも、飛びはじめの頃は、やり合っている姿も見られた。邦人 CA たちに言わせると、

「彼女たちを呼ぶとき、ファーストネームで呼んだ方が親しみを感ずるのです」

少しでも、外国人 CA たちを仲間として迎え入れようとして、ファーストネームを呼ぼうとする邦人 CA たちにむかって、ドイツ人 CA たちは、はっきりと、

「私たちを呼ぶときは、ファミリーネームで呼んでください」

と心を閉ざしたような言い方をする。少なくとも邦人 CA にとっては、そのように聞こえたようだ。このようなハッキリとした言い方をするのは、ドイツ社会ではごく当たり前のことなのだ。ドイツ人 CA たちは、心を閉ざしている訳ではないし、相手を拒否している訳でもない。自分達の社会習慣をありのままに述べただけなのだ。ところが、邦人 CA たちにとってみれば、

「せっかく親しくなろうと努力しているのに……」

と思うことがしばしばあった。中には、その思いを直接ドイツ人 CA にぶつけることもあり、機内で、

「なぜファーストネームを呼んではいけないの？」

「日本人だって、ファーストネームを呼ばせないじゃないの。どうして私たちだけファーストネームで呼ばなければならないの。不公平じゃない!」

よく考えてみるとそのとおりなのだ。日本社会でも、お互いに名字で呼んでいる。そして、日本人は、お互いに名字を呼ぶ習慣について、「なぜなのか」と自問をしてきていない。それが社会習慣だからそのとおりになっている。

ドイツ人も同じである。お互いを名字で呼ぶのが社会習慣となっている。私たち日本人はどちらかというとアメリカの影響を強く受けてきている。そのため、アメリカ人が、実際にフランクに、お互いの名前を呼びあっているのをみて、同じ白人なのだから、ヨーロッパ人もアメリカ人と同じだろうと思っているフシ

がある。

アメリカ人の祖先は、ヨーロッパの階級社会を嫌い、未知の土地にやってきて、新しい国を創ってきた人たちである。したがって、イギリス人とアメリカ人でさえかなり違う。一般の日本人は、〈ヨーロッパの国々はみな同じであろう〉と誤解しがちである。実は、筆者もその 1 人だった。

どの国の歴史の教科書にも出てくるのが、「ゲルマンの統一」である。「ゲルマンの統一」は、ヨーロッパ各国の歴史の第 1 ページなのだ。すなわち、そこまで(8 世紀頃まで)は、ヨーロッパは一緒だったのだ。その後、民族主義や国家主義が台頭し、北にいたゲルマンは、「ドイツ」という国になり、西に分布していたゲルマンは「フランス」、南にいたゲルマンは「イタリア」になった。そして、それぞれの国家体制が創られていった。したがって、歴史的には、どの国も、それ以降違う道を歩んできている。さらに自然環境も、各民族の生活習慣や文化に大きな影響を与えてきた。長くてきびしい冬を過ごさなければならぬドイツ人は、それに耐えうるような気質が備わり、現在のドイツ人気質になったのであろうし、南ヨーロッパの自然環境の中で育ったイタリア人は、暖かい日差しの中で、おおらかな気質が育まれてきた。

日本社会の中では、部下が上司を呼ぶのに、「アキオ」とか「テツオ」とは決して言わない。反対に、目上の人たちも、目下の人たちを「ファーストネーム」で呼ばないのが一般的である。ドイツでも同じなのだ。お互いの名前の呼び方については、ドイツと日本はよく似ている。

《叱る時》

英語圏では、親が子供を叱るとき、「ジョン・スミス」というように姓名を呼ぶ。子供の方も、親が自分のことを姓名で呼んだら、なにか言われるなど緊張する。訓練生も同じだ。訓練生が授業中におしゃべりをしていて授業に集中していないとき、いつもはトレーシーと呼んでいるところを、「ミス、トレーシー・ウィルキンス」というように呼ぶ。そうすると、その訓練生は、自分が注意されていると分かる。そのあと、「Be quiet Please! 」と注意する。

《自己紹介》

彼女たちの自己紹介は、出席番号順にミッシェルから始めさせた。ミッシェル・アームストロングは 22 才、前職は旅行社、レンタカー会社、チャーター専門航空会社の CA を経験したのち、今回

の採用に応募してきた。フィオナ・アランは元 OL で青い目がきれいな 23 才、エリザベス・バーンス（通称リス 24 才）は、どうしても CA になりたかった元銀行員、カレン・クレグ（彼女のことを皆は頭文字をとって KC と呼んでいた）はおとなしそうなアイルランド出身の 22 才、ルイス・デーヴィーは、唯一ジャンボ機に乗務したことのある CA 経験者で、目のパッチリしたチョットかわいい感じの 23 才、キャサリン・ダーウィー（通称ケイト）は父親の仕事の関係で子供の頃、ニューギニアやマレーシアに住んでいたことのあるオーストラリア国籍の 24 才。パトリシア・フォスター（通称ティッシュ Tish、どういう訳か判らないが本人がそう呼んでくれと言っていた）は大佐の娘。学校時代は生徒会長を務めたことがあるしっかりした感じの 20 才。フランチェスカ・ガーヴィン（通称フラニー）は、母親が日系企業に勤めているという、学校を出たばかりの無邪気な一番年下の 19 才。ペニー・ジーはスワンソン大学で動物学と心理学を専攻し、卒業後ペルーのジャングルでガイドしていた育ちのよさそうな黒い瞳のきれいな 24 才。クラスなかで一番背が高い 21 才のリサ・グレゴリーはスラットしていてモデルになった方がいいような美人。ルイス・ベンダーソンは、やはり学校を出たばかりの 20 才。スコットランド出身のカレン・マッコールは、詩人ロバート・ブラウンと同じ町の生まれで、アイシャドウを塗り過ぎてパンダみたいな目をしていたのが印象的な娘。アレクサンドレア・ムーティ（通称アレックス）もアイルランド出身で、クラスで一番年上の 26 才で落ちついた感じの女性。スペイン人の夫がいる 24 才のカレン・レトロスは日本の男性ではチョット手にあまる感じの女性。モデルのアルバートと CA 経験があり、父親がドイツ人のナタリア・テラー・イムリーも 22 才と年は若いですがごく大人っぽい娘。20 才のジャネット・ウェークフィールドは看護師の資格をもっているハキハキした娘。そして、残念ながらロンドンでの授業に 3 回遅刻したため、日本での訓練が始まる前に退職させられたキー・マンディーと 17 名のクラスである。

邦人 CA たちも、訓練が始まる頃は 20～23 才である。平均年齢ではほとんど変わらない。邦人 CA たちの多くは、学校を出たばかりなので初々しいところがあり、子供っぽさも感じる。今、目の前にいるロンドン基地 CA は、いかにも女性という雰囲気を出して、圧倒されそうである。

《履歴書》Curriculum Vitae

イギリスにも、履歴書がある。イギリスの履歴書は、1 ページ目には写真が貼ってあり、住所、氏名、生年月日など、記

載してある項目は日本の履歴書とほとんど同じである。日本と違う部分は、男性か女性かを記入する「SEX 欄」（性別欄）と「宗派を記入する欄」「既婚、未婚欄」と「国籍欄」がある。

2 ページ目には、「学歴欄」があり、小学校から最終学歴の学校名を記入することになっている。そして、成績も記入する欄がある。すべての科目についての成績が書いてあるのではなく、どの科目で「A レベル」もしくは「O レベル」の資格を持っているかが書いてある。就職の際に見られるのがこの A レベルと O レベルの数である。どの学校を出たかより、どの課目でどれだけの成績を取っているかが重要になってくる。

学歴欄の下に職歴欄がある。今までに働いていた会社名と期間が書かれている。これを見ると 1 年や 2 年で仕事を変えているのがよく判る。ちょっと働いていただけても書いてある。自分は、どれだけいろいろな仕事経験（キャリア Career）を積んでいるかを知ってもらうために書いている。さらにその下には、語学欄がある。外国語名とレベル F もしくは G（"F" は Fluent, "G" は Good の意味）が記入できるようになっている。たとえば、「French - F」という具合だ。クラスの中には、ドイツ語やフランス語がペラペラの者がいた。

3 ページ目には、応募の動機や健康状態を記入する欄がある。そして、採用する側が本人についての問い合わせができるように、前職の会社の連絡先と上司の名前が書いてある。さらに、採用が決まった場合、前の会社に退職通知を出すことになるが、それが退職する日の何日前までに通知をしなければならないのか、を記入する欄もある。

この履歴書が、第 1 次の書類選考に使われる。記載されている点を総合的に判断し、条件に合った人に面接に来てもらう。

履歴書を見ていておもしろいのは写真だ。日本では、3 センチ×5 センチサイズに顔のみの写真を貼ってあるのが普通である。イギリスの履歴書に貼ってある写真は、サイズもバラバラであり、顔だけのもの、全身を写しているもの、いろいろあった。ひとつ言えることは、自分ができるだけ魅力的に見えると思う写真が貼ってあったことだ。

「宗教欄」も、日本にないものだ。ほとんどの者はプロテスタントである C・O・E (Church of England 英国教会) であるが、無宗教と書いてあったものもあった。アイルランド出身者は大半がカトリック教徒だった。

《学歴について》

イギリスでは、日本に比べ、多くの若者は早い段階で社会に出る。そして、仕事を通じて自分のキャリアを積んでいく。人によっては、働きながら勉強を続ける者もいる。一旦社会に出ても、再び学校に戻ることができる社会システムになっている。これをサントイッチ教育と呼んでいる。学校—社会—学校—社会の図式ができ、ちょうどサントイッチのようになっている。

このクラスで大学を出ているのはペニーだけである。1980年代後半の資料によると、イギリスで大学に行くのは、同世代の学生の約 6%であり、短大と合わせても約 9%位であった。当時、日本では、約 40%弱の人達が大学もしくは短大に進学していた。ヨーロッパ社会では、大学へは、良い会社に就職するためというよりは、自分がめざす学問を研究するために行く(もしくはエリート階級出身者が行く)というのが一般的な考え方だった。仕事に就くためには、テクノロジーと呼ばれる実践教育をしているような短大や専門学校に行く。このクラスの人たちも、何回か仕事を変えているが、職と職の間に、そのような学校にも通っていた人が多い。今回の訓練生は、イギリスやアイルランドの平均的な若者たちである。

《Oレベル、Aレベル》

当時のイギリスでは、初等学校は 5 才で入学し、11 歳で終わる。12 才から 16 才までが中等教育である。16 才で義務教育が終わる。この時点で、約 7 割の生徒たちは学校教育から離れる。残りの 3 割の生徒は、就職を有利にするためや大学進学を目指しての勉強を続ける。

また、イギリスでは、その学生がどの学校を卒業したかではなく、GCSE(General Certificate of Secondary Education)と呼ばれる中等教育修了一般資格試験(全国共通試験)でどれだけの成績をとっているかが、社会的評価となる。就職に際しては、どの課目で O レベルや A レベルを取得しているかを見られる。16 才になると、希望者はこの資格試験に挑戦し、主要科目で O レベルを取得する。O レベルの“O”とはオーディナリー(Ordinary 普通の)の意味であり、一定水準以上の学力があることを指している。この試験のことを、16 才の時に受験するので、シックスティーンプラス(Sixteen Plus)と呼んでいる。強制試験ではないので受験せずに社会に出る人もいる。そのかわり有利な就職

は難しいことを覚悟する必要がある。

一定科目で O レベルを取得すると、さらに 2 年勉強を続け、A レベル試験に挑戦する。この 2 年間の学校のことを、シックスフォーム(Sixth Form)と呼び、日本の高等学校高学年から大学 1 年の学力レベルの勉強を行う。主要科目で A レベルを一定数以上取得すると、大学への応募ができる。大学側も、応募者が、何科目で A レベルを取得しているかによって、入学の可否を判断する。企業も採用にあたって O レベルと A レベルの数を考慮する。履歴書には数学 A レベル、国語 O レベルというように資格を取得した科目のみが記載されている。

《趣味・特技は》

手元に彼女たちの個人データがある。趣味の欄が興味深い。イギリス人もアイルランド人も、実に馬が好きだ。イギリス皇室でさえ、競馬にも出かける。ときに馬に乗って狩猟に出かける。アイルランドはダービー馬の生産で有名だ。アイルランドには、約 5 万 5 千頭の馬がいて、そのうち 1 万 5 千頭は、乗馬や競馬用の馬だそうである。彼らにとって、馬は日常生活のひとつになっているらしく、クラス 16 名のうち 7 名が、趣味に乗馬をあげている。その他には、ホッケー、セーリング(ヨット)、サイクリングを、趣味や得意のスポーツとして履歴書に記載している人がいた。

また、自己 PR 欄では、「ソーシャライジング」(Socializing)「ユーモア(Sense of Humour)」を自分の良い面として記述していた。日本では、「性格が明るい」とか「努力家」というような表現が見られるが、この点でも日本と少し違うようだ。「ソーシャライジング」は訳すと、「社交的に行動する」「社会の要求に合致して行動する」という意味がある。またユーモアも、社会が要求している資質なのだ。欧米では、ユーモアのセンスのない人は、ビジネスの世界でも成功できないと言われている。両方とも人間関係をスムーズにするためのものであり、異民族の集まりである欧米社会では、欠かすことのできない資質なのだ。

《イギリスは多民族国家》

クラスの身上記録一覧表を見ると、フィオナとカレン・M はスコットランド人、カレン・K とアレックスはアイルランド人、ケイトはオーストラリア人、ナタリアはドイツ系イギリス人と、ロンドン基地にはいろいろな人たちがいる。

私たち日本人は、スコットランド人もウェールズ人もイングランド人も、すべてイギリス人と呼んでしまうところがある。そして、イギリス人とアイルランド人との関係も不明確のままにしているところがある。国家体制としては、イングランド、スコットランド、ウェールズと北アイルランドが英国である。アイルランドは独立した国家体制であり、英国とは違う国になる。また、島国で単一民族の日本と違い、アングロサクソン系のイギリス人だけかと言うと、いろいろな民族がいる。

このクラスの人たちは、そうでもなかったが、2 回目に担当したクラスでは、国籍は、英国といっても、両親のうちどちらかが違う国の親を持っている訓練生がけっこういた。このクラスではペニーの母親とナタリアの父親がドイツ人だ。2 回目に担当したクラスでは、マイケルの母親がスペイン人、マリーの母親はシンガポール人、ソフィアの母親はスウェーデン人だった。このクラスでは、既婚者のカレン R にはスペイン人の夫がいる。

もう一つ、日本の感覚と違うのは、ケイトのようにオーストラリア国籍の者も採用されている点である。4 期にはデンマーク国籍の訓練生もいた。当時すでに、ヨーロッパ統合の話が出ていたが、すでに EU 諸国の人がイギリスで職を見つけるのは、特に障害がなくなっていた。また、オーストラリアのように、昔は英連邦の一員であった国の人も、イギリスで職業につくこともしばしばみられることなのだ。

実際には、イギリス人たちといっても、いろいろな国の人がいるので、社内では、彼女たちをイギリス人 CA とは呼ばず、ロンドン基地クルー(London Based Crew)と呼んでいる。

生まれた場所も様々である。ナタリアはドイツ、ペニーはシンガポール、ルイス・デーヴィーはトリニダード生まれである。英国人が植民地政策とともに、いかに海外に出ていたかが分かる。

《授業開始》

訓練概要の説明や自己紹介を行い、少し緊張感が和らいだところで、さっそく授業を開始する。ロンドンで行う授業は、客室乗務員として必要な知識課目が主である。最初の授業は「エアークラフト(Aircraft)」である。航空機についての基本的知識と機内設備について説明を行う。ヨーロッパ人だからといって、みな飛行機に乗り慣れているわけではない。

この授業の目的は、例えば CA たちが、飛行中に主翼の異常を発見した時、パイロットに対してフラップ(Flap)とかスポイラー(Spoiler)とか、エンジンであれば何番エンジンなのか正確に報告ができなくてはならない。また、旅客にも、飛行機の

ことを説明できるようになるためである。

この課目の授業が終わると、東京からロンドンに到着した飛行機を、実際に見に行く。この実機見学は、訓練生が最も興奮する授業だ。ほとんどの者は大型機を間近に見るのが始めてであり、これから乗務することになる飛行機なのだ。(当時の主力機は B747 ジャンボジェットだった)

飛行機の外側見学では、それぞれの名称を教え、機内では、東京での実技訓練に備えて、客室やギャレー(厨房)を見てまわる。操縦室にも連れて行く。

最初は、静かに説明を聞いているのだが、だんだん、何でも触らせてくれと言ってくる。そして一番若いフラーがすぐにやってみせる。操縦室へいけば機長席に座る。ファーストクラスの見学をすると座席に座り、リクライニングさせ、もうお客さん気分である。皆楽しくてしょうがないといった感じだ。

《日本/コト良く知りませ》

次の授業は、日本とヨーロッパ間を中心とした航路案内、航空用語、時差についての「ルート・インフォメーション(Route Infomation)」(航路案内)である。彼女たちは日本・ヨーロッパ間を、主に乗務することになる。

最初に、日本の地理について教える。採用面接担当者によると、日本のことを知っている人は非常に少なかったらしい。「東京はどこにあるか」との質問に対して、「香港にある」とか、「北京にある」とかの答えが返ってきたのにはビックリしたようだ。

黒板に日本地図を書いて、東京がどこにあるのか聞いて見た。幸いこのクラスの娘たちは、東京がどこにあるか、全員が知っていたのでひと安心した。

それではと、「東京」以外で知っている日本の都市名を言わせてみたら、「大阪」という答えが 2、3 人から返ってきた程度だった。少なくとも、JAL が飛んでいる国内の都市名は覚えてもらわなくてはならない。北は、札幌から南は沖縄まで、主な都市の場所と特徴を説明する。日本だけではなく、韓国や中国、台湾、香港、グアム島やマリアナ諸島についても、その位置関係を図に書いて説明しておく必要がある。

どうして知っているのか「沖縄ってどんな所?」という質問が飛んで来た。太陽と真っ青な海がある場所については、よく知っているという。日本の四季や一般的な気候、日本の人口、簡単な日本の歴史についてまず説明した。概要

説明を行った後、日本を紹介したビデオを見せることにした。

私たちは、学校でヨーロッパ各国の歴史や地理を習っている。日本人が西欧諸国に関心を持っている程、ヨーロッパの人たちは、日本や東南アジアに関心がない。

といっても、日本人は、本当にヨーロッパのことを知っているだろうか、という疑問も残る。筆者自身もあまり大きなことを言えない。

彼女たちの自己紹介で、彼女たちの出身地名が出てきたが、その中で知っている都市名は2つ、3つだった。私たち日本人は、どのくらい英国の都市名を挙げることができるだろうか。その前に、英国の地図を書くことができるだろうか。そして、ロンドンがどの辺に位置するか書き込めるだろうか。スコットランドの首都をエジンバラ、北アイルランドの首都をベルファストと、アイルランドの首都をダブリンと、即座に答えられる人がどのくらいいるだろうか。同じようにパリ以外のフランスの都市名やドイツの都市名をどのくらい挙げることができるだろうか。邦人 CA にも同じような授業をするが、答えられない人が多い。

《私たちに世界ハルハ》

世界地図のことで、オーストラリア人英語教官のマッコーレさんが、いつも話してくれることだが、

「日本の学生が使っている世界地図は、日本が中心に書かれています。ところが、オーストラリアの地図は、オーストラリアが中心になっているんです。オーストラリアの地図は、上に南極があり、日本は逆さまに描かれている。九州が上の方に来ているのですよ」

ヨーロッパ人に教える時も、日本が中心になっている地図で、航路案内の授業をしても、彼女たちには、いまひとつピンとこない。邦人 CA に教える時は、飛行機が日本を出発して、どの地点を通過して目的地まで飛んでいくかを教える。ヨーロッパ人に対しては、ヨーロッパを起点とした授業をする。どこの国の人も、自分の国が中心に描かれている地図を見ながら大人になっていく。どの国の人も、自分の国が世界の中心であり、世界は自分の国を中心にしてまわっている、と思っている。

《英語が違う》

筆者世代は、学校で「おむつ」は、「ダイパー(Diaper)」と

習ってきた。思えば、学校で習ったのはアメリカ英語だった。「旅客対応(Traffic)」の授業で、赤ちゃん連れの旅客用に用意してあるダイパーのことを説明していたら、イギリスではその単語は使わないと言う。イギリス人は、ナプキンから派生した「ナッピー(Nappy)」という単語を使っていると言う。盲導犬は無料扱いであることを説明していると、さっと質問の手が上がり、

「テキストに"Seeing Eye Dog"と書いてあるがどういう意味ですか？」

と聞いてくる。この言葉は、いままで聞いたことがないと言う。目の不自由な人に付き添っている犬のことだと説明すると、

「それをイギリスでは、"Guide Dog" と言い、"Seeing Eye Dog"なんて言葉は使いません」

と言ってきた。

JAL がまだ小さな会社だった頃、世界を制していたのはハパンアメリカン航空だった。その頃、JAL は、航空機の運航に関して、国内線中心の航空会社だったユナイテッド航空からいろいろ教えてもらっていた。そのような関係で、私たちが使っている航空用語は、ほとんど米語なのだ。邦人 CA が習っている機内英会話も、その基礎を作ったのは、長らく客室訓練部にいたアメリカ人英語教官のペアーさんである。

学生時代に"Subway"(米語)と"Underground" (英語)の違いを習った。英語と米語では、表現や単語が違うことを少しは知っていたが、こんなところにも出てきた。

《ワゴンは幌馬車》

機内で、サービス時に使用するワゴン(Wagon)もそうだ。この「ワゴン」は、イギリス人にとって西部劇に出てくる「幌馬車」のイメージしかないらしく、教官たちが、「ワゴン、ワゴン」と呼んでいるのが、おかしくてしょうがないと話していた。代わりにイギリス人たちは「トロリー」(Trolley)を使っている。

訓練部があるビルにも社員食堂があった。皆さんだったら、外国人に、「食堂はどこそこにあります」と説明するとき、「食堂」のことを、たぶん「カフェテリア」(Cafeteria)と案内するでしょう。ところが、この単語も典型的な米語なのだ。イギリス人はじめイギリス英語圏の人たちには通じない。イギリス人 CA たちは、何と言っているかということ、「Where is canteen?」のように「キャンティーン(Canteen)」という言葉を使う。

邦人 CA たちは、「ゴミ」のことを "トラッシュ(Trash)"と、「ゴミ箱」は "トラッシュカン(Trashcan)" と習ってきた。機内もゴミが多く出るので、各ギャレー（厨房）には大きなトラッシュカン(Trashcan)があちこちに備え付けてある。「ゴミ」も、イギリス人に言わせると、ラビッシュ(Rubbish) となり、米語の "Trash"とはまったく違う単語を使っている。

《米語ハ英語デハアリマセン》

ここでちょっとばかり、イギリス人のプライトが頭をもたげてきたのを感じた。"Diaper"にしても"Seeing Eye Dog"にしても、意味は分かっているようだ。だが、英語は英語、米語は米語と、きちんとしておきたいのだ。ある時、英語の話題になり、アメリカ人が話しているのも英語ではないか、と言うと、

「They speak American, not English!」

（彼らは米語を話しているのよ、

あれは英語ではないわ）

という。もちろん、クラス全員がそのような言い方をしている訳ではない。イギリス人は、アメリカ人に対して距離をおいているようだ。アメリカ人を田舎者扱いしているような印象を、何度か感じたのを覚えている。

《Cabin Attendant の呼称》

この Cabin Attendant の呼称は、筆者がいた航空会社で長年使っていた。それが TVドラマ「アテンションプリーズ」や「スチュワーズ物語」で使われ、世間に広がっていきました。どちらかというと、日本のみで、この英語呼称が使われているところがある。

くだんのイギリス人 CA たちは、どのような単語を使っているかというところ、"Cabin Crew"となる。機長など運航乗務員を"Cockpit Crew"、客室乗務員を"Cabin Crew"と呼んでいる。英国の影響を強く受けている国の航空会社は、"Cabin Crew"を使っている。彼女たちの中に、"Cabin Attendant"という単語はない。もう1つよく耳にするのが"Flight Attendant"だ。これは米国人が作った単語である。米国系の航空会社や米国の影響を受けている国の航空会社は、"Flight Attendant"の呼称を使っている。

《質問ガアリマス》

1 日目は、この先どんなことが起こるのか、想像がつかない

らしく、緊張が続いた。2 日目あたりから、少しずつ緊張も和らぎはじめてきた。初日には、静かにしていた彼女たちも、ちょっとでも疑問があると質問をするようになってきた。疑問があると、どんな些細なことでもすぐに確認をしてくる。

邦人 CA の授業では、質問も少なく、教官の話をただ聞いているだけで終わってしまうことが多い。授業中に質問をすると、自分だけが判っていないと思われるのではないか。こんな質問をしていいのだろうか、皆に笑われないか。そんなことを考えているうちに授業が終わってしまう。そして、「まあ、いいっか！」ということになる。

ロンドン基地 CA たちは、とにかくすぐ質問をしてくる。時には、ちょっとしたディスカッション(議論)になることもある。

質問が多いのは、好奇心が旺盛だからだろう。時には、授業とは関係のない質問まで飛び出してくることもあった。

《英語が聞き取れない》

私たち日本人が、英語で苦勞するのは、たぶんヒヤリングだと思う。筆者自身も、最初のころ、彼女たちの英語が聞き取れなくて苦勞した。

英語が聞き取れない理由のひとつに、彼女たちは外国人に対して、こちらが少しでも英語を話すと、相手が外国人であることを忘れ、いつも通りのスピードで話してくる。しかも、彼女たちが喋るのは若者言葉である。日本人の若者も、独自の言葉をもっている。若者は新しい言葉を作り出すのが得意なのは、洋の東西同じなのだ。

飛び始めてからの彼女たちは、それでは日本人に英語が通じないことが判った。今では、日本人が理解できるような英語を話している。アメリカ人にしろ、イギリス人にしろ、英語圏の人達は、相手がチョットでも英語を話すと分かると、ペラペラと英語で話しかけてくる。こちらの使っている英語が多少は理解されているからなのだが、どうしてもっとゆっくりと喋ってくれないのだろう、と唸りたくなる。

外国人が、チョットでも日本語で話す努力をしていたら、日本人はその国民性から、少しでも相手が判りやすいように、ゆっくりと日本語をしゃべるようにする。それなのに、英語国民は、何で相手に対する思いやりがないのだろうなんて恨んだりもした。

本当はそうではない。クラスメートがいけないとき、個人的に話すときは、判りやすい英語で喋ってくれるのだ。仲間がい

ると、つい仲間の手前、普段の喋り方で話してしまうようだ。相手が、自分の国の言葉で話しかけてくれるのなら、余計な気づかいをせず、ふつうに喋った方がよいと考えてもいるようだ。

そのようなフンがあるので、相手が言ったことが聞き取れないのであれば、私たちも、素直に"I beg your pardon..."を使えばよい。そうすると、別の言い方やもっとやさしい表現で言い直してくれる。英語国民と話す時、"I beg your pardon..."とか"Please say again..."と聞き返すことを気にする必要はない。聞き直したら失礼かな、なんて心配する必要はない。むしろ、聞き取れない部分を聞き流してしまうと、その先の会話が続かなくなってしまう、それこそ、相手に失礼にあたる。

日本人は、外国人が日本語を話す努力をしても、日本語はむずかしいから、たいしてしゃべれないだろうと考えがちだ。欧米人はせっかく相手が英語を喋っているのだからと考え、積極的に英語で話しかけてくる。彼らの外国人に対する接し方は、最初は普段どおりの話し方で喋り、だんだん相手の英語力によって使う言葉や表現を変えてくる。

《休憩時間》

東京での訓練では、50分授業となっており、授業と授業の合間には10分の休憩をとっている。ここロンドンでは、現地支店のアドバイスもあり、90分授業とした。ヨーロッパでは、会社でも学校でも、午前11時前後に小休憩をとる。現地の習慣に合わせ、1時限毎に10分休みではなく、休憩をまとめて20分取ることにした。

その小休憩時間には、教室を提供しているホテル側の好意で、コーヒーや紅茶の差し入れがあった。カップを手に持ち、教室のあちこちで立ち話をする。邦人CAの場合、休憩時間に、机に伏している姿をよく見る。そのような光景とは違って、イギリス人CAたちは、皆立って談笑している。イス社会とオーストラリア社会の違いがこのようなところでも現れている。私自身は長く立っているのが苦手で、腰が痛くなりすぐ座ってしまう。ヨーロッパ人はよくあれほど長く立っていられるな、と感心してしまう。なぜ長い時間立話をしているのか不思議でしょうがない。筆者自身は、典型的な胴長短足の日本人なので、胴が長い分、それだけ腰に負担がきてしまうのかもしれない。

《英国なまり》

英語で苦労したので、どうしても英語に関する話題を書きたくなる。実は、英語が聞き取れないのは、こちらの英語力に起因することが大なのだが、イギリス人の方言やなまりが、かなりあることも分かった。

英国には、地方それぞれに方言がある上、なまりもかなりあるという。誰もが、クイーンズ・イングリッシュやキングス・イングリッシュと呼ばれる標準語を話しているわけではない。むしろ、地方出身者も多いので、それぞれ方言やなまりを持っていると考えた方がよい。

《英語の歴史》

紀元前の英国には、イベリア半島からアイルランドやフランスを経由して渡ってきたケルト人が住んでいた。ケルト人はゲール語を話していた。紀元前5世紀頃には、シーザーが率いるローマ帝国に侵略され、その間に、ローマ文化の影響を受けている。そのため、英語には、ラテン語の影響を受けた言葉も多く見られる。

因みに、ローマ人が持ち込んだものにローマ風呂があるが、今でもその頃の名残として、ロンドン郊外にバース(Bath風呂)という観光名所がある。

現在の英語の源となる古英語は、西暦450年頃にアングロサクソン族が、今の北ドイツあたりから持込み、イングランド全土に広げた。すなわち、古英語はドイツ語の一方言だったのだ。その後しばらくの間、イギリス(イングランド地方)では古英語が話されていた。そして、イギリスを支配していたのは、アングロサクソンの王様であり、文化もアングロサクソンの影響を強く受けていた。ところが、11世紀に入ると、今のフランスあたりで力をつけてきたノルマン人が、イングランドを支配するようになった。これはノルマンコンクエスト(ノルマン人の征服1066年)と呼ばれ、世界史の教科書にはかならず出てくる。

ノルマンコンクエストの結果、それまでイングランドを支配していたアングロサクソンの王様たちが排除され、イングランドの王室はフランス出身のノルマンディー公になり、商人も教会関係者も、ノルマンディー公とともに渡ってきたフランス人にとって代わった。特に貴族階級はすべてフランス人(ノルマン人)によって占められてしまった。

したがって、話される言葉も、貴族階級はフランス語であり、文化もフランスの影響を強くうけた。ノルマンコンクエスト後、しばらくの間は、英文学がない時代となった。しかし庶民の間では

古英語が根強く話されていた。

そして、時代とともに、あらたに入ってきたフランス語と昔ながらのドイツ語(ゲルマン語)の影響を受けた古英語が混ざり合い、現在使われている英語のもとができた。国家意識の台頭とともに、イングランドに渡ったノルマン人も、イングランドを自分たちの国家と考えるようになり、フランスとは一線を引くようになった。1337年から始まった英仏100年戦争の影響もあり、1362年には、英語を自分たちの正式な言葉(公用語)としている。現在でも、英国とフランスの仲が悪いのは、この頃から始まっている。

言葉の歴史を振り返ると、英国では、ケルト語、ドイツ語、フランス語、ラテン語、はてはキリシヤ語などが混ざり合っていることが判る。ついでながら科学用語や医学用語などによく見られる難しい単語は、キリシヤ語などの影響であり、そのため、英語は語彙が難しいと言われている。

《話しことばと出身》

英国では、話しことばを聞けば、その人の出身階級が判るというのがある。それほど英国は、階級社会なのだ。飛行機には、英国人の旅客も搭乗してくる。ファーストクラスには、英国企業のトップも乗ってくることもある。標準語で英語を話せるだけの教育を受けていない者を採用したならば、会社の品格も下ることになる。話しことばや話し方で、その人の教養が判ってしまうのである。東京の下町出身の筆者も、男同士で話し込んだりすると、けっこう「オレ」とか「オメー」とか「バカ!」とか連発する。昔の日本でも、山の手の話しことばと下町のそれでは、ずいぶん違っており、やはり話し方で住んでいるところが判った。

一昔前までは、日本人も、地方出身のCAは、話しているとすぐに判ったものだ。最近入社してくるCAたちは、あらためて聞いてみないと、どこの出身が判らなくなっている。それほどマスメディアの発達で、訛りや方言がなくなってしまった。関東では、「物をしまう」と言うが、関西の人は「なおす」というように、言い回しで判るくらいになってしまった。地方文化と中央文化の融合が、かなり進んでしまったのが、今の日本である。

ところが、イギリスでは、少しばかり事情が違うようだ。若者はどの国でも同じで、新しい文化を創りだしていく。それでもイギリスの場合は、地方性がかかなり強く出る。それぞれの地方の歴史と関係があるようだ。同じ英国籍でも、スコット

ランド人はイングランド人とは違うし、スコットランド人であることに誇りをもっている。ウェールズ地方の人たちの多くは、いまでも英語ではなくウェールズ語をしゃべる人が多いと、2度目に担当したウェールズ出身のアリソンが話してくれた。試しに、彼女にウェールズ語でしゃべってもらったが、まったく違うことばであり、何を言っているのかチンプンカンプンだった。クラスメートのイギリス人達も、何と言っているのかまったく理解できないと言っていた。例のビートルズも、リバプール出身であり、標準英語とはちょっと違っていた。

それに加え、アイルランド出身者は、アイルランドなまりの英語を話す。日本では、地方の人も東京に出てくれば、標準語で話そうと努力する。しかし、アイルランド人CAは、イギリス人とおなじ英語をしゃべろうとはしない。アイルランド英語を話すことにより、アイルランド人としてのアイデンティティー (Identity主体性・独自性)を打ち出している。

イギリス人同士は、お互いにチョット聞けば判るらしいが、私たちはそこまで英語を聞き分けられない。それでも、訓練生の中に、英語が聞き取りやすい人と聞き取りにくい人がいたのは、以上の背景もあった。

《制服の採寸》

東京では、実技訓練もあり、実際に制服を着てサービスの練習を行う。そのため、彼女たちが東京に来る前に、早めに制服の採寸を行い、実技訓練開始までに用意する。東京から担当者に来てもらい制服の採寸を行うことにした。

それまでは、外国人CAといえば、香港基地の中国人だけだったので、体型も日本人と変わりはなく、日本人のサイズを用意しておけばよかった。ヨーロッパ人を採用するとすると、日本人用のサイズでは合わない。

日本の若い女性も、背が高くなってきている。170センチ以上のCAもざらにいる。身長だけであれば、特に問題はない。制服サイズは、7号から15号まで用意されている。ところが、日本人女性とヨーロッパ人女性と比べて違うところは、肩幅、腕の長さ、胸まわり、そして腰回りである。特に、腕の長さ、胸囲、腰回りは、日本女性とずいぶん違う。そのため、一部の訓練生は、彼女たちに合うサイズを、特注しなければならぬことも判った。

当時は、まだ制帽があった。もう一つ、彼女たちの体型に関して判ったことがある。グラマラスな体型のわりには、頭が小さいのだ。用意してある一番小さいサイズの制帽でも、大

きすぎて困っていた訓練生がいた。頭のサイズは、日本人女性に比べ、平均して小さいことも判った。顔が小ぶりなので、胸や腰が大きくても細身に見え、日本人女性に比べ得をしている。

CAたちにとって、制服は最大の関心事である。この採寸の時間は、もう大変だ。教官が、「このサイズにきなさい」と言っても、また別のサイズを試めそうとして、なかなか決まらない。なかなか決められないのは邦人CAだって同じである。

日本人の場合と違うのは、エプロンの色の選択である。当時のエプロンは、数種類の色からの選択となっていた。邦人CAは、それぞれの色のものを一種類ずつもらっていく。ところが、ヨーロッパ人の場合は違う。金髪や白い肌には白系や黄系のものは映えないので嫌がった。その代わり、ブルー系や赤系のエプロンを選んでいった。ブルーや赤の方が白い肌や青い目によく似合う。(現在JALではエプロンは廃止となっている)

彼女たちにとって、制服一つ一つを選ぶ基準は、何といっても、いかに自分が魅力的に見えるかである。スカートのサイズを選ぶ時も、自分のウエストラインがきれいに出来る、ピタッとしたものを選ぶとする。機内では、しゃがんだりすることが多いから、もっと余裕のあるものを選ぶようにアドバイスしても、「大丈夫! 大丈夫! 」といって聞かない。このような時、邦人CAであれば、「エッ、これ! 」と思っても、教官に言われれば逆らうわけにはいかない。イギリス人CAたちは、自分のことを知っているというか、自分のことは自分で決める、という習慣ができています。教官のアドバイスも馬耳東風で、夢中になっている。

《さあ東京へ出陣》

ロンドンでの授業の最後の日、東京に行くにあたっての注意事項の説明を行った。

- (1) 冬の東京は、ヨーロッパと違って天気がよく、空気は乾燥している。ヨーロッパの冬は、雨が多くジトジトしている。ロンドンはそれに加えて霧が出ることもある。気候がまったく違う。
- (2) 生活の面では、電圧が違うのでイギリスで使っているドライヤーや携帯用アイロンは使えない。日本は100ボルトであるが、イギリスは220ボルトである。
- (3) 病気に備えて、自分がいつも使っている薬を持ってくる

ること。案の定、冬の東京は乾燥しているので、風邪を引いたり、喉をやられたりするCAが続出した。

- (4) 寮はホテルではないので、バスタオルは自分のものを用意すること。身体を洗うためのタオル(Hand Towel)も、風呂場に備えられていないので、自分で持ってくる。欧米のハンドタオルと日本の手拭いの違いも説明した。欧米のものは、ハンカチサイズの真四角なものであるが、日本では、身体を洗う時は薄い細長いタオルを使うと話した。
- (5) 日本では、建物の中では、スリッパに履き変える習慣である。寮の中も、スリッパを使用することになっている。スリッパは各自持ってくる。彼女たちは、スリッパを履く習慣はあまりないので、半分以上の人は持って来なかった。
- (6) 食料品のうち、肉やくだもの類は日本の検疫当局が持込みを許可しないので持って来ない。
- (7) 冬にもかかわらず、水着が必要なのでかならず持ってくる。なぜ水着は必要かというと、緊急避難訓練の時にプールに飛び込み、水の中で避難器具の操作訓練があるためだ。水中での訓練は、緊急避難訓練の最後に行われるが、この訓練に参加しないと終了証が貰えない。

これらの注意事項以外では、免税品の機内販売に関する授業では、通貨換算を行うので小型の電卓も持ってきた方がよいと説明した。ただし、電卓は日本で安くしかも良い製品があることもついでに話した。

日本の生活様式も、欧米化が進んでいるので、最近の日本人は、欧米を旅行しても不便を感じることも、戸惑うこともない。一方、日本の生活様式の中には、日本独自のものがかなり残っている。外国人旅行者は、日本での滞在中は、欧米スタイルのホテルを利用することが多いので、あまり不便を感じないで済んでいる。イギリス人CAたちは、旅行者のように日本の表面だけを見て帰す訳にはいかない。訓練が終われば、日本人社会の中で働くことになる。訓練期間中に、できるだけ日本人の生活習慣を知ること、必要であると考えていた。それでも、カルチャーショックを受けるのは目に見えていた。できるだけ日本の生活情報を、事前に与えるようにした。

地震のことも話しておく必要がある。地震現象を、知識としては知っている。ところが、イギリスやアイルランドには地震が

ないらしく、地震に遇ったことがないという。どの程度発生するのか、どのくらいの規模のものがくるのか、いま一つ実感が湧かないようだ。そのため、関東大震災を経験している私の母の体験を話した。それと同時に、地震発生時の避難方法についても説明した。家の中にいる時は火の始末をする。落下物に当たらないようにする等々…。会社にいるとき発生したら、教室には、全員分のヘルメットが用意してあるのでそれをすぐにかぶるように、また、町の中で遇った場合は、看板等が落下してきて危険なので、ビルの中に避難するよう説明する。今回の訓練期間中に、くしくも震度4の地震に見舞われることになった。



—次ページ続く—

第2章 東京訓練

《はじめての東京へ》

現地訓練を終え、東京に帰ってきたのは1月28日だった。彼女たちは、あと2週間ほど、現地で、日本語の基礎訓練が残っている。

帰ってきた翌日には、さっそく出社し現地訓練の報告をしなければならない。ドイツで訓練をしていた教官連中も帰ってきていた。ロンドン基地1、2期、フランクフルト基地1、2期、そして、ロンドン基地3、4期担任の私たちと、教官6人全員が揃った。東京では、すでにシンガポール基地1期の訓練が始まっている。同時に、20年の歴史がある香港基地19期の訓練も始まっていた。

訓練部では、現地訓練の話題で花が咲いていた。どうもフランクフルト基地担当の教官の顔が冴えない。予想していたのとはだいぶ感じが違うようだ。

《寄宿舍の準備》

寄宿舍には、国内線CAたちのスカイハウス寮(当時)を使うことになった。京浜急行の北品川駅から歩いて10分弱のところにある。部屋は8畳程の広さに2つのベッドと洋服入れが備え付けられている。各階には、10人が一緒に洗面をできる洗面所とトイレがある。風呂場は、1階ロビー奥にあり、共同浴場スタイルになっている。食堂は2階で、50人程が一度に食事できる広さがある。食堂のとなりにラウンジがあり、食後の団欒をとれる。洗濯は、最上階にあるランドリールームでできる。

《寮生活》

何といっても、風呂のことが心配だった。共同浴場スタイルの風呂に、ヨーロッパ人がどう反応するか予想できないところがあった。だからといって、ホテルのように、各部屋に浴室をつくる訳にはいかない。共同浴場スタイルが、どうしても嫌だという人のために、シャワールームを用意した。

食事も、検討課題の一つだった。寮の食事といえば、大抵、ひじきや肉じゃがなど、寮生がおふくろの味を楽しめるようなメニューが多い。焼き魚のような典型的な日本の食事もある。寮の食事は専門の会社に委託している。料理長に、ヨーロッパ人向けの献立を加えてくれるようお願いすることにした。

《泣きむしメーニー》

1、2期の日本での訓練が始まった。このクラスの担任たちは忙しいので、代わりに、彼女たちの寮生活がうまくいっているか、様子をうかがいに、課長と2人で寮に行ってみることにした。寮監さんはじめ、寮関係者は英語が得意でないので、1、2期が到着した夜、担任が寮施設について、ある程度説明しておいた。

ところが、説明は聞いたものの、一晩過ぎてゆっくり見回してみると、自分達の生活の仕方とあまりにも違う。洗濯機ひとつとっても、使い方が判らない。寮の人に聞いても言葉がよく通じない。親元だけではなく、国を離れて東洋にやってきたが、生活文化の違いに戸惑い、2日目にしてもうホームシックになっている娘がいる。母親の声が聞きたくなったのか、ホーイフレンドの声が聞きたくなったのか判らないが、ロビーにある公衆電話の前で泣いている訓練生がいた。当時はインターネットなどない時代である。国際電話をかけるしかなかった。泣いているのは、大人っぽい感じのメーニーだった。私たちを見ると、恥ずかしそうに逃げていった。一緒にいたキャロルに聞いたら、

「もうホームシックにかかっちゃったの！」

と教えてくれた。何人かが、すでにホームシックにかかっているらしい。

このような時、日本の女性なら、2ヶ月くらいの訓練のために、海外に住むことになっても、それほどホームシックにはならないと思う。そう想像していたので、ホームシックになっている訓練生をみて、こちらの方が戸惑ってしまった。そして、

「イギリス人ってけっこう泣くんだ！」

などと思ったりした。

《涙腺が違う》

日本人と欧米人の泣くときの姿を見ていると違いに気づく。日本人は涙が出てくると目頭を押さえる。欧米人はハンカチを鼻にあてるしぐさをする。ものの本によると、日本人と欧米人とは、鼻涙管の発達が違うようだ。涙が鼻に抜ける通路(鼻涙管)が、欧米人の方がよく発達しているので、涙が鼻に抜けやすいとのことである。そのため、涙が鼻水となって流れてくる。

《サバイバル日本語》

シンガポールや香港やフィリピンでは、町のどこへ行っても英語が通じる。シンガポールや香港は、もともとイギリスの影響を受けた国であり、考え方も欧米人の発想に近いものがある。また、フィリピンはスペインの植民地であったが、戦後は、アメリカの影響もあり、国民の多くは英語を話す。東南アジアでは、韓国と台湾とタイ、マレーシア、インドネシア、そして日本は、外国人にとって、街中で、英語が通じることが少なく、不便な国と言える。

訓練部の中にいるかぎり、教官が英語ですべてを説明してくれるので、何も不自由なことはない。ところが、町中で買物をしたり、食事をしたり、電車に乗ったりする時は、日本語でないと通じないことが多い。訓練生には、ロンドンで基礎日本語の授業をしてある。生の日本語に接して、身体で覚えるのもよい勉強の機会となる。日本で生活するのに最低限必要な日本語は覚えさせた。あとは自分たちで体験することが大切だ。実際、町で買物をしても、自分たちの日本語がけっこう通じるので喜んでた。

《通勤を教える》

当時、寄宿舎である寮から訓練部までの通勤に、京浜急行電鉄を利用させていた。今と違って、品川駅から羽田空港駅行きの直通電車はなかった。北品川駅から蒲田駅までいき、そこで同じ京浜急行の空港線に乗換えて、京浜急行羽田駅まで来る。そして、羽田駅からはバスを利用する。羽田東急ホテル前でバスを降りて、訓練センターまで歩く。寮から訓練センターまで約1時間の通勤となる。

ところが、この京浜急行という私鉄は、通勤者や利用者にとって、実に便利なダイヤを組んでいる。各駅停車から始めて急行、特急、そして快速特急まである。北品川駅は、品川駅の次の駅なので、各駅停車しか停まらない。北品川駅から蒲田駅まで行くには、各駅停車だと時間がかかるので、途中の青物横町で各駅停車から急行に乗換える。

英語で「各駅停車は」など考えながら途中の説明をしていく。Local Line (各駅停車)、Express (急行)、Limited Express (特急) があるので、乗り間違えないよう注意するのだが、肝心の電車には行き先の英語表記がない。次々に通過していく電車の色や形で説明する。「快速特急」などという英語は聞いたことがなかったので、即席英語で

Super limited Commuting Express と説明したら何とか理解したようだ。

蒲田駅での乗換えが分かれば、彼女たちだけで通勤できる。出社時の通勤方法は分かったようなので、今度は羽田から北品川への帰り方を説明しながら一緒に付いていく。定期券 (Season Ticket または Commuter Pass) の使い方も分かったようだ。蒲田駅まで来たところで説明につまってしまった。次から次へと上りの電車が入ってくる。日本人であれば、たとえ乗ったことがない電車でも何とか分かる。案内版には、急行はどこそこの駅に停まると書いてある。

外国人は、各駅停車だの準急だのいろいろな電車が入ってくるともうお手上げになる。北品川には各駅停車しか停まらないので、出勤時はそれに乗って、青物横町で隣ホームに入ってくる電車に乗り継げば、蒲田まで間違えず早く行ける。

欧米を旅行して、1人で電車に乗れるようになったら、旅行者として一人前と言える。筆者自身もイギリスやドイツで列車や電車に乗ることがあるが、この電車は本当に目的地に着くのかいつも不安になる。もし蒲田駅で急行に乗ってしまったら、青物横町駅で、特急や急行の通過待ちをしている隣ホームの各駅停車に乗ればよい。そうは言っても、電車のシステムが分らないと、何となく不安になる。簡単なのは各駅停車を利用し北品川まで行けばよいのだ。今度はどれが各駅停車なのか分らない。

乗り過ごしをしたり、急行だと思って乗ったら鈍行で時間がかかってしまったり、何度か失敗しながらも通勤できるようになった。そのうち、北品川駅や品川駅の街が分かるようになると、北品川で降りずに品川まで出てショッピングや食事をしていた。

川崎に滞在していた男性 CA 訓練生も京浜急行で通勤している。川崎駅から上り電車で、蒲田駅まで来て、空港線に乗換える。北品川駅に滞在している女性陣たちとは、反対方向から蒲田駅に向かう。川崎駅には、すべての電車が停車する。ある朝、男性 CA 訓練生たちが、なかなか出社して来ない。担任が心配して、宿泊先に連絡をとったが、すでに会社に向かったとの返事が返ってきた。心配しながらも授業を始めることにした。そうこうする内に出社してきた。どうしたのか聞いてみると、間違えて川崎で快速特急に乗ってしまったらしい。川崎駅を出た電車は品川まで停

まらない。蒲田駅を、あれよ、あれよと通過して行ってしまったそうだ。

《授業時間》

ロンドンでは、朝 9 時始まりだったが、東京では 8 時 30 分始まりになっている。1 時限を 50 分と設定し、10 分の休憩をはさみ、午前中に 4 時限、午後 4 時限の 1 日 8 時限授業なのだ。朝 8 時 30 分から 12 時 30 分までに午前中の授業を終わらせ、昼休みをはさんで、1 時 30 分から 5 時 30 分まで行う。ただし、これでは勤務時間短縮が叫ばれている時代に反するので、月水金は 7 時限授業の日として 4 時 30 分に終わる。

初日の朝、担任に連れられたロンドン基地 CA 訓練生全員が出社してきた。8 時 45 分から 1 期 2 期の開講式を始める予定になっている。大きめの教室に、訓練生全員と教官ならびに部長や課長が出席し、式次第にそってとり行われる。司会は 1 期担任が行うことになっていた。我 3 期は、まだロンドンで日本語授業を受けている。

《足ヲ組ンデイモ真面目ニ聴イマス》

当時の訓練では、習慣の違いや文化の違いによる、価値観の相違がところどころに出てきた。そのたびに訓練生から質問を受ける。聞かれれば説明しなければならない。自分達の文化を異文化の人達に説明することに、日本人は慣れていない。

授業中の足組みも、その一つである。邦人 CA 訓練生が、足を組んで授業を聞いていると、教官は注意してきた。日本人として、礼儀に反しているというのが今までの規範だった。しかし、なぜ足を組んではいけないのか、どの教官も教えてきてはいない。訓練生も足を組んではダメである、とだけ言われた。邦人 CA たちは、そういうものなのかとそれに従ってきた。

欧米では、授業中に足を組むのは、日常的であり、ごく自然のしぐさになっている。自分たちにとっては、いつもの習慣であり、それを注意されれば、「なぜなのか」と聞いてくる。日本人の場合は、疑問に思っても、年上の人が言ったことに対して、いちいち「なぜなのか」とは聞かない。教官たちも、いままで説明する必要もなかったもので、どうしてなのかと言われても、説明に窮してしまう。このようなことが「足組み」以外でも、たびたび出てきた。訓練生は、教官

はなんでも知っている、と思って純粋な気持ちで聞いてくる。

日本では、目上の者や先生が話している時に、足を組むのは失礼であると考えられている。会社の中でもそうである。例えば応接室で、ソファに座って打合せをする時、目下の者はソファに浅目に座り、足は組まないようにする。足を組む動作は、ボディランゲージ上では、リラックスしているという意味を持っているからである。目上の人の前で、あまりリラックスした姿勢をとらないのが普通だ。

授業の話しで言えば、生徒はリラックス(＝だらけている)せずに、神経を集中して講義を聴くことを要求される。それが日本の学校での授業態度となっている。

先生も生徒も、人間として平等である、と考えている欧米では、先生の前で足を組むことは失礼にならない。それより、授業中は、リラックスして聴いていた方が眠くならず、よく頭に入るというのが彼女たちの主張なのだ。授業に参加しているかどうかの問題なのだ。欧米の授業風景をテレビや映画で観ることがある。生徒は椅子の背に体をもたれかけ足を組んで聴いている。教師の方も、あまり気にかけていないようすで授業を行っている。先生は先生で、机に腰を下ろしたりすることもある。机は神聖なものであると考えてきた日本では、先生は机に腰掛けない。生徒も机に座っていたりすると注意される。といっても、日本の教室でも欧米化してきている。欧米人にとっては、机は単なる物質にすぎないのだ。

最近フライトで一緒だったロンドン基地 CA と、訓練時代の話になった。

「そういえば、教室の机は、足が組みにくくなっていました。

机の下に棒があって、足を組もうとすると膝がぶつかるの。あれは足組み防止棒だったのですね？」

《教科書を床に置く》

教科書に対してのとらえ方も違う。教科書を大切に扱うようにと教えられてきた邦人 CA 訓練生たちは、教科書を床に置くようなことはしない。

モックアップ(模擬客室)訓練では、訓練生は制服を着用して、客席に座って授業を受ける。

このとき気になったのは、その授業に必要な教科書は、客席のテーブルに出しているが、それ以外の教科書を床に置いていたことだった。制帽も床に置いてしまう。それまで

あまり気がつかなかったが、その後注意深くみていると、教室でもテキストなどを床に置いていた。

「みなさん、訓練生にとって、教科書も制帽も大切なものです。大切なものを床に置くのを見ると、日本人はあまりよい印象を持ちません」

と注意する。その場では注意にしたがってくれるが、注意を怠ると、いつの間にか自分たちの習慣に戻っている。

乗務を開始してからも、出発前のブリーフィング(Briefing 事前打合せ)のときも、邦人 CA たちは、ショルダーバッグや制帽を空いているイスやテーブルの上に置くが、イギリス人 CA たちは、床に置いていた。室内でも靴を履いている欧米の家庭生活では、床も室内の一部と考えており、汚いという感覚はないかもしれない。

《ロンドン面接試験会場で》

採用試験の面接室には、面接官の前に、椅子が 5 個並べられている。応募者は部屋に入ってくると、椅子の前に立ち、最初に自己紹介をする。そして、「どうぞお座りください」と言われてから座る。この時もまた彼女たちは、座るなり足を組む。背筋はまっすぐ伸ばして座っている。足を組んでも、この時はリラックスするためではない。あくまでも自分を魅力的に見せるためである。

日本でも採用面接官をしたことがあるが、日本では、応募者が足を組むなどということは決していない。

《キスに注意》

社会生活上で注意した点は、

- * 街中でやたらとキスをしない
- * 歩きながら食べ物を口に入れない

がある。

日本では、キスは性にかかわるもので、秘めたる行為としてみられている。したがって人前では行わないのが普通だ。欧米人のキスには、性的なものと挨拶のためのものと 2 種類がある。出会いのキスや別れのキスは、欧米人にとってみれば、挨拶程度のキスなのだ。

東京訓練が始まってしばらくして、どこからともなく、ロンドン基地 CA が寮の近くでキスをしている、という噂が流れてきた。個人生活に関わることは、本人たちの自由であるが、マスコミはじめ世間は、青い目の CA たちに注目している。寮のまわりの住民たちも、彼女たちが新しく採用された外国

人 CA たちであることを知っている。まだまだ日本では、キスは淫らな行為と見なされている。「航空会社の社員ともあろう者が、街中でキスをしているとは…」と見られるかもしれない。抱き合ってするキスについては、場所をわきまえるように注意した。

《キスの起源》

人間はどうしてキスをするようになったのか。これについて、医学博士の志賀貢氏は、本の中で次のように紹介している。「人間が狩りをして生活をしている頃、狩りに出かけるのは男、家を守るのが女と、役割が決まっていた。狩りにいった男は、獲物を追いかけるかたわら、家に残してきた妻が心配になる。

(何者かに襲われていないか)

(俺がいない間に酒や食べ物を出して

浮気しているのではないか)

と疑心暗鬼の心境である。狩りを終え、家に戻った男は、真っ先に妻の口を"味わう"。

「証拠が残っていればすぐに分かるはずだ」

これが狩猟民族たちのキスの起源らしい。

同博士は、独自の推測として、「男はまさか疑っているとは口にさせまい。そこでキスを愛情表現とか、一種の挨拶だとして女房を納得させたのではないだろうか。やがて周囲に広がり、現在につながっている…」

(資料)「ドクター志賀のウミミミな雑学」永岡書店

《挨拶のキス》

現在のイギリスでは、挨拶のキスは頬にする。これをチークキス(Cheek Kiss)と呼んでいる。相手の唇にキスするのは恋人同士や夫婦くらいのものだ。ところが 1400 年代から 1500 年代にかけてのイギリスでは、挨拶のキスも相手の唇にしていたのだ。その頃、ヨーロッパの他の国では、挨拶で相手の唇にキスをする習慣はなく、イギリス人の唇へのキスによる挨拶はとても珍しがられていた。今では、キスといえば「フレンチキス」と呼ばれるほどキスが好きなフランス人でさせ、当時は、挨拶のとき、相手の唇にキスすることはしなかった。そのキスも、イギリスでは 1500 年代の後半には姿を消してしまい、現在のスタイルになってしまった。

15 世紀には、挨拶の時さえ、相手に接触することを好んだのであるが、現在のイギリス人は、ヨーロッパ人の中で、相

手との接触が一番少ない国民になっている。イギリス人は、挨拶のときでさえ、相手の頬にキスした方がよいのか、握手だけにとどめた方がよいのか迷うそうだ。

このよい例が、 cheekキスの回数である。フランス人が、挨拶で cheekキスをするときは、ダブルキスといって、最初は左の頬、つぎに右の頬へと2回する。オランダ人とベルギー人はこれを最低3回は繰り返す。スウェーデン人は1回だけで済ます。イギリス人も同じで、1回なのだ。我が訓練生たちが帰国するとき、空港まで見送りに行った。出発の時間になると、全員がお別れのキスしてくれた。やはり1回だけだった。キスの仕方でもヨーロッパのどの国あたりの人か分かるのだ。資料「ヨーロッパ人人の奇妙なしぐさ」ピーター・コレット著 草思社

《歩きながら食べる》

歩きながら食べ物を口にするのも、イギリス社会ではごく普通の光景となっている。タミ文化の日本では、食事はタミに座って食べるものとされてきた。また、日本のたべものは、麺類に代表されるように水もの(汁もの)が多く、歩きながら食べるのには向いていない。一方、欧米では、サンドイッチ、ホットドッグ、ハンバーガーのようにドライな食べ物が主流なので、歩きながらでも食べることができる。狩猟中、馬に乗ったままでも食べられるものが、必要だったのかもしれない。アメリカ西部開拓時代も、何日も幌馬車に乗りつづけて西部に向かうのであるから、保存が効くドライな食品が必要だったのだ。

《無賃乗車》

最近の改札口は、コンピューター化しているので、乗越し運賃を精算しないと改札口を通過できない。当時は、駅員に定期券を見せる方式だった。我が教え子たちは、京浜急行の羽田・北品川間の定期券を渡されていた。最初の頃は、右も左も分からなかったので授業が終われば、まっすぐ寮に帰ってきた。東京の状況が分かりはじめると、品川駅のまわりはけっこうおもしろそうだ、帰りに行ってみよう、ということになる。寮は品川駅からでも歩ける距離にあった。定期券で品川駅まで行ったのだが、清算をどのようにすればよいかわからない。だれかが北品川までの定期券で品川駅を降りてしまったところ、駅員は何も言わなかったらしい。「平気よ」ということが広まった。何人かが乗り越し清算をし

ないで、品川駅を降りているらしいと、筆者の耳に入ってきた。さっそく注意することにした。

外国人が日本にきて、日本のルールに従わないとき、日本人はどう対応してよいのか困惑してしまう。つい語学の問題が立ちはだかってしまう。ずるい外国人は、日本語が分からないフリをして、その場をやりすごすことがある。日本人であれ、外国人であれルールに反していれば、毅然とした態度で注意をすることが必要だ。なにも英語で言う必要はない。日本語で注意してよいのだ。外国人をお客様扱いして甘やかすことなく、日本にいるかぎり、一市民としての行動を要求することが、外国人を平等に扱うことになる。

《私好ハ淫ヲ女デハアリマセン》

訓練生たちは、廊下でだれかとすれ違うときは、声を出して挨拶するよう教官から言われる。

彼女たちの習慣では、会社の中で、同じ社員といえども、よく知らなければ、「コンニチワ」と声を出してまで挨拶することはしない。また、見ず知らずの相手にニコニコすれば、誤解されるのが関の山である。そんなことをすれば、色目を使う女性と誤解される社会で生きてきている。

職場で女性社員が、だれかれ構わずに、「おはようございます」と挨拶をしているのは、日本では普通の光景になっている。

ヨーロッパ人も、もちろん知っている上司や同僚には、「Good morning!」とか「How are you?」などと言う。これは上司と部下、または同僚同士の関係においてなされている。しかし、無記名の相手に対しては、やたらとニココしたり、声をかけたりしない。

日本と欧米では、挨拶をする時の動作に大きな違いがある。日本では目が合えば、「おはようございます」と言って、すぐに頭を下げ視線をそらす。いつまでもニココして相手を見つめている必要がない。そのため、誤解されずにすんでいる。欧米では、挨拶の時に頭を下げることはしないので、いつまでも相手を見つめることになる。そのような動作を、知らない相手にすれば誤解される訳である。

それでも航空会社の顔として活躍してもらうためには、不特定の相手に対して挨拶ができるようにならなければならない。行動の習慣化をつけさせるために、これも訓練の一貫である旨、最初に話している。

実際には、習慣の違いから、こちらが思うとおりにでき

なかった。この時期の訓練部は、外国人の訓練生ばかりで、手本になる邦人 CA のタコたちがいなかった。イギリス人、ドイツ人、シンガポール人、中国人の CA 訓練生でこった返している。つい彼女たちの習慣で過ごすことになってしまう。

その後の訓練で、ある時、他のクラスがほとんど邦人ばかりのときがあった。邦人 CA のタコたちが、廊下で大きな声で挨拶をしている。その姿を見て、外国人 CA 訓練生も、あれが日本のやり方なのだとまねをするようになった。教官が言葉で一生懸命に説明しても、なかなか実行できなかったことが、日本人の集団の中に入れることで、挨拶ばかりでなく、他の日本の習慣も真似るようになった。いろいろな場面で、日本人がよく使う、「よろしくお願いします」という言葉もタイミングよく使えるようになった。

《私ハ敵デハアリマセン》

このように書くと、彼女たちが全然挨拶をしないかのように取られるかもしれない。彼女たちの弁護をしておいた方がよさそうである。

欧米は、多民族の集まりで成り立っている。また、ヨーロッパ社会では、征服したりされたり歴史が繰り返されてきた。イギリスもケルト人に始まり、そこにゲルマンの一部族のアングロサクソンが入った。11 世紀のノルマンコンクエストでは、ノルマン人がアングロサクソン系の王室を破り、それ以降ノルマン人が王室を引き継いだ。それとともにノルマン系の商人や騎士が入り込んできて、アングロサクソン系の人達と混ざり合ってきた。紀元前にはローマ帝国の侵略を受けている。

ヨーロッパは、768 年に即位したカール大帝（ドイツ名）によるゲルマンの統一があり、その後、それぞれの民族にナショナリズムが台頭し、別々の国家となったのである。その後も、中世から近世にかけて、戦いに明け暮れてきた。このことの反省からかどうかわからないが、欧米社会では、つねに自分は敵ではないことを表現する必要があった。手の中に武器を持っていないことを意味する「握手」も、そのような背景から、現代社会の重要なマナーになっている。異民族の集まりであるアメリカ人は、特にそうであるが、エレベーターに乗り合わせた時などニコッとする。自分の存在が相手を不安にさせるような時には、目が合うとニコッとする。日本では、知らない他人にニコッすることはほとんどない。むしろジロツと相手を見る方が多い。

《捻挫って何て言うの!》

泣きむしメーニーが、1 日の訓練が終り、会社を出ようとしたところ、階段を踏みはずし捻挫(Sprain Ankle)した。さあ大変である。何が大変かというと、医者連れていくのも担任教官の役目だからだ。日本人ならば、自分で医者にも行ける。メーニーは退社時に捻挫をした。この時間には病院はもう閉まっている。このような時、日本人だと痛くても「大丈夫ですから心配しないでください」ということが多い。その晩は湿布薬を貼ってようすをみる。

イギリス人は痛さに対して弱いことは冒頭で紹介した。涙を流さんばかりに、「もう歩けない」と訴えてくる。痛さに対する感じ方がまったく違う。日本人は、昔から、痛みに対しては、我慢するようしつけられてきている。ちょっとくらいの痛さはガマンできる。イギリス人 CA たちは違っていた。

そこまで言われると、担任としても放っておくわけにはいかない。近くに救急病院がないか調べ、電話をかけ、診察をしてくれるか確認し、さっそく連れて行かなければならない。そして病院まで付き添っていく、さらに、今度は通訳をしなければならない。医学関係の英語は、専門的な単語が多いので、辞書を持って行く。治療が終われば、訓練生を送って行くか、一緒に付き添ってくれた同じクラスの訓練生とともに、タクシーに乗せて寮まで帰さなければならない。

《エッ、日本デハ治療費必要ナ!》

ドイツ人やブラジル人は、病気で欠勤することはほとんどなかった。ところがイギリス人の場合は、たまたまだったのかもしれないが、風邪をひいたり喉を痛めたりする訓練生が続出した。問題が発生したのは、治療費の扱いについてだ。会社の中には、最新の設備が整った診療所もある。整形外科、内科、精神科、耳鼻科、眼科の医師、それに最新検査機器である MRI やレントゲン設備もある。また、航空医学の専門医も常駐している。勤務時間内であるならば、会社の診療所に行けばよい。ところが時間外のときは、社外の診療施設を利用せざるを得ない。当然、そこでは治療費が必要となる。

ところが、外国人 CA の場合は、日本の健康保険に入っていない。そのため治療費を全額請求されることになる。訓練生自身も、海外旅行保険に入ってきていない。病気になったら訓練生自身が治療費を払わなければならない。この治療費というのが、ちょっとした病気でも、けっこう高

い。私たちは、健康保険があるので、初診料と治療費の一部を払えばよいが、イギリス人 CA たちの場合は、全額本人負担となる。

治療費の支払いについては、訓練生から、なぜ自分たちが払わなければならないのか、とブーブー言われた。イギリスでは、一部の私立病院を除き、治療費はすべてタダになっている。外国人といえども無料で診療してもらえる。「ゆりかごから墓場まで」と言われているように、社会福祉については非常に発達している。彼女たちの感覚では、病気になっても、治療費のことは頭にない。それが、訓練で東京に来ている間に病気になったら、高額な治療費を自分達で払え、と言われ頭にきている。

治療費の件については、今回の訓練から、訓練生が日本に来る前に、旅行保険に入らせることにした。傷病関係の保険は、訓練中のみならず、乗務を開始すれば、海外滞在中に病気になることもある。いずれは必要になる。邦人 CA も、日本の健康保険がきかない海外滞在中の病気に備え、会社で保険をかけている。アメリカなどで病気になったならば 10 万円単位のお金が必要になる。

《喉が痛い》 sore throat

1 月から 2 月にかけての東京は、晴れた日が続き、湿度も低く乾燥している。一方、この時期のロンドン、雪こそ降らないが、とにかく寒くてシタシタしている。空はどんよりとしており、冬場に太陽を見ることは少ない。寒くジメジメしている国から来た彼女たちにとって、東京のカラカア天気は 180 度違う環境となる。乾燥しすぎて、ノドの痛みを訴えてくる訓練生が、これまた続出した。ノドをやられている人には、授業中、ノド飴をなめることを許可した。いつでも渡せるよう、担任も、生協売店で、訓練生のためにノド飴を買ってきた。邦人 CA もノドをやられることがあるが、それ以上にロンドン基地 CA は、ノドがあまり強くないようだ。ノドが弱いから風邪にやられることになる。3 分の 1 の訓練生が風邪気味となり、その内の何人かは発熱し欠勤した。休まれるくらいなら、授業中、ノド飴くらいというのが担任の思いだった。

《"湯冷め" って英語あるの！》

彼女たちは、「風邪」のことを、英語でフルー(Flu 流感)と呼んでいた。風邪をひくもう一つの原因がある。風呂上がりである。寮の風呂場は、大浴場スタイルになっていて1階に

ある。見ていると、彼女たちは、風呂を上がるとバスタオル一枚で部屋に上がろうとしている。部屋は暖房が充分効いているが、ロビーや廊下はそうでもない。邦人 CA たちは、女性であることもあり、風呂場へは銭湯にいくのと同じ感覚でいく。着るものも厚手のものであり、風呂上がり後も、ちゃんと着ている。ヨーロッパ人の生活習慣では、風呂を上がった後、家の中は暖かくしているので、バスタオル一枚でも問題ない。しかも、風呂は身体を温めるために入るのではなく、身体をきれいにするために入る。したがってシャワーを浴びて終りという具合だ。身体もそんなに温まらず湯冷めをすることもない。そのような生活になれている彼女たちなので、つついバスタオル一枚で、その辺をウロウロしている。はじめの内は湯船に入ることに慣れなかった彼女たちも、みんなで湯船に入るのが楽しいことだと分かり、温泉気分風呂に入るようになった。そしてじゅうぶん身体を温めて出てくる。そのため、湯冷めをしてしまう。

《God bless you》

日本では、誰かがくしゃみをして、まわりの者は何も言わない。強いて言えば、くしゃみをしている子供をみて、母親が「寒くないの、なにか着なさい」というくらいだろう。

彼女たち社会では、誰かがくしゃみをする、"God bless you"と声をかける。声をかけられた方は、"Thank you"とお礼を言う。このときの "God bless you"は、「神のご加護あれ」ではなく、「お大事に!」という程度の意味になる。

英語圏では、だれかがくしゃみをする、一分間心臓が止まると言い伝えられているので、止まらないように祈ったのが習慣になったようだ。もし、くしゃみをして、周囲の人からこの言葉を言われたら、"Thank you" と礼を言うのがマナーとなっている。

《共同浴場は楽しい》

共同浴場スタイルの風呂に、最初の頃、馴染めなかったイギリス人 CA たちも、日本人の様子を見ているうち、少しずつ湯船に入るようになった。そのうち、温泉気分を味わえる風呂場は、話し好きのイギリス人 CA たちにとって、ちょうどよい社交の場となり、風呂を楽しむようになった。

北欧では、サウナは盛んである。もちろん、お互いバスタオルを身体に巻き付けている。サウナも一緒に入る点では、浴場

とそれほど違わない。イギリス人もドイツ人も、慣れてくると、共同浴場スタイルのお風呂に入るのをそれほど嫌がらなくなった。ただし、ドイツのサウナには、日本のサウナのような洗い場はない。身体を洗う時は、別の場所にあるシャワールームの中で洗う。シャワールームは個別になっているので、洗っている姿を他人に見られることはない。

実は、共同浴場スタイルの風呂で一番困っていたのは、中国系が多いシンガポール人 CA や香港中国人 CA だった。彼女たちの担任(女性)によると、中国系の人達は、母親や姉妹とでも風呂に一緒に入ることはないらしい。ましてや他人に自分の裸を見られるのは、ぜったい嫌だという娘が何人かいた。彼女たちの担任によると、日本に到着して間もない頃、ほとんどの娘たちは、下着をつけたままで浴場内に入り、湯船には入らずにまっすぐ奥にあるカーテン付きのシャワールームに飛び込む。そこで下着をとりシャワーで身体を洗っていた。湯船に入るのに水着をつける娘もいた。

シンガポール人 CA の担任に聞いたところ、風呂場での日本人の行動について、彼女たちの印象は、次のようなものだった。

- *脱衣場で他人の目があるのに真っ裸になれる。
- *裸になっても友人同士でお喋りをしている。
- *恥ずかしがるそぶりを見せない。
- *背中を流し合っている。
- *ゆっくりと時間をかけて入浴をしている。
- *腰掛けに座ったままで身体を洗っている。はじめ、腰掛けが何のためにあるのか分からなかった。
- *湯船がとても熱いのに平気で入っている。
- *他人がいるところで、平気で自分の大事なところを洗っている。

皆と一緒に湯船につかるのが楽しいと言っていたロンドン基地 CA たちも、他人がいるところでは恥ずかしくて、自分の大事なところを洗えないと話していた。あるドイツ人 CA が独り言のようにつぶやいていた、「立ち上がって洗わないと、大事なところがよく洗えないです!」

《門限時間》

この寮が開設して以来、門限時間は、夜 11 時と決められていた。この寮にいる邦人 CA たちは、決まりだから仕方

がないと、この門限時間を守ってきた。といっても六本木あたりで遊んでいたら、夜の 11 時は、これから興がのってくる時間であり、「門限が 11 時なので先に帰ります」などと言ったら、仲間からひんしゆくを買ってしまう。そこで門限までに帰ることができないときは、つい朝までいることになる。門が開くころを見計らって帰ってくる。中国人 CA やブラジル人 CA は、門限時間を過ぎてまで、夜通して遊んでいることはなかったので、門限時間事件が起きなかった。

ところが、ロンドン基地 CA たちが入寮するようになって、門限時間の問題が起こった。ロンドン基地 CA たちは、門限時間があるのはおかしいと言ってきた。彼女たちに言わせると、寮生活を送るのが子供たちならいざしらず、自分たちは大人である。自分たちを大人として扱ってほしい。また、訓練はきびしいのでストレスがたまる。どこかで思いっきり発散したい。そのためにも門限時間を緩和して欲しい、というものだった。

「君たちは、CA になるために訓練を受けている。会社は、君たちが訓練に専念してくれることを希望している。夜遅くまで外出していると、次の日の訓練に影響が出てくる。門限は守ってもらいたい」

門限を夜 11 時にしているのは、それなりの理由があった。ひとつは寮監さんたちやガードマンの勤務時間の問題だった。門限時間を遅くすれば、11 時以降のために新たにガードマンさんを雇わなければならない。それだけ、寮の管理費がかかることになる。また、この寮は女子寮であり、日本の発想では、会社は親御さんから娘さんたちを預かっているという思いもある。そのため、預かっている娘さんたちに何かあってはいけなと考え、門限を 11 時に決めていた。深夜に出入り自由にしておくのは物騒なので、11 時になると門を閉めていた。

「どうしてもダメなら、せめて週末だけでも、門限時間をなくしていただませんか。お願いします!」

訓練部内で検討した結果、部長からも、「週末だけならいいだろう」と許可がでた。部長から OK が出ても、寮は、社員の福利・厚生を扱う本社部門の管轄となっている。幸いなことに、担当部もこころよく協力してくれ、新たに雇うガードマンの予算もとってくれた。次の週から、週末は門限を気にせずに、思いっきり息抜きができるようになった。寮住まいの邦人 CA たちからも、週末だけとはいえ、朝まで待つて

帰寮する必要がなくなったので感謝された。

《規則とルール》

問題が起きると、何でも担任に言ってくる。彼女たちにしてみれば、何でも話せるのが担任なのだ。そこで担任も、第一声は、現行規則つまり会社の意向を守るように伝える。そうは言っても、ヨーロッパ人 CA 訓練は初めてであり、なにもかも手さぐり状態である。今までのやり方は、日本社会だけに通用するものだったかもしれない、という気持ちもある。欧米人を雇うようになれば、欧米人にも通用する規則が必要になってくるかもしれない。問題が起きるたびに、彼女たちと話し合いを行うようにした。そして、彼女たちの言い分が納得のいくものであれば、教官会議にかけ、課長、部長も交えて検討をする。彼女たちの言い分が、説得性があるからといって、何でも欧米スタイルにするわけにはいかない。ここが、間に入った担任が苦勞するところなのだ。場合によっては、ルールはルールと言って規則を変えないこともある。むしろ、日本の会社の社員として働いてもらう以上、会社の方針に従ってもらうしかない。それに従う、従わないは本人が決めることである。企業独自のルール、社会規範としてのルール、社会価値観としてのルールいろいろある。国が違っても社会規範はどの国も共通の部分が多い。社会規範にかかわることについては、あまり問題は起こらない。しかし、価値観の違いと企業独自のルールについては、育った環境によって相違が出てくる。門限問題もそのひとつだった。

《八百屋から苦情》

あるとき、駅前の八百屋さんで、邦人 CA たちが買い物をしていると、その店主に苦情を言われたと報告が入った。話を聞いてみると、「シンガポール人 CA が、買う前に、くだものや野菜をよく触るので困る」と言っているとのことだった。

シンガポールでは、たしかに生鮮食品を買う前に、品物を手にとって品定めをするのが習慣になっている。少しでもよい品を見つけようと、ひとつひとつ手にする。日本の店先でも主婦たちがくだものを触ることがあるが、あれこれ手にしない。そこにおいてあるくだものの中から、せいぜい一つだけ手にとってみて、よければ買う。店側も、同じ山になっているくだものは、どれも同じだと自信を持って置いている。

それを、あれもこれも触られたのでは、かなわないというのが、店主の言い分なのだ。店先での買い物の仕方の違いが、八百屋さんで起きた。

《タバコのマナー》

当時、日本でも、タバコを吸う女性がけっこういたが、ヨーロッパ人女性もよく吸っていた。私のクラスでは、半数近くが吸っていた。休憩時間にお茶をしながら一服している。タバコを吸わない娘たちも、タバコの煙をあまり気にしていない。

彼女たちは、自分が吸いたい時は、必ずまず相手に 1 本すすめる。それがひとつのエチケットになっている。当時のイギリスでは、タバコの値段が日本の倍以上した。値段が高いのに相手に勧めるのは、相手が、タバコを吸うのか吸わないのかを確認する手段にしている。吸わない相手であれば、1 本勧めたことによって、タバコを吸う許可を暗黙のうちに得ているようだ。吸う相手には、「1 本いかが」と本当によく勧める。それがひとつのコミュニケーションになっている。日本では、相手にタバコを勧めることはあまりしないが、彼女たちがタバコを吸うときの習慣も違っていた。そういうロンドン基地 CA たちだったが、時代が変り、タバコを吸う女性も減ってきている。

《嫌煙権事情》

米国、特にカリフォルニアやニューヨークやハワイは、喫煙者にとって、居心地がよくない街だ。

その点、ヨーロッパの国々では、タバコに対してもっと寛容的なところがあった。ドイツでは、政府が国内区間全面禁煙の法律を作ろうとしたところ、国民からかなりの反対意見が出たと、日本の新聞が報じていたのを思い出す。その理由は、タバコを吸う人たちはタバコ税を払っている。国もタバコ税があるお陰で助かっているではないか。なんでもかんでも禁煙というのは反対だ、というのがドイツ国民の考え方のようなので、と新聞が報じていた。このような国民性なので、街中のほとんどのレストランでは、タバコが吸えた。

乗務でフランクフルトに行ったとき、邦人 CA たちと、ハイデルベルグに観光にいった。ハイデルベルグは、フランクフルトから特急電車で約 2 時間のところにある。列車に乗ったとたん、うれしかったのを覚えている。その特急は、典型的なヨーロッパスタイルの客車で、内部は 6 人掛けの個室になっていた。ところが、うれしいことに、客車の中央が透明ガラスで仕切られて

おり、前方半分は禁煙席、後方半分は喫煙席となっていたのだ。もちろんお互い行き来ができるようになっている。ドアも透明なのだ。

なぜうれしかったかというと、何人かでの旅行では、皆で同じ客車にいたい。そのため、たいてい禁煙車が喫煙車のどちらかにしなければならぬ。喫煙車にすれば、タバコを吸わない人達が我慢をしなければならず。禁煙車にすれば、喫煙者が我慢をする。

この列車では、タバコを吸わない人も吸う人も、透明ガラスを間にして、お互い近くに座っていることができた。喫煙者もタバコを吸わないときは、禁煙席の仲間と一緒にたのしく過ごせるし、吸いたければ喫煙席側にいけばよいのだ。ドイツでは、なんでもかんでも禁煙ではなく、お互いが共存できるようにしている。フランスも、アメリカがやることをあまり真似しない国の一つだ。花が咲き乱れる頃でも、落ち葉の頃でもパリのカフェでお茶するのはなんともよいものだ。冬、パリの街を散策している途中に立ち寄るのもよい。筆者も、カフェでカフェオレでも飲みながら、読書するのが好きだ。

カフェは、お茶だけでなく、お酒も飲める。フランスのカフェは、お茶にしてもお酒にしても、タバコの煙をくゆらしながら楽しむものだ、と言わんばかりに、どのテーブルにも灰皿が置かれていた。

ヨーロッパでも、禁煙政策をとっている国は多い。しかし、人々が楽しんでいる時や場所でまで、禁煙を強いていない。これらは 1990 年ごろの話である。

《ドイツ人 CA の採用》

イギリス人 CA の東京訓練に引き続き、ドイツ人 CA の訓練も始まった。ロンドン基地の場合と同じように、1 期を男性教官、2 期を女性教官が担任する。ドイツ人 CA は、主に、北ドイツ出身者を採用した。会社のドイツにおける拠点がフランクフルトにあったのも理由の一つである。

北ドイツの人たちは、工業の発達した北ドイツの方が、南ドイツよりレベルが高いと言ってはばからない。反対に、南ドイツ出身者は、北ドイツが好きでないと。日本でも、関東人と関西人はお互いに張り合っている。それに似たようなところがドイツにもある。なにも日本やドイツだけではなく、北と南、西と東は、どの国でも、お互い張り合っている。国と国の関係でも、南北問題や東西冷戦のように、歴史の中でも紛争が絶えなかった。

ドイツ支店と本社の客室担当部門でいろいろ検討した結果、主に北ドイツ系の人たちを採用しようということになった。ヨーロッパ人 CA の採用は、初めての試みである。ドイツ支店側も、何とか成功させたい、との願いもあった。フランクフルト支店側も熱が入っていた。日本人たちとうまくやって欲しいとの願いもあった。当時の邦人 CA は、若い人達の場合、10 人中 7 人前後が、大卒で占められていた。

《アビチュアー》

当時のドイツでは、大学、短大に行く人は、10 人中 0.8 人前後だった。ちなみに、日本では 4 人以上進学していた。最近では、ドイツでも進学率が高くなってきている。ドイツも国際競争に勝つためには、高い教育レベルが必要である、という風潮が高まってきている。

ドイツでは、大学に行くためには、「アビチュアー」(Abitur)という大学入学資格試験に合格しなければならない。この資格試験は猛烈にむずかしく、パスすると、自分の好きな大学に応募できる制度になっている。一旦入学しても、途中で違う学問を勉強したければ、別の大学に変更することもできる。

レベルの高い人を採用したいのだが、大卒がそんなにいる訳ではない。大学まで出て CA になる人もほとんどいない。大卒からの応募があっても、ほとんどは転職者であり、25 才を過ぎてしまっている。やはり、そこは日本の航空会社である、できれば CA は若い方がいい。就職を有利にするために「アビチュアー」をとっている人がけっこういる。大卒でなくとも、「アビチュアー」を持っている人を中心に採用したのだ。この採用条件が、担任教官にとって、なんとも大変なことになるのである。

《私ゼツタイ嫌ナノ》 お辞儀=Bow

日本式の起立・礼について、ロンドン基地 CA の時は、特に問題にならなかったが、ドイツ人 CA 訓練生の間でトラブルが発生した。現地訓練でも、日本のやり方に慣れてもらうため、授業の始めと終りには起立・礼をさせることにした。また、日本のマナーについての授業も行った。お辞儀の仕方や座り方、歩き方、さらに日本で、女性が求められる立ち振舞いについての授業もある。その中には、女性が公衆の面前で煙草を吸うと、どのように見られるか、と言うようなことも含まれている。

ところが、ドイツ人 CA の何人かが、日本式の礼をするのは絶対にイヤだ、と言っている。ある訓練生は、泣いてまで抵抗し拒否している。担任も困ってしまった。東京訓練の開講式は、日本式で進めなければならない。そして、日本のやり方を教え、それをさせるのも担任の仕事なのだ。訓練部長が出席する開講式までには、日本の礼法を覚えさせなければならない。邦人 CA ならば、教官が何かを言えば、素直に指示に従うのだが、ドイツ人 CA はそうはいかない。

「どうしてそんなやり方で挨拶をしなければならないのか」と抵抗している。

邦人クラスでは、日本文化についての授業はないので、教官たちも、日本文化についてあらためて勉強している訳ではない。日本人が挨拶の時、なぜお辞儀をするのか、今まで考えたことがないし教えて来てもいない。一方、邦人 CA たちには、国際人として恥ずかしくないよう欧米マナーを教えている。なぜ欧米では、握手をするのかは教えている。ところが、日本式のお辞儀は、どのような理由から頭を下げることになったのか誰も知らない。知らないけれど、正しいお辞儀の仕方を、いつの間にか身につけている。

《私はストリッパーではアリマセン》

はじめのうち、どうしてドイツ人 CA たちがお辞儀を嫌がるのか判らなかつた。それより、邦人 CA たちなら、素直に従ってくれるのに、ドイツ人は頑固でやりにくい、という感情が教官の間に広がってしまった。

「いちいち聞かれたって分からないわよ」

という思いが先にたち、何人かの教官がイライラしている。担任は、一生懸命説明するのだが、うちがあかない。ドイツ人 CA と教官の間でやや陰悪なムードが漂ってきた。訓練課長も困ってしまった。

訓練当初の段階から、感情の行き違いが起きてしまっている。それでも根気よくドイツ人 CA たちと話しを続けた。すると、あるドイツ人 CA が教えてくれた。

「お辞儀をする動作は、ストリッパーのしぐさによく似ているので、ドイツでは絶対しない」

とのことだった。頭を下げることも嫌だが、その時に、両手を前で重ねる動作がどうしてもできない、ということが分かった。

その昔、アダムとイブは裸だったので、自分の大事なところ

を両手で隠していた。現代では、裸になり大事なところを隠すしぐさをするのはストリッパーだけなのだ。教養ある者は、そのようなしぐさをしないというのが、彼女たちの言い分だった。なぜ嫌がっているのか分かり、「そうだったのか」と変に感心してしまった。

ある時、何気なく NHK ラジオの文化講演会を聞いていたら、当時、通訳として日本で第 1 人者の松村増美さんが講演をしていた。話の内容はアメリカ留学中の体験談だった。ある時、スピーチコンテストに出ることになったそうだ。壇上でスピーチをする時に、してはいけない動作ということで、やはり同じことを話していた。彼が、教授に注意されたことの一つに、壇上で挨拶をする時や話をする時は、絶対に両手を体の前で組んではならないということだったそうだ。日本人にとってはごく自然の動作であるが、欧米にとっては違和感のある動作であり、観衆の目がそっちの方に行ってしまう、折角のスピーチも台無しになってしまうそうだ。

《命を差し出す》

ドイツ人 CA たちが、なぜお辞儀するのを嫌がるのか判明した。彼女たちの言い分もうなずける。それでも、日本の航空会社で CA になる以上、お辞儀は不可欠なものとなる。何とか説得しなくてはならない。ドイツ人は論理的思考を大切にしている民族と聞いている。「お辞儀」を論理的に説明できないだろうか、いろいろ調べてみた。お辞儀の角度は何度だとか、お辞儀はゆっくりしなくてはいけないとか、その仕方はマナー関係の本にいくらでも書かれている。ところが、どの本も、お辞儀の動作自体が、何を意味するかについて書いていない。ひとつだけ分かったのは、その昔、平民は天子の顔を見てはいけない、というのがあった。

そこで、欧米人の挨拶のひとつである握手に、何かヒントがないか考えてみた。握手は自分が敵ではないことを示す動作である。お辞儀も同じように、自分が敵でないことを示す動作ではないだろうか。お辞儀の動作は、相手に首を差し出す動作である。お辞儀して頭を下げるというのは、自分の身体の中で一番弱いところ(一番大切なところ)を相手に見せる動作である。そこを殴られれば死んでしまうかもしれない。ということは、お辞儀をすることにより、相手に命を差し出すという意味になる。そして、それは相手に敬意を示す、ということになるのではないか。また、手を組むのは、手を押さえていますので、あなた様に危害が及ぶこ

とはないですよ、と表現しているのではないか。もしかしたら勝手な解釈かもしれないが、おおむねそれに近いのではないだろうか。それ以後、ヨーロッパ人 CA たちに対して、「お辞儀は相手に敬意 (Respect) を示す上で、日本でもっとも大事な動作である」と教えるようになった。

はじめの頃、抵抗していたドイツ人 CA たちも納得してくれた。自分たちの価値観で、相手の文化をみると、異文化摩擦が起きる典型的な例だった。

「背広とちょんまげ」(加藤英明、アントニー・ホルバート共著)によると、

『西洋人はお辞儀をするのに強い抵抗感を覚える。あるアメリカの外交官は、ある時、東南アジアの某国の国王から勲章を授けられることになったときに、この地域の習慣に従って、頭を下げるように前もっていわれたが、直立したままですませた。この外交官は「私は人間に対しては頭を下げない」と語った』

『ヨーロッパにおいても、長いあいだ人々がお辞儀をした時代もあった。今でも、ヨーロッパの宮廷やドイツやオーストリアの上流階級では、頭を下げるという習慣がある。東西の違いといえば、西洋では軽く頭を下げるということである。ヨーロッパで、人々が近代に入ってからお辞儀をしなくなったのは、お辞儀が封建制度 (Feudalism) と結びついた後進的なものであって、近代民主社会にふさわしくないと見なされたからである』

同じ顔をしているからといって、相手が味方であるとは限らない。自分は自分で守る精神がはたらく。やたらと他人に対して自分の弱み(頭を差し出す)を見せないのが、欧米人の生き方のようだ。

《制服受領》

東京での訓練が開始されて早々に、ロンドンで採寸した制服の準備ができたと連絡がきた。さっそく、訓練生を連れて制服センターに行くことにした。

ロンドンでの採寸時に決めたサイズの制服を受領し、試着するのだが、どうも合わない、と何人かが言っている。

まず、腕の長さが違う。欧米人は日本人に比べ、腕が長い。というよりは、日本人の胴と腕の長さの割合と、欧米人の割合が違う。通常、上着のサイズは、丈の長さで袖の長さ

も決まる。必要に応じて、袖丈を長くしたり縮めたりするが、吊るしの服でも、日本人であれば、あまり袖丈の調整をしなくて済む。

日本人旅行者が、欧米で洋服を買うとき、袖丈が長すぎて困るのは、反対の現象だ。袖が長いのは詰めればよいが、短いのを長くするのは限界がある。何人かは袖が短すぎて特注せざるを得ない。あと 2、3 日すると、制服を着用しての訓練が始まるが、間に合わない。制服がもらえないとしょげている。

制帽も合わない。ロンドンでは、彼女たちの頭のサイズが小さいのに驚いた。案の定、用意してある一番小さいサイズの帽子でも、大きすぎて困っている訓練生がいる。やむを得ず、一番小さいサイズを貸与したが、何となくしっくりしない。顔の前面から耳までの長さも違うので、余計しっくりしないのかもしれない。日本人に比べ、やや長いことも分かった。

《私ダイエット中ナ》

体型も、日本人やアジア系の人達と欧米人で違う。胴長短足の日本人に比べ、欧米人は足が長いことは、誰でも知っている。もうひとつ違う点がある。欧米人は、油断をする tendency がある。そのため、ロンドン基地 CA の場合、肥満度が一定の割合を越えてしまうと警告書が手渡されるシステムを採用した。

久しぶりに教え子に会うと、昔のスラッとした面影がすっかりなくなってしまっている者がいた。腰まわりが太くなっている。顔は相変わらず小さめであり、膝から下は細いのだが、腰まわりに肉がついてしまっている。彼女たちは、最初に、腰に肉が付きはじめ、その後、序々に上半身全体が太りはじめる。ちなみに、英語では、「太る」を "Gain weight" といい、「体重を得る」という意味になる。

欧米人の場合は、体質的に太る傾向にあるので、常に注意していないとダメなのだ。イギリス人 CA たちは、食べ物に注意しており、特に、脂肪分や糖分の摂取を控え、野菜類を好んで食べている。筆者自身は甘いものが好きで、チョコレートや和菓子に目がない。それらを教え子たちにすすめるのだが、断られることが多い。そして、一人前の CA になった後も、彼女たちは東京滞在中、時間があると感心するくらいフィットネスクラブに通っている。それくらい努力していないと太ってしまう。

これは、体質と食べ物の違いによる。モスクワで食事をした次の日は、便の色は真っ黒になる(汚い話でスミセン)。寒い国では、その寒さに耐えるために、脂肪分やカロリーの高い食品の摂取が大切となる。ロシア料理では、ボルシチというスープを飲むと分かる。おいしいがとても油っぽい。料理は、一般的にカロリーの高そうなしつこい味のものが多い。世界 3 大珍味のひとつであるキャビアもそうだ。あまり食べると鼻血が出そうになる。寒さと戦うために摂取した脂肪も、代謝が悪ければ、身体中にたまってしまう。

イギリスも、平均気温は日本に比べ低い。そして、日本より寒くて長い冬が続く。しかもシトシとした空模様である。きびしい自然との戦いのなかで、いつの間にか、脂肪をため込む体質ができてしまったのだ。

《菜食主義》

自分たちの体質を知っている欧米人の中には、「ベジタリアン」(Vegetarian)と呼ばれる菜食主義者が多い。

欧米の若い女性の場合は、美容と健康の観点から、脂肪の摂取を控えるために、菜食主義になることが多い。日本の菜食主義は、元来、宗教から出てきている。仏教では菜食を勧めている。日本では精進料理が有名である。動物性たんぱく質の摂取の少ない国では、太っている人たちも少なく、脂肪太りによる病気も少なかった。欧米人もこの点に着目し、自分達の食生活を変えはじめている。

因みに、食物学では、肉食は人間を戦闘的にすると考えている。アメリカは戦争に勝つために、食物学も研究し、兵士に肉をどんどん食べさせていたと何かの本で読んだことがある。食生活が菜食中心になると、人間は戦闘的でなくなり、また、いろいろな欲望も少なくなってくるそうだ。仏教が菜食を勧めるのにもちゃんと理由がある。

《うぶ毛は剃らない》 Baby Hair, Downy Hair

「Beauty Lesson」の授業で、顔パックを行った時のことである。パックが乾き、ゆっくりと剥がしていく。ところが、剥がすときになって、何人かが涙を流さんばかりに痛がっている。うぶ毛がパックに張りついてしまい、スネに貼ったサロンパスを剥がすときの痛さと同じらしい。

休憩時間に皆と話していると、この話題になった。彼女たちは、顔パックをほとんどしないそうだ。ロンドン基地 CA に接していると、彼女たちのうぶ毛 (Baby Hair) に気がつく。

人によっては、鼻の下に薄いひげが生えているように見える。「どうして顔のうぶ毛を剃らないのか」と聞いてみると、「私たちの習慣では、首から上の部分は剃らないのが普通なのです」

「首から下の部分で、露出しているところは、脱毛したり剃ったりしますが……。腕や足が毛深いと、Rude(野蛮)に見られるのです」

というのが、彼女たちの返事だった。

そのようなことがあってから、欧米人をみると、うぶ毛が気になってしょうがない。よく見ると、やはり剃っていない女性が多い。この習慣はどうも宗教に関係があるらしい。

《硬水と軟水》

イギリス人 CA といえども、制服着用時のヘアスタイルは、食品を扱うものとして清潔感がなければならない。仕事中に髪が揺れるようでは、髪の毛が落ちたりするので、シオンにするなどしてまとめなければならない。いったん仕事を離れれば、彼女たちの好きなスタイルでよい。当時のイギリスでは、若い女性の間でアフロっぽいヘアスタイルが流行っており、どちらかというとフワとした感じのヘアスタイルを好んでいた。それが、日本の水でシャンプーをすると、ドライヤーをかけてもふわとした感じに仕上がらず、髪がぺちゃっとしてしまう、と嘆いていた。

どうも水が合わないらしい。ヨーロッパは硬水の国が多い。一方、日本は軟水の国である。硬水の国では生水をほとんど飲まない。カルシウム・マグネシウム塩を多く含んでいるため、飲むと下痢を起こしたりするからだ。石鹸も泡立ちが悪い。硬水に慣れたイギリス人の髪には、軟水は相性が悪いようだ。

《オオカミの牙》

イギリス人にしてもドイツ人にしても、感心するのは、みな歯並びがきれいなのだ。八重歯がある人は、1 人もいない。「日本では、八重歯(Double Tooth)の娘は、かわいらしく見えるので男性に好かれるが、君たちの中に八重歯の人は 1 人もいないね」

「私たちの国では、歯並びが悪いと、かならず子供の頃に矯正します。八重歯は、ドラキュラみたいで男性に好かれません」

確かに、欧米の国で八重歯の人を見かけることはほとんど

どない。むしろ、フランスなどでは八重歯のことを「オオカミの牙」とよび忌み嫌っている。そのため、親は子供の八重歯を見つけると矯正させる。八重歯を見せてのプリ娘も、日本では通じるが、欧米では嫌われている。

国際線 CA をやるのであれば、八重歯は矯正しておいた方がよいと言える。

《地震に会う》

米語では、地震のことをアースクエーク(Earthquake)と言うが、イギリス人はアーストレマー (Earth Tremor)と呼ぶ。

ロンドンでの授業の最後に、東京に来るにあたっての諸注意を行なった。その中で地震についても触れておいた。念のために、地震についての話をしたのだが、東京での訓練が始まって2週目に入った頃、早くも地震に見舞われたのだ。震源地は茨城県で、東京でも震度4を記録した地震だった。夜中の2時頃だったので、彼女たちは熟睡していた。そこに震度4の地震である。震度4といえばかなり揺れる。地震になれている日本人でも、火の元を確かめたりするし、少しは緊張する。しかも、10階建ての寮で、彼女たちの部屋は、上層階だったからたまらない。震度4以上の揺れになった。

寝ていた彼女たちは、何が起きたのか、とっさには理解できなかったらしい。とにかく天地がひっくり返るようなことが起きている。建物が揺れている。いつまでたっても揺れが収まらない。さらに何か起きるのではないかと、恐怖心でいっぱいになり、だれもが部屋を飛び出してきた。あちこちで「ワーワー、キヤーキヤー」と大騒ぎになってしまった。すぐに揺れが収まると思っていた寮監さんたちも、階上での騒ぎに起きてきて「大丈夫、大丈夫!」と、皆を安心させるのに大変だったらしい。

次の日、みな寝不足の顔をしている。さっそく地震の話題になった。このような時の解説役はいつもフーニーが行う。

「教官、昨日は大変だったのだから」

と微に入り細に入り、手振り身振りで説明してくれた。こんな経験は、だれもが初めてだと話していた。他のクラスには、地震が嫌で、飛びはじめてすぐに辞めてしまった CA がいた。

《浅草見物》

当時の訓練では、外国人 CA に東京見物をさせるという

のがあった。日本のことをできるだけ知ってもらいたいとの願いがあった。

東京タワーや皇居見物が終り、〈はとバス〉が次に向かったのは浅草だった。ガイドさんの説明によると、浅草は、海苔^{のり}で有名くらいで、その昔は近くまで海だったそう。観音様は、隅田川の底に沈んでいたところを、漁師に拾われ浅草寺に奉られた、という言い伝えがあるとのことだった。645年頃の話だそう。キャノンという会社は、観音様に囚んでいるらしい。カンノンをローマ字にすると、Kannon であるが、それが Cannon となり、キャノン(Canon) となったそう。

雷門に入り、仲見世を歩き、突き当たった正面に、観世音菩薩(観音様)が奉ってある浅草寺がある。そして、右側に二天門があり、そこに入ると、三社祭りで有名な浅草神社がある。よく考えると、浅草って、仏様と神様が一緒に住んでいる寺町なのだ。

「これは Temple で、あれは Shrine ですか? Temple と Shrine が一緒の場所にあるんですか? ケンカはしないのですか?」

とジャネットが聞いてきた。また質問である。

「ジャネット、神道は、日本のオリジナル宗教であることは知っているね。仏教は、6世紀中頃(538年)に、今の韓国を経由して日本に入ってきたんだ。イギリスにキリスト教が入ったのが597年なので、同じような時期に、日本には仏教が入ってきたんだ。当時、仏教は外国の宗教ということで、“入れる、入れない”で大論争が起こったんだ。なぜなら、日本には神道という日本古来の宗教があったからだ。大論争の中、当時の欽明天皇は、“試してみよう、良くなかったら受け入れるのをやめよう”という意見だったんだ。天皇の意見にしたがって試すことにしたんだ。その後、7世紀になり、聖徳太子(Prince Shotoku)が積極的だったこともあり、仏教は日本に定着したんだ」

日本ではいたるところにいろいろな神様がいる。日本には八百万の神がいるのだから、一つくらい外国の神がいたってよいではないか、と考えたかどうかは分からない。しかし、日本人が宗教に対し柔軟なのは、歴史的に言えば、欽明天皇の時代に芽が出ている。土着の宗教を排除してきたキリスト教徒には理解しにくいところである。

《日本は柔軟な国》

日本人は、外国文明を積極的に取り入れ、それを日本風

にアレンジし、定着させるのが得意な民族だ。料理も世界のものを取り入れてきた。

日本で食べる外国料理は、西洋風日本料理といった方がよいと思うときがある。特に、味付けが日本人好みになっている。

タコスという料理がある。メキシコの田舎町でタコスを食べたことがあるが、線香臭くて一口であきらめた思い出がある。タコスなんて日本では売れないだろうと思っていたが、いつの間にかタコスの店があちこちにできていて、若者たちが食べている。あんな線香くさいものよく食べられるな、と感心していたら、日本人が食べられる味付けになっていた。

外来語も同じである。昔から外来語を取り入れてきたが、いつの間にか外国人に通じない外来語になってしまっている。漢字にしても、カタカナ外来語にしても、中国人や欧米人に通じないものが多い。漢字は、筆記すれば、意味が通じることもあるが、発音はまったく違ってしまっている。

《カタカナ読み》

イギリス人 CA への日本語授業では、外来語をカタカナ式発音で教えることになる。機内では免税品を扱っている。その中に、たばこのマイルドセブン(現在名メウス)がある。

「マイルドセブンは1カートン 1400 円です」

とテキストに出てくる。彼女たちは、つい「Mild Seven」と英語読みで発音してしまう。ところがこれではダメなのだ。「Mairudosebun」と発音させ直さなければならない。

今、この原稿はパソコンで打っている。「パソコン」といっても外国人にはなんのことか分からない。「パーソナルコンピューター(Personal Computer)」と言わなければ、英語国の人には通じない。

日本人は、昔から好奇心が強かったせいか、自分たちにはないものがあると、それが気になってしょうがない。すぐに関心を示し、取り入れ自分たちなりに消化してしまう。そして、日本風にアレンジしてしまう。ところが、外国は違う。たとえばフランスは、中華思想が強く、自分達の文化が一番であると自負し他国のやり方をなかなか受け入れない。日本は、それとはまさに正反対の態度をとってきたのだ。

ドイツ人 CA のお辞儀事件もそうであるが、ドイツ民族も、他国文化に対しては慎重なところがある。ドイツやフランスのような大陸の国々は、お互いに侵略したりされたり歴史を持っている。他の文化を受け入れるということは、相手国に

侵略されるのではないか、という民族的恐怖心を潜在的に持っているようだ。一方、国内での勢力争いはあったものの、日本人は、敗戦後の進駐軍時代を除き、他民族に侵略された経験がない。

そのようなわけで、日本人は、異文化や他の文明に対して、かなり柔軟な国民なのだ。これも、実は欽明天皇の時代、隣国の百済国より、宗教だけではなく、いろいろな文明や文化が入ってきた。さらには、儒教も入ってきた。そして、中世から近代にかけての日本人の関心は、宗教のような思想的なものから物質的なものへ移っていった。ポルトガルやオランダのような国に注目し、鉄砲に代表される鑄造技術や造船技術などを取り入れるようになった。一時鎖国政策により、西欧文明の受け入れを拒否したが、明治の文明開花では、西欧文明を積極的に取り入れた。特にイギリス、フランス、ドイツの影響を受けたのである。戦後は、アメリカの影響という具合である。

《英国国教会》

もしジャネットが他の宗派だったら、同じ質問はしなかったかもしれない。プロテスタントの中でも、戒律の厳しいメソジスト派の信者だったからだと思う。

イギリスは 16 世紀半ばに、当時の国王ヘンリー 8 世の離婚問題をきっかけにし、宗教改革の影響もあり、ローマ・カトリック教会から離脱した。そして、イギリス独自の英国国教会(The Church of England)を設立した。それ以来、イギリス国民は英国国教会を自分たちの宗教としてきた。最近では、国王を長とする英国国教会の影響力もずいぶん衰えてきているようだが、それでも、生まれる子の 3 分の 1 は英国国教会で洗礼を受けていると聞く。

ジャネットのように宗教に関心を示した娘もいるが、ほとんどのイギリス人 CA たちはあまり関心がない。むしろ、仲見世通りにあるおみやげ屋で、昔ながらの日本的なもの、例えば広重の絵が入ったゆかたや扇子や日本人形を売る店々を覗いていた。若い人たちの宗教離れはどここの国でも同じである。それが英国国教会の悩みであるとも聞いている。

《お宮参り》

浅草のあと、椿山荘で昼食となり、それから明治神宮へと向かった。

バスは原宿駅裏側の駐車場に入り、そこから本殿まで参道を歩いた。2 月の神宮は、正月の賑わいが終りひっそりとしている。

明治神宮は、明治天皇、昭憲皇后を奉るために、多くの人々の労働奉仕を受け、大正 9 年(1920 年)に完成した。宝物殿には、両陛下が愛用した品々が集められている。明治神宮は、内苑が 3 万坪あり、競技施設などがある外苑は 10 万坪の広さになっている。

明治天皇の時代は、日本とイギリスの間に日英同盟(Anglo-Japanese Alliance Treaty 1902 年)が結ばれていた。戦争中を除き、それ以来、日本の皇室はイギリスの皇室とよい関係にある。皇太子(The Crown Prince)もイギリスに留学していた。

「私がスーパーバイザーとして乗務していた便に、アン王女の結婚式に参列するため、ロンドンに向かわれる浩宮様(現皇太子殿下)が、お乗りになったことがあるんだ。私は、機内サービスの責任者だったので、直接お話しもできたんだ。私のよい思い出の一つになっているよ」

本殿の参拝が終り、何人かと今の話しをしていたところ、本殿の方が気になってしょうがない様子のティッシュが、
「あの…」

「どうした、ティッシュ」

「さっきお祈りをした所に、中年の女性が赤ちゃんを抱いて、そのそばに若い女性がいて、一緒に参拝しています。何か意味あることなのですか?」

「ティッシュ、あれは "お宮参り" と呼んでいる」

「Omiyamairi!?!」

「子供がすくすくと育つように祈りにきているのだよ」

「I see.」

ティッシュは、"I see" とは言ったものの、スッキリしない顔をしている。説明した私の方もスッキリしない。「子供の成長を神様に祈りにきた」には違いないが、お宮参りの本当の意味は何なのか、なぜ神社でなければならないのか、気になってしょうがない。言語学者の荒木博之氏によると、
『産の忌みの終りと照応して初宮参りが行われるが、これは生児の氏神に対する氏子入りの意味を担うものであり、村落共同体の象徴である神に詣でることによって、村人の仲間に加わったことの承認を受けるもの』
であつたらしい。お宮参りとは、「それぞれの村にいる氏神さまの氏子になること」が本来の意味なのだ。氏神さまは、

お寺ではなく、神社にまつられている。だから神社にお参りに行くのだ。

本来の意味が分かれば、イギリス人に説明しやすい。キリスト教の世界でも、お宮参りに似た宗教上の儀式がある。キリスト教では洗礼(Baptism)を行う。洗礼も神の子となり、その地域の教会の一員となる儀式である。さっそく数日後の朝礼の時に、皆に説明した。因みに、洗礼について宗教学者のひろさちやさんは、次のように述べている。

『キリスト教では、教会の一員となるには洗礼を受けなければなりません。洗礼は「バプテスマ」といい、罪人が罪を悔い改めて、キリストによる罪の許しを与えられ、新しく生まれかわって教会の一員となる礼典です。カソリック教会では、この洗礼の際に、代父あるいは代母を立てて、聖人の名を霊名(洗礼名)としていただく習慣があります。これは、その名をいただいた聖人の徳行にならおうとするものです。なお、プロテスタントのほうでは、みずから信仰告白をすることができない幼児への洗礼を、有効としない傾向が強いようです。また霊名(洗礼名)をつける習慣もありません』

となり、カソリックとプロテスタントでは、洗礼に対する考え方も違う。

《七五三》

イギリス人 CA を担任する前は、ブラジル人 CA を受け持っていた。訓練は 11 月から始まったので、都内見物で明治神宮に行ったときは、ちょうど七五三の時期だった。着飾った男の子や女の子たちが親に連れられてお参りにきていた。

「着物を着た子供達がいっぱいいます。何をしていますのですか?」

「あれは、子供がすくすく育っていることを、土地の神様に感謝するために、お参りにきている人たちだよ」

「街では、子供は着物を着ていません。どうして着物を着ているのですか?」

「むかし、子供は 3 才になると、髪をのばして結ぶ儀式をしたんだ。そして、5 才になると、男の子は女の子と違う着物を着はじめたんだ。女の子は、7 才になると、子供用の着物を着るのをやめる。男の子も女の子も、7 才になると、正式に土地の住民として認められ、大人の仲間に入れてもらえたんだ。昔のお祝いの風習が、今も残っているん

だよ」

「よく見てごらん、お参りに来ているのは、男の子は 3 才と 5 才の子供だけなんだ。女の子は 3 才と 7 才の子どもしかいない筈だよ」

初宮参りは、子供がこれからすくすく育つように、そして、七五三は、こどもがすくすく育ったことを感謝し、これからも丈夫に育っていくように、土地の氏神様にお願いに来る風習であり、今も続いている。

《イギリス的カンニング防止》

ロンドンで習った課目のテストが、東京訓練の第 2 週から始まった。月曜日の 1 時限目に、テスト用紙を抱えて教室に入り、これからテストを行うと伝えた。するとイギリス人 CA たちは、イスを机の外側に出し、机の端と端にお互いが向かい合うように座ろうとした。彼女たちはいろいろな地方から集まってきた。その彼女たちが、こちらから指示したわけでもないのに、テスト時の着席スタイルをとった。ということは、イギリスではテストを受けるとき、生徒がお互いカンニングをしないよう向かい合って座ることになっているらしい。昔、イギリス映画で "カンニング" というのがあった。映画化されるくらいだから、カンニングが盛んだったのかもしれない。そして、その防止策として、このような着席スタイルが確立されたようだ。

《アジア的カンニング》

カンニングは、私も学生時代にやった思い出がある。テストの監督をして分かったことは、中国系訓練生もヨーロッパ系訓練生も、日本人訓練生がおこなっている程度のカンニングはしていた。もちろん全員ではないが……。

ここでちょっと、ある実験をした。テスト中に、所用があるふりをして教室から出て、ビューア越しに、教室内のようすをずっと 2、3 分覗いてみることにした。テストの監視役が居なくなった時の反応が、それぞれ違っていたのは興味深い。中国系の CA たちは、筆者が教室を出ていきなり、情報交換会になった。教室のあちこちから声が上がり、この問題の英語の意味はああだ、こうだ、そして、答えはこれでいいのよね、と声が外まで聞こえてきた。皆があまりに情報交換に熱中しているので、教室に入っていくのに気後れしてしまったくらいだ。しかたなく、「これから入るゾ」とドアの把手をゴツゴツさせてから教室に入っていった。このクラスからは、「いい教官」という評価をもらい、その後、このクラスの

授業にいくと、ミスター・K がきた、といって喜んでくれ、授業もよく聞いてくれたというオマケもあった。

イギリス人 CA のクラスでは、中国系 CA より、平均年齢が 2 ～3 才上であったこともあるが、その反応は、少し違っていた。意外と静かなのである。せいぜい隣同士で小さな声で話している程度だった。

実は、邦人 CA にも、同じ実験をしたことがある。その反応は、中国系 CA とイギリス人 CA との中間というところである。日本の学生の実態は、皆さんの方がよく知っていると思う。

《シンガポール人 CA》

前項で中国系 CA と表現したが、今回採用したシンガポール人 CA は、国籍はシンガポールだが、中国人を祖先に持っている人たちばかりである。シンガポールの人口構成は、中国系が約 80%、マレー系が 15%、インド・パキスタン系が 5% 前後となっている。構成比率的には、中国系の人たちが絶対的に多い国なのだ。中国系シンガポール人を採用したのは、将来、彼女たちに太平洋線を乗務してもらうためなのだ。太平洋線には中国系の旅客が多数搭乗してくる。中国系シンガポール人であれば、香港基地 CA 同様、英語を話さない中国人旅客にも対応できる。各国航空会社がシンガポール人 CA の獲得を積極的に行っている。各航空会社にとっては、シンガポールは賃金が比較的に安く、人件費をセーブできるというメリットがある。さらに、シンガポール人は、他のアジア諸国と違い、日常生活の中で英語を使っている唯一の国であることも大きな理由になっている。

《テスト結果発表》

採点済み答案用紙返却のときの反応が、日本人とイギリス人では違う。特に、自分の点数が悪かったときの反応が違う。日本人は、あまり勉強もしなかったし、しょうがないかと頭をかきながら席に戻っていく。そこには恥の表情がある。

イギリス人 CA たちは、自分に対して不満である、というような表情を見せる。結果が悪ければ意味がない、という考えのようだ。そして、まじめな娘は、かならずどこを間違えたのかを確認していた。自分が勘違いしていた項目を、2 度と間違えないようにするためだ。

野球選手が、打球を取り損ねたときの反応を思い出す。

日本の選手は恥ずかしいという態度をとるが、アメリカの選手は、地団駄を踏んで、くやしいという態度をとる。どこかそれに似ている。

日本では、結果のみならず経過（努力）も評価する傾向にある。一方、契約社会である欧米では、結果を重視する。そのことが、テスト結果発表時の反応のちがいに現れている。中国系のCAたちは、どちらかというと日本人に似た反応を示した。

《一生懸命》

「いっしょうけんめい」という熟語は、昔は、「一所懸命」と書いていた。「ひとつの所で命を懸ける」が本来の意味だそう。

担任教官が、訓練生を評価するとき、テスト結果だけではなく、訓練への取組み姿勢や態度なども加味する。結果も大事だが、日本では、訓練中の前向きな態度とか、やる気とか、途中経過も重視する。

むかし「スチュワーズ物語」というテレビドラマがあった。視聴率も高く、CAに憧れる若い女性のみならずサラリーマン達でさえ、放映日の翌日は職場の話題にしたほどだった。「スチュワーズ物語」というのは、ドジでのろまなCA訓練生が、一生懸命ひたむきに努力して、訓練を無事終了しCAになるという話である。これだけではドラマにならないので、このひたむきな訓練生が、教官に恋焦がれるという物語だ。このドラマが評判を呼んだのは、CAの世界がテーマであったことや、人気俳優が出演していたこともあったが、日本人の好きな「一生懸命さ」や「ひたむきさ」が描かれていたところにあったと思う。

日本人から見ると、外国選手はあまり練習をしないので、たるんでいるように見える。そして、結果で勝負する外国人選手と、途中経過を重視する監督との間に、価値観の相違から摩擦が起きることがある。

イギリス人CAが、日本人社会のなかで、理解できずに苦労したことのひとつに、この一生懸命やひたむきな態度がある。訓練中もそうだったが、一人前のCAになって、邦人CAの中で働くようになった後も、この問題にぶつかった。日本人が持っているこの価値観と、彼女たちが持っている価値観が違うため、邦人CAとの間で軋轢も起きた。

邦人CAの間では、新人は新人らしく、言われたとおりの一生懸命にやればよいのだ、という価値観が面々と脈打って

いる。

一方、イギリス人は、ものごとを合理的に考えるところがある。新人といえども、一人前のCAになった以上、自分で考えて、これが最上のやり方だと思ったら、そのやり方で行おうとするし、先輩に対しても意見を述べる。

邦人CAからみると、これがおもしろくないのだ。「新人のくせに」ということになる。日本では、男性よりも女性社会の方が、先輩後輩の関係は厳しい。CAの世界も女性社会である。

邦人CAと一緒に仕事をしていくうちに、イギリス人CAたちも、邦人CAへの接し方のコツが分かってきて、今では、余計なことを言わずに、ひたむきに働いている姿が機内で見られる。この問題で苦労したイギリス人の先輩達が、後輩達に日本人社会の中で働くコツを教えている。

《日本人的イギリス人》

筆者が教えたイギリス人CAたちは、日本人の中で仕事をした経験などまったくない人たちばかりだった。日本人との付き合い方は何も知らない。教える側の教官たちも、機内での仕事のやり方を教えるので精一杯だった。外国人が日本の会社でうまくやっていくには、どのようにすればよいのか、というノウハウの蓄積がない。訓練の大半は、東京で行われる。授業方式は日本の学校スタイルで実施したが、教室の中はイギリスそのものである。1人の日本人教官と16名のイギリス人CAたちである。多勢に無勢となる。

彼女たちは、自分の意見を人前で話せないのは恥ずかしいことと教育されてきている。授業中も授業以外のときも、よく質問をしてきたし、自分の意見も述べた。教官が聞いた仕事の仕方も、もっと合理的な方法があれば提言もした。ときには、「そんなやり方はおかしい」と感情的な態度をとったこともあった。そこにいたのは、日本人社会の体験がない生のイギリス人やアイルランド人だった。日本人社会で味わった苦い経験も、先輩からのアドバイスもない人達だった。

今では、イギリス人CAたちは、日本人の仲間とうまくやっている。ロンドン基地CAの教育を担当した者としては、うれしい反面、なにかイギリスらしさがなくなってしまったような感じがする。彼女たちにとってみれば、自分たちの行動基準で仕事をすれば、仕事に影響があるし、下手すれば、生活がかかってしまうというのが本音だろう。

《救難訓練》

訓練のはじめに、教官が、今日は誰がCA役を行うのかを聞く。このとき、私がやってもいいと手を挙げるのは、ヨーロッパ系のCAたちに多い。日本人は、このような場合あまり積極的ではない。教官に言われるまで、CA役が自分に当たらなければいいのと思っている。中には、積極的に手を挙げる訓練生もいるが…。

ヨーロッパ系CAたちは、今はうまくできないかもしれないが、緊急事態のときはチャットできるようになりたいので私にやらせてください、と手を挙げる。そして、うまくできなくても誰も笑ったりしない。

恥の文化をもつ日本人は、そのような時、皆の前でちゃんとできないと恥ずかしい、という感情が先にたってしまう。また、外に手を挙げると、あいつ教官に気に入られたいんだらうという、目に見えない牽制球も飛んでくる。現役 CA たちも毎年救難訓練を受ける。日頃から「安全」を口にする人は多いが、やはり、積極的に CA 役をする人は少ない。

《水と安全はタダではない》という言葉があるように、イギリス人 CA たちも、安全に関することについては、実に真剣に取り組む。特に、自分の身の安全は自分で守るという考えが根づいている。

《会話が静か》

欧米人はとにかくよくお喋りをする。イギリス人やブラジル人だけではなく、ドイツ人もよくしゃべる。授業合間の 10 分間の休憩時間でさえ、何人かごとの輪ができて会話が始まる。沈黙が苦手らしく、一度会話が始めると、だれかが喋っている。若い女性たちばかりなので、話している内容は、ボーイフレンドのこと、家族のこと、郷里のこと、住居のことなどで、日本の若い女性とあまり変わらない。

しかし、話し方は違う。クラスのイギリス人は 20 代前半の女性たちだったが、日本の若い娘たちのワイワイといった話し方ではなく、物静かな話し方をする。紅茶を手に持ち、静かにおしゃべりをするのが、彼女たち特有のスタイルだ。日本の若い女性(若くない女性もそうだが)は、話しに夢中になって、だんだん声が高くなり、まわりの人たちが迷惑に思っているのも分からなくなってしまうことがある。イギリス人たちのお喋りは、近くで聞いていてもあまり気にならない。

《会話が発展》

彼女たちは、こちらが一言喋ると、三言は返してくる。三言の中には、新たなピックが入ってくるので、話がどんどん展開していく。

筆者が教官時代に、邦人 CA 採用面接で、外国人英語教官とペアになり英語の面接官をしたことがある。英語でのやりとりそのものは、外国人教官が主に行う。筆者はそれを聞き、応募者の英語レベルを見るのが仕事だった。

外国人教官 「Where are you from?」

応募者 「I'm from Saitama...」

外国人教官 「…」

大半の応募者は、外国人教官の質問に対し、「埼玉からきました」とだけしか答えない。答えとしては間違っている訳ではないが、欧米人と会話をする時には、これでは、なにか足りない。欧米人であれば、同じ質問に対して、少なくとも 3 倍の答えをする。自分の出身地の名前だけではなく、「それはどこにあるのか」「どのくらい遠いのか」「どのようなところか」まで説明する。場合によっては、「そこには結婚した兄と両親が住んでいる」とか「両親はそこで商売をしている」とかも話す。欧米社会では、表現しなければ相手に通じない、という考えが一般的である。日本人が得意とする、「以心伝心」は通用しない。自分の思いや考えを言葉にして初めて、他人に理解してもらえると考えている。

これも、欧米の歴史や文化的背景からきている。ヨーロッパ人は、今のドイツあたりを中心に活動していたゲルマン人、イギリスはケルト人、フランスのゴール人、そして、ローマ人、キリヤ人が交わって生活してきた。同じキリスト教でも、カソリック教徒とプロテスタント教徒では考え方が違う。

これら多民族が、平和に暮らしていくためには、お互いの価値観や違いを知り、認め合わなければならない。そのためには話し合わなければならない。より自分たちのことを知ってもらう努力が必要であった。—自分を知ってもらう—欧米人の会話の基本がここにある。

日本人は同一民族であり、宗教的にも、自然環境的にも、歴史の中で培われてきたお互いの価値観は同じといってよい。そのため、お互い言葉に出す必要があまりなかった。

この背景が、欧米人と日本人の喋る量の違いに現れている。日本人が、異民族(特に欧米人)と付き合っていかなくてはならない現代は、「言わなくても分かるだろう」の考え

はあきらめたほうがよい。

《アイスティ》 Iced Tea

日本人がお茶に愛着を持っているように、イギリス人も紅茶をこよなく愛している。

昼休みに喫茶室で、みんなでお茶でも飲もうということになった。彼女たちは温かいものを飲むときは、やはり紅茶だ。コーヒーを飲むより紅茶を飲む方が多い。冷たいものを注文する時は、糖分の少ないものを飲んでいる。筆者は、アイスティが好きなので、冬でもアイスティを飲む。それを見た 1 人が、

「Iced Tea を飲んでいるのですか」

「そうだよ。なにか変か」

「Tea に氷を入れるなんて考えられません」

「Iced Tea が好きな日本人はけっこういるよ。特に暑いときの Iced Tea はおいしいよ。東南アジアの国でも、Iced Tea はポピュラーな飲物なのだよ」

と説明しても、なにか納得ができならしく、そんな飲み方は邪道だというような顔をしていた。

確かに、イギリス滞在中にアイスティを注文したことはない。注文すれば提供してくれるとは思うが、イギリスでアイスティを飲みたいとは思わない。アイスティは、むしろ暑い国で飲むとおいしい。その点、イギリスは夏でもあまりむし暑くはないし、暑い時期も短い。

《ミルクが先か後か》

飛行機は、空気の薄いところを飛行する。そのため、飛行中の機内は 0.8 気圧に与圧されている。与圧された機内でお湯を沸かすと、摂氏 80 度で沸騰してしまう。機内のお湯の温度は日本茶にはよいが、100℃で沸騰したお湯を使う紅茶には向いていない。機内で紅茶を作ってもなかなかよい香りが出ない。

授業のとき、紅茶についての論議になった。彼女たちが紅茶を飲むとき、たいていミルクを入れる。イギリス人は、紅茶はミルクを入れて飲むものと思っているようだ。見ていると、ミルクを先に入れ、そこに紅茶を注ぐことの方が多し。そこで質問して、お互いに議論をさせた。

「イギリスでは紅茶を飲むとき、ミルクを先に入れるのか、後に入れるのか？」

3 分の 2 の人たちは、いつもミルクを先に入れて飲むと言っ

ている。残りの 3 分の 1 の人は特に意識をしていないらしく、どちらでも良いと思っている、という意見だった。次に、

「ミルクを先に入れるのはなぜか」

という議論をさせた。ミルクを先に入れて飲む人たちの間で意見が一致したのは、

—ミルクを先に入れると、

紅茶の渋がカップに付着しないで済む—

というものだった。次に、

「なぜ、紅茶にミルクを入れるのか」

と質問をした。

「紅茶の渋みとミルクのマイルドさがよく合います」

「紅茶は、沸騰させたお湯を使います。熱いのでミルクを入れると飲みやすい温度になります」

「いつも家ではそのように飲んできたから」

という答えだった。

「日本やアメリカでは紅茶にレモンを入れることがあるが、皆はレモンを入れないのか」

「イギリスではレモンを入れません!」

「紅茶にレモンを入れるなんてアメリカ人のことです」

イギリス人は紅茶にレモンを入れない。イギリスでは、紅茶にはミルク、と決まっているらしい。それがイギリス人の紅茶へのこだわりとなっている。

《紅茶にレモン》

「タイタニック」(レオナルド・デカプリオ、ケイト・ウィンスレット主演)という映画があった。タイタニック号の処女航海 (Maiden Voyage) を最後に、引退することになっていた船長が、順調に航行している船のブリッジで紅茶をすするシーンがあった。

タイタニック号は、当時、大英帝国が国の威信をかけて建造した世界最大の豪華客船だった。この客船はイギリス船籍であり、船長もイギリス人であった筈である。ところが、このシーンの船長の紅茶には、なんとレモンが入っていた。イギリス人の船長をイメージしていたので、「えっ、この船長はアメリカ人の!」と訝しく感じた。知り合いのイギリス人 CA のベテランに、この話題を出したら、

「しょうがないですよ、だって、あれはアメリカ人がつくった映画ですから……」

と言っていた。

肉はよく焼いて

当時は、機内ファーストクラスで、ロースビーフがサービスされていたので、そのサービス方法も教えていた。イギリスはロースビーフの本場なので、イギリス人も生焼きが好きだろうと想像していた。お客役の訓練生に、機内と同じように注文をとった。どの訓練生もウェルダンにして欲しいと注文してきた。エーと思い、みんなに聞くと、彼女たちは生焼きが食べられないと言う。エリザベス女王も、肉はウェルダンが好みだそう。そういえば、ロンドンでロースビーフを食べに行ったら、レア（Rare）を注文したのに、焼けすぎのものが出来たのでがっかりしたのを思い出す。牛肉をよく焼いてしまうなんて、本当にもったいない話だ。

《ワタシハ鼻デス》

医学関係など特殊な科目以外は、担任がほとんどの授業を受け持つが、時には他の教官にお願いすることもある。他の教官が教室にいくと、名前や職位や乗務歴など自己紹介してから授業に入る。

このときの自己紹介が、イギリス人 CA にとっては、おかしくてしょうがないらしい。教官が、「私の名前は…です」という時、かならず鼻を指す。それがおかしくてしょうがないのだが、笑ったら失礼にあたると思い、笑いをこらえるのに一生懸命だったという。

欧米人が自己紹介する時は、胸に手をあてる。もっと強調したいときは、親指を立て、その先で胸を指す。いずれの動作も胸すなわち心（ハート）を指している。私はこういう心の持ち主です。つまり外見ではなく内面を知ってほしいと表現している。そこには、個人の人格を尊重する社会背景が感じとれる。

宮城教育大学で英語学教授をしていたリージャー・ブロスナハ教授によると、日本人は個人としての自己よりも、集団の一員としての自己を、英語国民より強く感じているようだ。英語では、「私は田舎の出身です」「私は大家族の出です」と自分個人を主語にして言うところを、日本語では「私の故郷は田舎町だ」「私の家族は多い」のように言う。「私」が主語にならないことが多いそうだ。

自己紹介をするときに鼻をさすのは、私は訓練部という組織の一員です、教官にもいろいろな人がいるが、私はこういう顔をしているから覚えておいてね、と言っていることになる。

鼻をさす動作と親指を胸にあてる動作の違いについて、荒木博之氏は次のように書いている。

『日本は「引きの文化」であり、欧米は「押しの文化」である。

例えば、ノックリは、日本では引いて使うが、欧米では押して使う。柔道も、常に後ろへ、後ろへと引きながら勝機を伺う。日本人は、「受け身」的な行動をとることが多いそうだ。人差し指で反らしながら、「この俺だよ」という姿は後ずさりの姿が似つかわしいが、親指で胸をさすしぐさはどうしても前進の姿がサマになる。鼻を指す姿は、へっぴり腰になじむ動作だが、親指で胸をさす姿勢はどうしてもへっぴり腰にはなれない姿なのである』

《肩書社会》

欧米人が上司を呼ぶとき、肩書で呼ぶことはほとんどない。邦人 CA は「教官」とか「課長」と肩書を呼ぶが、筆者の教え子たちは、「ミスター・〇〇」と上司を個人名で呼んでいた。上司がファーストネームで呼んでも構わないと言うと、上司のことでさえファーストネームで呼ぶことはすでに紹介した。

彼女たちは肩書に対してではなく、その個人が尊敬に値するか、能力があるかに重点をおく。課長は課長の職務を、部長は部長の職務を遂行する人であり、肩書があるから偉いとは思わない。肩書のある人は、常に正しいことを言うとも思っていない。人間である以上、間違いを犯すこともあると考えている。同時に肩書があろうがなかろうが、人間としては平等に扱われるべきだと信じている。たて社会に慣れた日本の会社が、ヨコ社会で育ってきた欧米人を雇用し働いてもらうのであれば、肩書に頼らず、実力で勝負する必要がある。

《ディスカッション》

日本人がもっとも苦手とするものに、「議論」がある。彼女たちが日本の企業に勤めるようになって、最初にぶち当たったのがこれだった。上司の考えに対して、変だなと感じたり、おかしいと思ったら、質問したり、反論したりしてくる。また反論することで自分の考えを知ってもらおうとする。

教官に対しても、同じような態度をしばしばとった。ほとんどの教官は、授業を素直に聞いている邦人 CA を相手にしてきている。訓練生から反論されることながかった教官たちの中には、最初のころ、イギリス人 CA の反論に、「訓練生のくせに生意気だ!」と思う者もいた。

外国人を教えるようになって、教官側もずいぶん変わってきた。議論に耐えられる人が増えた。「耐えられる」とあえて書いたが、邦人 CA だけを教えていた時代、教官は、自分の知らないことを質問されると、「訓練生はそんなこと知らなくていい」で押し通すことができた。自分が機内で行っていた「作業」を教えているだけで、「教官はすごい」と言ってくれた。

今、教官たちは、機内サービスという業務を、「これはこのようにするの」と教えるだけでは済まなくなっている。つまりノウハウ(Know How)を教えるだけではなく、ノウホイ(Know Why)を教える必要が出てきている。教官自身が体験してきたことに、理論的裏付けを加えて教えないと、訓練生から尊敬は得られない。特に外国人を教えるときには、論理的話し方が必要となる。日本の若い女性も、最近はキャリア志向が強まってきている。口にこそ出さないが、心の中で「どうしてなのか」と思っている。CA の世界でも、「経験重視」を主張する声があるが、「体験」と「経験」を混同している人が多い。「体験」に理論的裏付けを加えてはじめて「経験」となる。

外国人 CA 訓練で、何が教官たちを悩ませたかというところ、授業中説明していると必ずくる「Why」という質問だ。ところが、私たちの職場でも、あいまいにしたまま仕事をしていることがけっこうある。違う価値観の外国人 CA に質問されても、「今までの習慣でこうやってきている」とだけしか答えられないことがしばしばあった。

《WHY》

先輩 CA は、新人 CA の仕事を見て、「なんでそんなことするの」とよく言う。その次に来る言葉は、「バカじゃないの」となる。

日本人が "Why" という疑問文を使うとき、相手をバカにしたひびきを伴うことがある。したがって、日本では "Why" ということばを使うとき注意しなければならない。イギリス人を訓練している間、この "Why" を数えきれないくらい聞かされた。彼女たちが "Why" と聞くのは、そのことを十分理解するためなのだ。その背景には、自分で判断し行動するという、自立心が働いている。自分で判断するために、ちゃんと理由を知りたいと思っている。CA として飛び始めた後も、たとえ経験が浅くとも、一人前の CA としてサービスしたいと考えている。加えて、欧米の契約社会では、甘え

の構造はない。給料に見合った仕事ができなければ、即、雇用契約打ち切りにも遇う。ものごとを十分理解し、自立した仕事ができるようになるために、"Why" という質問をしてくる。欧米人に、"Why" と言われても、日本人の感覚で受け取らないことが大切だ。単に疑問に思うから "Why" と聞いているだけなのだ。

《がんばるって》

「がんばる」「努力する」「一所懸命」「一生懸命」などは日本人が好きな言葉であり、人々の行動規範になっている。「一所懸命」のように、命を懸けて仕事をするには、辛抱が必要だし、努力も必要となる。また、「がんばる」も、忍耐と努力が根底をなしている。

「がんばる」という言葉は、英語に訳しにくい言葉だ。あえて訳するならば、

"To make efforts continuously

with patience"

となる。言い方を変えれば、ものごとをすぐに「あきらめない」ということだろう。何かの試合や試験を受ける人に対しての「がんばって」は、あえて英語でいうならば "Don't give up!" であるが、欧米人は "Good luck" という。

欧米社会は、結果重視の社会であることは前にも触れた。これに対して、日本は仕事に対する取組姿勢とか態度をも重視する社会である。日本人は、「ひたむきさ」という言葉も好きだ。努力しつづければ穂も実と考えている。農耕民族は、種を蒔き、草むしりをしたり、肥やしをまいたりして、じっと待っていると実がなる。それを刈り取る。狩猟民族は、努力をしても獲物にありつけないことがある。獲物にありつけないと餓死することになる。大切なことは、獲物がある場所を早く見つけ、見つけたら獲物と戦い倒さなければならない。農耕民族のようにじっとしている訳にはいかない。したがって「ひたむきさ」的な発想を、英語にして説明するのは苦勞する。結果がよければ良いのである。

日本人のスポーツに対する態度を見てみると、型にこだわる人が多い。ゴルフにしてもボウリングにしても、野球のバッターにしてもそうだ。電車を待っている間に、クラブ代わりに傘を振っている人を見かける。自分のフォームが気になるらしい。一方、欧米人は自分に合ったフォームで球を打ったり、投げたりする。

機内の作業でも、邦人 CA たちは、いままで先輩たちが

培ってきたやり方を踏襲しようとする。また、そのようにやらなければ先輩たちに嫌われる。イギリス人 CA が乗務し始めたころ、日本人の先輩 CA が、仕事が始まる前から、あしろとか、こうしろとかやり方を言ってくるのに、自立心の強い彼女たちは閉口していた。よい意味で親切、悪い意味でお世話または過保護が、日本人の特徴と言える。

外国の航空会社では、先輩 CA は新人 CA に対してあれこれ言わない。言うのは、新人 CA がチャットした仕事ができなかった時だけである。そのときはアドバイスなり指導が行われる。

稲を実らせるには順序がある。田んぼを耕し、早苗を植え、草むしりをし、肥料をやるなど、それぞれの時期にしなければならないことが決まっている。毎年同じことを繰り返している。そして、子は親の真似をしながら田植えを覚えていく。順番を間違えたり、時期を間違えたりしてはいけない、と日本人は習ってきた。

《男と女のために》

訓練も 2 週間目に入ると、別のフラストレーションが出てきた。訓練そのもので、ストレスがたまってきたので、当時流行っていたディスコに連れていった。ストレスだけではなく、フラストもたまっているらしい。彼女たちはすでにボーイフレンドと 2 週間も会っていない。皆が皆にボーイフレンドがいるわけではないが、故郷にボーイフレンドを残してきた CA たちは、寂しくてしょうがないらしい。寂しいというより欲求不満になっているらしい。日本人女性が海外に留学して、彼氏としばらく会えなくなっても、会いたいという気持ちはつのるかもしれないが、会いたい＝愛し合いたい、とはならない。精神的な愛と肉体的な愛がかならずしも一致しているわけではない。

イギリス娘たちは違っていた。「会いたい＝愛し合いたい」になるのだ。それを口に出して言う。「2 週間も彼と会わないなんて考えられない」と、担任にまで言う。

キリスト教は、別名「嫉妬の神」とも言われている。欧米人の男女が、いつも「愛している」と口に出しているのは、常に嫉妬心が背景にあるという説がある。結婚後も、愛の確認作業が必要なのだ。口に出して言うだけでなく、態度で示さなくてはならない。欧米人のビジネスマンが転職になると、かならず奥さんを連れていく。日本では、子供たちの教育のためとか、家族が外国生活するのは無理などという理由で、夫だけが赴任していくケースがある。長い間、愛し

合うことがなくても、日本では夫婦関係は悪くはならない。

単身赴任は、欧米では考えられない。夜の夫婦生活がなければ離婚の正当な理由となる社会なのだ。たとえば、夫が出張して、奥さんが我慢できる限度は 1 週間かもしれない。長くても 2 週間である。それ以上になると、奥さんも一緒についていく。出張に出す企業の方も、奥さんが一緒にいくのは当然だと思っている。

《ボーイフレンド》

欧米社会で使う単語"Boy Friend"は、カタカナの「ボーイフレンド」とは、意味するところがやや違う。彼女たちが、「私の Boy friend の何々は・・・」というとき、性的関係にある男友達のことを意味していることが多い。性的関係のない男友達は、ただの"Friend"となる。

邦人 CA に、「ボーイフレンドはいるの」と聞かれたとき、彼女たちは、ボーイフレンドのイメージを、男女の結合と結び付けてとらえる。だから、ボーイフレンドがいるかどうかという質問は、プライバシーに関わることになる。質問している邦人 CA のほうは、まだフラットな段階の相手でも、「ボーイフレンド」と呼ぶ。そして、その感覚で質問する。また、邦人 CA たちが、「私のボーイフレンドは」と言えば、聞いている方のイギリス人 CA は、「彼とは親密な関係」と理解する。"Boy Friend"は、男女関係において、日本人が使っているほど軽い関係ではない。

そのボーイフレンドと、2 週間も愛し合っていない。大人の女の自然な欲求が満たされていない。しかも、彼女たちの感覚では、いい年をした男が 2 週間も自分なしではいられない筈だと思っている。もしかしたら・・・と心配なのだ。このような心理状態が続き、フラストレーションとなってきた。

《同棲生活》

彼女たちと話していて分かったことだが、クラスの 3 分の 2 は同棲生活を送っていた。イギリスには、日本のようなワンルームマンションと呼ばれるアパートはほとんどない。イギリスで「マンション (Mansion)」と言えば、豪邸や館をさす。日本でいうマンションのことを「フラット (Flat)」と呼んでいる。これらのフラットは、最低でもベッドルームが 2 つに、リビングルーム、キッチンそしてバスルームがついている。広さは日本の 2DK の 1.5 倍から 2 倍になる。これらのフラットは、1 人で住むには広すぎるし、家賃も高い。そのため、友達とシェア (Share) して負担を軽く

する。ボーイフレンドがいる人は、ボーイフレンドと一緒に住む。その方が、何かと便利で一石二鳥なのだ。女性同士でシェアしている娘もいる。女友達同士だと親も心配しないらしい。Shareした方が、税法上もメリットがあるとも話していた。

《親から独立》

イギリスを含めた欧米社会では、子供は一定の年齢になると、はやく親から独立しようとする。イギリス人でも、早い人は、義務教育(16才修了)が終わると同時に社会に出て、親から独立する。親も子供の自立心を養うような育て方をしている。裕福な家でも同じだ。子供の方も親に頼らず、自立しようと努力する。日本の親は、長男が誕生すると、世継ぎができた王子様扱いして、手取り足取り大切にしようとする。最近では、男の子に代わって女の子の方が大切にされ、いつまでも親がかりの状態が続いている。子供に対する親の態度は、日本とイギリスではかなり違う。

イギリスも、家父長制の国であり、家父長中心の家族制度が長く続いていた。昔は子供たちのうち、長男のみがその家の財産を継承し、次男以下や娘達は外に出された。長男とそれ以外の子供たちでは、まったく違う待遇を受けた。極端な時には、長男が一家の長になると、同じ兄弟でも、次男以下は下男同様の扱いをされた。そのため次男以下は、それが嫌で家を出たとも言われている。

このような歴史的背景もあり、子供は早く親から独立しようと努力する。なぜ親から独立したがるのか、イギリス人CAに聞いたことがある。

「自由に生活できるから」

「親から開放されるから」

というのが本音らしい。自立心もさることながら「自由さ」を求めている。

イギリス人の場合、若くして社会に出る人が多いが、10代で社会に出ても仕事のキャリアがないため、それほど十分な給料をもらえない。1人で生活するには、彼らの給料では足りない。このような時、日本の若者であれば、親のサポートを受ける方をする。イギリスの若者は「自由さ」の方を選択する。何とか人並みの生活をするために、若者同士で協力し、住居費を安くすませようとする。同性や異性と部屋を共同で借りるのは、このような背景がある。

《自己責任》

社会人教育の一環として、邦人CAのたまご達に、「皆さんは、自分は大人だと思いますか」という問いかけをした。大人と子供の違いは、自分がとった行動に対して責任がとれるかどうかだ。親にトラブルの処理を頼んでいるようでは、20才をすぎても大人ではない。

自分の人生は、自分で責任をとらなければならない。40才や50才になって悔やんでも青春は帰ってこない。

イギリスの若者たちは、「自由さ」の方を選ぶことが多い。「自由さ」という自立心には、かならず「責任」が伴う。自由であると同時に、ものごとは自分で決めなくてはならない。そして、責任も自分でとらなくてはならない。このことは男女間の問題についてもいえる。彼女たちに、「いまのボーイフレンドと結婚するつもりなのか」

と聞くと、

「分からない」

という返事が帰ってくる人が多い。続いて

「今は、彼を一番愛している」

と言う。さらに話をしていくと、愛している彼氏がいるにもかかわらず、もしかしたら、もっと自分に合った男性がいるかもしれないとも思っている。もしそのような男性が現れれば、その男性とも身をもって付き合うこともする。お互いの人生観や価値観が合っているか、というような精神的なことだけではなく、性的にも合っているかどうか重要視しているようだ。そして、自分が納得するまで、いろいろな男性と付き合う(もちろん中には慎重な行動をとる娘もいる)。そのためか、彼女たちの行動はかなり積極的に見える。青春を謳歌しながら、将来の伴侶を見つけているようだ。最近の日本の若い女性を見ていると、ずいぶん欧米型になったと感じるこの頃である。

《イギリス人とドイツ人》

私たち日本人は、イギリス人もドイツ人も同じヨーロッパ人であり、いろいろな面で似ているだろう、と考えがちだ。ところが、イギリス人とドイツ人では、異文化に対する姿勢がずいぶん違うことが分かった。

イギリスは大英帝国を築くために、世界の海を制覇してきた。自国だけにとどまらずに海外に出ていった。そして、植民地を作り、貿易を発展させ英連邦を築き上げた。多くの国にイギリスの影響を残してきた。イギリス人は、植民地政策

を行うにあたって、その植民地の人たちの感情を大切にしました。その土地で育まれてきた文化を、始めから否定することはしなかった。

訓練中、イギリス人 CA は日本式のマナーや習慣について、ドイツ人より柔軟だったのも、異文化の国に進出していった伝統を引き継いでいる結果のようだ。最初は、相手の文化を尊重し行動するが、強制されたという感情を相手に感じさせずに、いつの間にか、イギリスの価値観を植えつけてしまう。だからこそ、いまでもイギリスの影響を残している国が多い。

授業の休み時間などに、彼女たちといろいろ話をするチャンスがあった。日本のことを話したり、イギリスのことを聞いた。話していて感じたのは、イギリス人は自分たちの文化を説明するのがうまい、という点だ。言葉にしてもそうなのだ。自分たちが使っている英語表現を、さりげなく異文化の人たちに説明する。あるとき、「オバン」のことが話題になった。すかさず、

「イギリスでも、同じような表現があるわよ。"Olive Oil"(オリーブ油) っていうのよ」

今度は反対に、こういうおもしろい言い方があるのよと紹介してくる。

「"831"ってどういう意味か知っていますか」

「…」

「"I love you"っていう意味なの。よく使う表現よ。8 つの文字と 3 つの単語で 1 つの意味を表しているから 831 っていうの」

「それじゃ、"Smart upstairs"って知っている？」

「…」

「"アツマ(頭)いい!"っていう意味よ」

私たちが学校で習わなかった表現がポーンとでてる。イギリスの若い人たちが使う生の英語を教えてくれる。実践的な英語なので聞いている方もおもしろい。こんな表現をするのだ、と思いながら覚えてしまう。

筆者もこういうのは嫌いではないので、テキストに出てこない日本語を教える。日本語テキストでは、「トイレはどこですか」を覚える。旅客は、かならずしも、「トイレ」を使うとはかぎらない。年配の人たちは、「御不浄」というかもしれないし、「便所」というかもしれない。機内では、男性旅客は「ベンジヨ」と言うことがある。それは「トイレ」のことだと教える。すかさず返してくる。

「それを英語では、ルー(Loo) と言います」

「ルーって、"Waterloo の戦い"の"Loo"のことかい？」

「そうです。"Loo"は「場所」のことを言います。だから私たちが使うときは「ある場所」っていう感じです」

その後、授業中に生理現象で耐えられなくなると、サッと手を上げ、

"May I go to the loo?"

と言ってきた。昔は上流階級の婦人たちが使っていた表現という説もある。現在では、くだけた言い方なので、仲間同士で使うのはよいが、時と場合によっては使わない方がよい表現だそう。イギリス英語独自の表現なのでアメリカ人には通じない。

イギリス人 CA たちと一緒にいると、ところどころでこのような話題になった。こちらの話も否定せずに素直に聞くが、話を発展させ、いつの間にか自分たちのやり方や文化を紹介している。大英帝国を築き上げるために、積極的に異文化の中に入り込み、異文化に柔軟に対応してきた祖先の血がいまでも若者の中に流れている。

"Tolerant"

イギリス人の好きな言葉の 1 つに、タラント(Tolerant)という言葉がある。「我慢、忍耐、寛容」がその意味にあたる。異国の地にきて、見るもの、聞くものが初めてのことばかりの中で、実にタラントに行動してくれる点、イギリス人を担任した教官たちはずいぶん助けられた。忍耐が必要なときに、ユーモアで他人の心を和ませてくれるのも、イギリス人の得意とするところだ。

一方、ドイツ人は、訓練初期に起きた「お辞儀事件」のように、異文化に対してかたくななところがあった。自分たちが持っている価値観をなかなか変えようとはしないところがある。

海洋国家であるイギリスとは違い、大陸の中にあるドイツは、まわりの国を攻めたり、反対に攻められたりの歴史を繰り返してきた。攻めることもしたが、攻められて痛い思いも何度かしているので、異文化に対する恐怖心がある。ナチスドイツのユダヤ人虐殺がそのよい例だ。いつの間にか入り込んで、富を増やし、勢力をつけていったユダヤ人に対する民族的恐怖心が、当時のドイツ人を、軌道を逸脱した行動にさせたのではないかと考える。

ドイツ人にとって、異文化を受け入れることは、同時に、他

民族に征服されるのではないかという民族的恐怖心につながっていく。そのような危険がないと分かるまで、異文化や違う価値観を素直に受け入れられないような気がする。したがって、イギリスのような異文化の国へ積極的に進出していく植民地政策は、あまり得意ではなかったようだ。大陸民族と島国民族の違いがこのようなところにも現れている。

ドイツ人は気むずかしい、頑固、と感じるのはこのような背景がある。反面、恐怖心を取り除くと、最初は気むずかしかった彼らも、他文化の持つ価値観を素直に受け入れるようになる。その証拠に、最初のドイツ人 CA が飛び始めて何年も経ち、今では、日本人乗務員とチームワークよく仕事をしている。むしろキツい仕事をドイツ人 CA は、邦人 CA の間でも評判がよいし、日本人旅客からのおほめの言葉も高い率となっている。

《食事だけはダメ》

異文化に対して柔軟に対応してくれたイギリス人 CA だったが、食べ物に関しては、弱音を吐いていた。寮の食堂も、社員食堂も、料理担当者は、ヨーロッパ人 CA が入社してくるので、料理の内容をずいぶん工夫してくれた。日本のおふくろの味が中心だったメニューに、洋風のものを加え、今までなかったパンやバターも置いてくれた。

安心食品ということばがある。これがあれば何とかなるという食べ物をいう。人それぞれ安心食品を持っている。おふくろが作ってくれた、なつかしい味が安心食品の代表と言えるかもしれない。

人それぞれ安心食品を持っているが、それぞれの民族も安心食品や安心料理を持っている。日本人にとってみれば、「米」が代表的な安心食品になる。そして、味の面から言えば、かつお節などから作ったダシの味、いわゆる「うま味」が必要になる。ダシが効いていない味は、いま一つ物足りない。しょうゆも欠かせない。また、熱が出たりしたとき食べる「お粥」などもよい例だ。私たちは、体調がわるい時に、いくら美味しいからといっても、フランス料理を食べたいとは思わない。

イギリス人にとっての安心食品は、昔からあるミートパイ、ポリッジ(西洋粥)、ベーコン、マメ類、ポテト、プディング、チーズ、パンなどが代表的なものである。教え子たちは、「早く家に帰って、ヨークシャープディングが食べたい」というのが口癖になっていた。社員食堂のほうでも努力をしてくれたが、教え子たちが期

待する安心料理とは、ずいぶんかけ離れたものだった。最初の頃は、日本文化に少しでも触れようと、ラーメンを食べたり、焼き魚を食べたりした。それが、いつの間にか喫茶室でサンドイッチばかり食べるようになってしまった。特に、環境が変わり、訓練で疲れている身にとっては、身体を癒してくれるものを食べたくなる気持ちは、十分すぎるくらい分かる。

乗務で海外に滞在する邦人 CA も、体調の良いときは、その国の料理を食べに行く。ところが、時差や睡眠不足で疲れ気味のときは、日本食が食べたくなり、つい和食レストランに行ってしまう。そして、お寿司などを食べると力がついてきて、何となく安心する。国内では、ボーイフレンドと洋食を食べに行く CA の中には、海外に出ると、とたんに和食党になってしまう人もいる。

異文化を受け入れることは、他民族から侵略されるのではないか、という民族的恐怖心を抱いているドイツ人であるが、食べ物に関しては、イギリス人に比べ柔軟であり、ラーメンはじめ、日本のものをよく食べていた。「ライスに醤油を少しかけるとおいしいのよ」と言って食べている。さらに、大豆は身体によいと教えると、大豆でできている豆腐なども積極的に試していた。食文化においても、イギリス人とドイツ人はずいぶん違っていることが分かった。

《チーズが好き》

ヨーロッパの人たちはチーズをよく食べる。イギリス人もチーズが好きである。何はなくともパンとチーズがあればなんとかなるらしい。日本人は、ご飯があれば何とかなるのと同じようなものだ。宴席で酒を飲み交わした後、最後に腹をくちくするため、お茶漬けやツパを食べる。日本人はご飯かツパ類を食べて、初めて食事をした気になる。一方、西洋料理では、コースの後半にはかならずチーズが出てくる。ヨーロッパ人はチーズを食べて初めて食事をした気になる。ヨーロッパ人にとってチーズは、最もホスピタラーな安心食品と言える。チーズには肝臓の働きを助けるメチオニン、胃壁を保護するタンパク質、脂肪分や酒の摂取による血液の酸性化を中和するカルシウム等が豊富に含まれている。身体にとってやさしい食べ物なのだ。

機内食事サービスでは、和風の食事と洋風の食事の選択となる。旅客の希望を聞きながらサービスしていくのだが、ときどき洋食ばかりが売れてしまうことがある。CA たちの食

事も、旅客と同じものが2種類あり、どちらかを選択して食べている。旅客からの洋食希望が殺到したときは、CA用に搭載されている洋食を旅客用に変更してサービスする。そんなときは、CA用の食事は和風だけになってしまう。邦人CAの場合は、和風しかなければいけないで、それをいただいている。ところが、平均的なイギリス人CAは和食が口に合わない。機内の和風料理は、ビジネスクラスでは会席風となっている。会席料理は、江戸時代に発達した、酒を楽しむための料理という要素が強い。てんぷらやスキヤキなど外国人にとって馴染みのある日本食とちがって、会席風は、馴染みがない料理ばかりである。努力してもちよっと…という感じなのだ。

彼女たちは、チーフパーサーのところに行き、和食が食べられないので、ファーストクラスで残ったチーズをくれないかとお願いする。チーズとパンをもらってきて食事の代わりにしていた。

《教官は体調が悪いの》

訓練も3週間目に入ると実技課目が増えてくる。「知っている、実践できなければ、

知らないのと同じである」

という標語が教室の壁に掛かっている。

ところが、訓練生は、教官の期待どおりに動いてくれない。実際の機内の忙しさを知らない訓練生には緊迫感がない。予習・復習が足りない。教室で習ったことをもう忘れている。卒業するまで時間も迫ってくる。この時期にハッパをかけないと、OJT(機上訓練)に出しても、現場から苦情がくる。邦人CAたちのときは、「君たちはやる気があるのか」とハッパをかけたり、ムツとした顔をしたりする。教官の表情を見て、訓練生は察しをつける。

ある担任が、自分のクラスの進捗状況が思わしくなく、機嫌がわるかった。そのため、実習中ずうっとムツとした顔をしていた。授業後に何かを言わなくてはいけない。「やる気があるのか」を英語で何と言えればいいのか、などと考えているとよけい無口になってしまう。そんな教官の態度や表情を見ていても、外国人CAたちは、このような時の日本人の思いを察することに慣れていない。「教官は体調でも悪いのかしら」くらいにしか受け取ってくれない。

彼女たちの社会では、上司は言い回しには気をつけるが、言いにくいことでもハッキリ口に出す。部下に嫌な顔をされようがお構いなしである。気持ちを伝えなければ、口に出す。

そのために、言葉があると考えている。

異文化の人たちと接する時、特に利害関係がある相手に対しては、よきにつけ悪しきにつけ、口に出すことが必要になってくる。例えば、訓練生に対して、

「I'm afraid you haven't done

your homework.」

(予習・復習をしていないな)

「I don't see you work hard.」

(もっとしっかりやってほしい)

というようにいう。

「NO という日本人」という言葉が一時流行った。というと、日本人はすぐ「NO」と言いはじめるところがあるが、これも注意が必要だ。「NO」とだけしか言わないのは、マナー違反になる。かならず「なぜ NOなのか」を説明しなければならない。

もうひとつ注意しなければならないのは、「NO」という時の英語表現である。イギリス人でもそれなりに教養のある人たちは、相手からの誘いや提供に対して、

「I'm afraid I can't visit your home

on that day」

「No, thank you.」

というように、NO という時にも"I'm afraid"や"Thank you"をつけて表現を和らげている。

《教室が暑い》

冬の教室は、暖房が効いている。イギリス人CAたちは、授業中、上着を脱いでブラウス一枚になっている。教室が暑いらしい。全館で統一して暖房している。そのため各教室では温度調節ができない。暑いので、やむなくブラウス姿になっている。日本人とヨーロッパ人では、温度に対する感じ方も違う。日本人が心地よいと感じる温度は、欧米人にはやや暑く感じるようだ。欧米人は20度以下でも半袖姿でいることがある。日本人と欧米人の温度の好みについても授業で説明しておくことにした。

温度差については、いろいろな場面でその違いに出会う。最近、日本ではワインが流行っている。赤ワインは室温で、白ワインは冷やして飲む、と一般的に言われている。日本人にとっての室温と、欧米人(特にヨーロッパ人)にとっての室温が違う。日本人が好きな温度は摂氏23～24度である。冬の室内が22度以下になると、日本人は肌寒く感じる。10度

以下では服を着込んだ上にコタツが必要になってくる。一方、ヨーロッパ人にとっては、23～24 度は暑いと感じる温度なのだ。ヨーロッパ人が好きな温度は、日本人より 2、3 度低くなる。

《居眠り》

授業をしていて感心したことの一つに、授業中に居眠りをする人がほとんどいなかったことだ。眠そうな顔をしているが、居眠りまでいかないのだ。邦人 CA の居眠りに慣れている教官たちも、この点については異口同音に話していた。

昼食後の眠くなる午後には、実技訓練のように動きのある授業をするようにしている。といっても、すべてが実技授業とはいかない。座学の授業も入ってくる。この眠たい時間帯に、いかに居眠りをさせない授業をするかは、教官の腕のみせどころとなる。訓練生に居眠りされて怒っている教官がいるが、居眠りをさせるようでは、教官としてまだまだ半人前といえる。ただテキストに書いてあることだけを読み上げていたり、ワンパターンの話し方をしていたりすれば、訓練生だって眠くなる。

教官たちは英語で授業を行うことに慣れていない。時には、たどたどしい英語になることもある。込み入った内容のことを説明するときは特にそうだ。テキスト内容を解説するのがむずかしい時には、テキストにある英語の文章をただ読み上げてしまいがちになる。それでも居眠りをしない。もしかしたら、ペラペラの英語で授業をしないからよかったのかもしれない。あるとき教え子に聞いてみた。

「日本人は授業中に居眠りをすることがあるが、皆はあまり居眠りをしないね」

「私たちも眠く感じることがあります。しかし、私たちは給料をもらうために訓練を受けています。眠くても寝ないように努力するべきだと思います」

仕事をして給料をもらう人をプロフェッショナルというが、彼女たちはいろいろな仕事を経験してきているので、給料を貰うことの厳しさが身にしみついているようだ。居眠りをしないように、彼女たちなりに努力をしている。前にも書いたとおり、授業を一方通行にしないで、質問をしたり自分の意見を述べたりして、自分たちも授業に参加するようにしている。また、足を組んでリラックスした姿勢も、授業に集中できるように、居眠り防止に役立っていた。眠らないようにと、

教官の話を一所懸命聞こうとすると、かえって眠くなってしまうのかもしれない。

《うなずき》

イギリス人 CA たちが飛びはじめて最初のころ、邦人 CA とじっくり行かないことがたびたびあった。それは、価値観の違いだけではなく、振る舞いの違いにも、大いに原因があった。欧米人と日本人が話しているのを見ていると、日本人はうなずきながら相手の話を聞いている。日本人は自分が話しているとき、相手がうなずいてくれることを期待している。そして、相手が話しているときあいづちを打つ。うなずきは頭をたてに上下させる動作なのだが、欧米人は、この動作をあまり行わない。相手が話しているときは、相手の目を見ているのが普通だ。先輩 CA たちが、新人のイギリス人 CA に、いろいろ教えたりしても、彼女たちはうなずかない。先輩 CA からみると、「この娘は素直ではない」となってしまう。

同じようなことが授業中にも起きた。教官たちは、生徒の反応から、理解できたかどうかようすを見ながら授業を進めていく。学生時代に教育実習の経験がある人は分かると思うが、教壇に立っていると、どの生徒がよく聞いているのか、クラス全体の反応はどうかよく分かる。そして、先生は、授業中の生徒のうなずき方で、生徒の理解度や反応を確認することがある。

教官たちの本職は、機内でのサービスであり、教壇で教える専門家ではない。たまたま教えることに向いているだろう、ということで教育の仕事に携わっているだけだ。学校の先生達のように教えるプロと違い、訓練生の反応が気になる。そのような時、授業中、うなずいてくれる訓練生がいると大いに助かる。飛行機や機内サービスについての授業は、入社まもない訓練生にとって、ときにチンパンカンパンになることがある。訓練生のうなずきがないと、教官は、自分の説明の仕方が悪いので、理解できなかったのかなと不安になる。

しかし、このうなずきは、どうも日本人特有のもののようにだ。特に日本女性は、目上の者が話している時にうなずく。邦人 CA のたまご達も、授業中よくうなずいてくれた。邦人 CA の授業に慣れてしまっていると、ヨーロッパ人 CA がうなずかないので、最初のころ、授業の乗りがうまくいかないことがあった。

日本人はいろいろな場面で、実によくうなづく。企業の中でも、上司が何かいうと部下は「ハイ」と言うてうなづく。出発前ブリーフィング(打合せ)で、チーフパーサーが、当日のフライトについての諸注意を話していると、CA たちはうなづく聞いています。お辞儀のしぐさとも関係があるのだが、日本人は頭をさげる(うなづく)ことで、相手に対して同調姿勢を示している。うなづかれた方も相手が、自分の言っていることを理解してくれたな、と安心する。

イギリス人 CA たちは、授業中、うなづかない代わりに、質問したり自分の意見を述べたりすることによって、自分たちの理解度を教官に知らせていた。

授業でも、ブリーフィングでも、ヨーロッパ人 CA たちは、うなづくことによって従順さを表現することに慣れていなかったし、それが日本人のやり方であることを知らされていなかった。



《私たちもアガります》

日本人から見ると、欧米人は背も高いし堂々として見える。論理的にものごとを言うてくるので大人に見える。ある時、モックアップで食事サービスの実技訓練をしていた。ファーストクラスでのサービスを想定した訓練である。いつものように訓練生 2 名を CA 役として指名した。

ところが、よく見ると、オートブルを盛りつけている手が震えている。そして、真っ白な肌に湿疹ができたようにまだらに赤くなっている。顔は緊張でこわばっている。

「アレックス、もっとリラックスしてやっていいんだよ」

「私、いますごく緊張しています」(I'm so nervous.)

辞書をひくと、"Nervous" は「神経質になっている」とか「興奮している」という意味がでてくるが、「緊張してあがっている」ときにも、彼女たちは、この単語をよく使っていた。

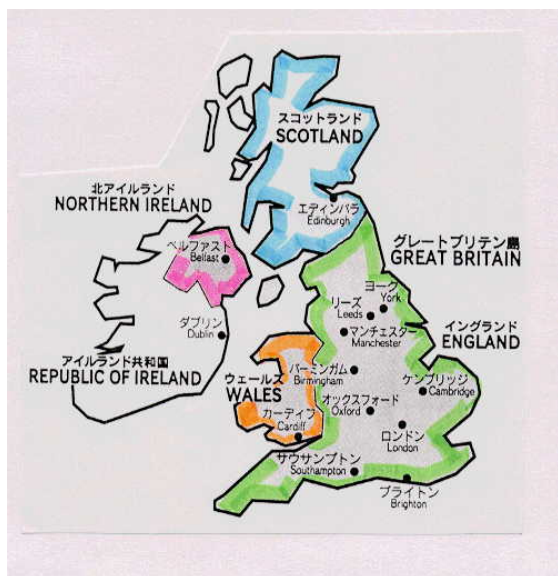
日本人は、緊張すると、顔は紅潮するが、腕や首のまわりまで赤くはならない。彼女たちは、肌が白いからかもしれ

ないが、その白い肌の腕や首まで赤くなってしまう。いつもは威風堂々としている彼女たちだが、やはり若い女性たちなのだ。

一次ページ続くー

第3章 イギリスと英国

「イギリス」という呼び名は、日本人にとって慣れ親しんだ言い方なので、本書上巻でも、「イギリス人 CA」という表現を使ってきた。しかし、クラスにはアイルランド人やドイツ人やオーストラリア人もいたし、イギリス人のなかにも、スコットランドやウェールズ出身者もいた。したがって、彼女たちをイギリス人 CA と呼ぶのは正確ではない。そのため、社内では、彼女たちのことをロンドン基地 Crew と呼ぶことにした。スコットランドやウェールズを含む、いわゆるイギリス国籍の CA 以外に、アイルランド人、フランス人、イタリア人、デンマーク人、スペイン人、ベルギー人など他のヨーロッパ諸国の人たちもいるからだ。現在のロンドン基地には、15ヶ国以上の CA が在籍している。



地図出典

<http://blog.goo.ne.jp/goo221947/e/0255b75588fa91f1b3a35e8c2ef8b96b>

《イギリスは国名か》

私たち日本人は、イギリス人とアイルランド人の違いをよく知らない。また、イギリスといっても、イングランドとスコットランドとウェールズ、さらに北アイルランドがあり、それぞれ歴史も違うし、民族的にも違う。英国の中でも、「彼女はスコティッシュ(Scottish スコットランド人)だ」とか「彼はウェリッシュ(Welsh ウェールズ人)なの」と言っているし、イングランド人をイングリッシュ(English)と呼んでいる。

「英国王室史話」の著者である森護氏も、「日本ではイギリス、イングランド、英国の表現が、極めてあいまいに使用され

ているので、この国の理解に大きな妨げとなっている」と本の最初で述べている。

米国はアメリカ、仏国はフランス、独国はドイツ、それでは、英国は?と聞かれて、ほとんどの日本人は、「イギリス」と答える。日本語では正解になる。今度は英語で答えてくださいと質問をする。米国は America、仏国は France、独国は Germany、それでは英国は? 多くの人は England と答えてしまう。間違いではないが正解でもない。「英国」は "England", "Great Britain" "The United Kingdom" と、いろいろな呼び方がある。正式な国名として呼ぶ場合は、"The United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland"であり、「連合王国大ブリテンならびに北アイルランド」となる。長い国名なので、新聞などでは "U.K"と省略して書いている。昔は「大英帝国(Great Britain)」とも呼ばれていた。イギリスの車のナンバーには、「GB」の文字が入っている。

カタカナの「イギリス」は、明治時代に欧州に渡った人達が、イングランド人が自分達のことを「イングリッシュ」と呼んでいるのを聞き、そのままカタカナにしたのではないかと推測できる。「イングリッシュ」が、明治の人には、「イングリッシュ」に聞こえ、それが「イギリス」になったようだ。当時の英国は、1700年代終りから1800年代初頭にかけて起きた産業革命で、繁栄を謳歌していた。その繁栄も、工業が盛んになったマンチェスター、バーミンガム、リヴァプール、シェフィールドなどの都市があるイングランド地方が中心であった。その首都がロンドンである。明治の人達もイングランドに滞在し、いろいろなことを学んできた。当時の日本人にとって、イングランド王国が英国であったので、「イギリス、イギリス」と呼んだのではないか。当時はまだ、「ブリティッシュ」という言い方に馴染んでいなかったのかもしれない。1500年代までは、イングランド王国とスコットランド王国はまったく別の国だったのだ。明治の日本には、連合王国(United Kingdom)になった後の「英国」が輸入され、その歴史的、民族的背景はあいまいのままになって今日に至っているようだ。

"English"は、「イングランド地方出身者」となる。スコットランド、ウェールズ、北アイルランドを含む英国人全体を指すときは「British」となる。British はブリテン(Britain)島出身の人たちを意味する。

クラスには英国人だけでなく、アイルランド人やオーストラリア人もいた。ある時、「彼女は確かイギリス人のはずだが」と思い、確

認のために、カレン・マッコールに、

"Are you English?"

と聞いたら、

"No, I'm Scottish."

と答えが返ってきた。たぶん、

"Are you British?"

と聞いたならば

"Yes, I am."

と答えははずだ。日本語感覚では、イギリス人＝英国人としてもかまわないと思うが、英語で表現するときは、英国人＝British とした方が無難だ。

英国人にとって、"English"はイングランド地方やイングランド出身者のイメージがある。

《スコットランド 昔は別の国》

スコットランドの人々は、今でも、自分たちはスコットランド人だと思っている。その昔、イングランドに併合された苦い思い出がある。

1066年に、今のフランスあたりにいたノルマン人がイングランドに入り込んだ。そして、イングランドはしばらくノルマン人の国になった。そしてノルマンの王は、スコットランドも欲しくなり攻め込んだ。

1995年アカデミー賞で各賞をとった映画「ブレイブハート Braveheart」は、イングランドの圧政に抵抗して立ち上がった実在の人物ウィリアム・ウォレスを題材にしたものだ。スコットランドとイングランドの関係が分かる。

スコットランドの独立運動は、いまだに続いている。2014年9月には、スコットランド独立を問う国民投票が実施された。投票の結果、独立賛成45%、反対55%で、結果として否決されたが、スコットランドではいまだに独立をめざしている人たちが多くいる。

日本では、英国＝イギリス＝イングランドの関係があいまいに使われているが、それ以上に、英国とアイルランドの関係や、アイルランド人について理解している人は少ない。という筆者も、長い間、あいまいなままにしてきた1人である。書店には、英国関係の本は山ほど置いてあるが、アイルランド関係の本は非常に少ない。これも日本人がアイルランドのことを、よく知らない理由のひとつと言える。

《金髪の子イギリス人と黒髪の子イギリス人》

イギリス人CAを見てみると、毛髪の色の違いに気がつく。金髪の人、栗毛の人、赤毛の人、黒髪の人とさまざまだ。瞳の色も、濃い茶色、ブルー、ブルーグリーンとなる。そして、同じ金髪でも少しずつ色が違う。瞳も違う色をしている。金髪で肌の白い人をブロードと呼び、髪が黒い(真っ黒ではない)人達はブルーネットと呼ばれる。赤毛をストロベリーブロードという。金髪で青い目が主流であるゲルマン民族系のアングロサクソンの国なのに、どうして違う髪の色の人がいるのか、という疑問が起きてくる。

紀元前5000年ごろの英国は、ヨーロッパ大陸とつながっていた。その後、大陸から離れて島になった。その頃に住んでいたのが、土着のブリトン人だった。この土着民族も、元を辿ればアフリカからきたと言われている。英文科の学生が習うイギリス人の先祖はケルト人である。スペインのイベリア半島からアイルランドとフランス(当時のゴール)に渡ったケルト人が、ブリテン島に入ってきたのは、紀元前650年頃と言われている。そして、ケルト人はブリトン人とまざり合いイングランド、ウェールズ、スコットランド地方に住みはじめた。

《黒髪の子ローマ人》

日本は、歴史の中で、韓国人の国になったり、中国人の国になったりすることはなく、日本人の国のままできている。一方、英国は、過去に何度か侵略されている。紀元前55年のローマ軍の侵略が最初だ。ローマ軍の侵入とともに、ローマ人がイングランド地方に入り込んできた。ローマ人はローマ風呂、ガラス窓、寺院、水道、文字、戦車、そしてワインを持ち込んできた。当時のローマ帝国は先進国であったので、ブリトン人やケルト人の中から、黒髪で濃茶の瞳のローマ人と結婚する人々が出始めた。

ローマ人は、450年ほど、イングランドに住みついていたが、西暦400年頃になると、今度は、今のデンマークやドイツ周辺からゲルマンの一族であるアングル族やサクソン族やジュート族が侵入してきた。ローマ人を追い払い、イングランドに7つのアングロサクソン王国を作ってしまった。金髪で青い目の人達である。イングランドに残ったローマ人もいたので、ケルト系、アングロサクソン系、ローマ系の人達が交じり合った。

《金髪の子ゲルマン人》

日本が平安時代の頃、アングロサクソン人の国になっていた

ブリテン島に、今度は、バイキングとデーン人が襲ってきた。バイキングはスコットランドに、デーン人はイングランドの東部に上陸してきた。バイキングはノルウェー人、デーン人はデンマーク人の祖先にあたる。アングロサクソン系のアルフレッド大王の激しい抵抗を受けたが、バイキングとデーン人の侵略は続いた。その一部は、スコットランドやイギリスに住みつくことになった。

10世紀頃までに、ブリテン島には、ブリトン人から始まり、ケルト人、ローマ人、アングル人、サクソン人、デーン人、バイキングが入り込んできている。ドイツ人、イタリア人、ノルウェー人、デンマーク人等の先祖にあたる人達である。

アルフレッド大王が死去したあとも、アングロサクソンの王様は、デーン人(ノルマン人)を打ち負かしてきた。それに怒ったデーン人(ノルマン人)は、何度もイギリスに侵入してきた。そして、1066年に、ついにイギリスを征服してしまった。これが「ノルマン・コンクエスト(Norman Conquest ノルマン人の征服)」である。この時、イングランドに乗り込んできたのが、ノルマンディー公ウィリアム1世である。彼は、イングランドとフランス両国を統治した。ウィリアム1世はノルマン系フランス人だったので、征服後、アングロサクソン系の王家や貴族を追い払ってしまい、それ以降、約300年、イギリスはノルマン系の国になってしまった。

現在のロンドン郊外には、当時のノルマン貴族たちが所有していたお城やマナーハウス(Manor House 荘園領主の館)がまだ残っている。一部のマナーハウスは、土地を維持するためにレストランを営んでいる。当時の面影を残しており、メニューもフランス語で書かれている。シェフもウェ이터もフランス人のところもある。ロンドンに行く機会があったら、この荘園レストランにぜひ立ち寄ってほしい。夏は館の庭先で、冬は暖炉の部屋で食事ができる。

イングランドに定住するようになったノルマン人も、定住しているうちに、だんだんイングランド人化してきた。領地問題などで、イングランドとフランスの関係がまずくなり、その内、ウィリアム公が所有していたノルマン地方の土地も、フランスの他の王族に奪われはじめた。領土維持のためにフランスと100年戦争(1337年)もしたが、結局、ノルマン地方の土地はとられてしまう。ノルマン人がイングランドに入って300年近く経つと、ノルマン人としての意識よりも、イングランド人としての自覚が芽生えてきている。両国の王家同士は親戚関係にあるが、フランスとは一線を画すようになる。1300年代の後半から1400年にかけての話である。いろいろな人種の交じり合いが終り、イギリス人の髪の色も落ちついてきた。

その後、赤いバラの紋章を使うランカスター家と、白バラのヨーク家の王位をめぐる「バラ戦争」があり、国内での勢力争いが続いた。そして、1485年に、ウェールズ出身でランカスター家の血を引くヘンリー7世がイングランドを統一した。ヘンリー6世まではノルマン系の王様だった。ヘンリー7世はアングロサクソン系であり、再びアングロサクソン系の王様による支配の時代になった。

《ヘンリー8世》

ヘンリー7世の息子が、離婚したり、王妃の首をはねたりで有名になったヘンリー8世であり、王妃を6人もかえた王様である。自分の離婚のために、離婚を禁止していたカトリックのローマ教会から離脱してしまった。最初の奥さんはスペイン王の娘キャサリン(若死にした兄の嫁)だった。この妃との間に生まれたのは女の子ばかりだった。世継ぎが欲しいヘンリー8世は、なんとか離婚したいのだが、ローマ教皇が許可を出さない。キャサリンはスペイン王室から嫁いできた。熱烈なカトリック教国のスペインも、離婚には反対だった。そこで、ヘンリー8世は独自の英国国教会を設立した。

王妃がスペイン人であるということは、宗教関係者を中心に多くのスペイン人が、彼女とともに、イギリスに入り込んでいると想像できる。スペイン人は黒髪に濃い茶色の目である。金髪に青い目のアングロサクソンやノルマン人が主流のイングランドに、黒い髪のスペイン人が入ってきた。

《英国の宗教》

イングランドに聖アウグスティヌスが入り、キリスト教を布教しはじめたのが597年だと言われている。日本に仏教が入ってきたのが538年なので、イングランドにキリスト教が入ってきたのは、それより少し後になる。それまでのイングランドの宗教は、祖先崇拜の原始宗教だった。当時、戦いに明け暮れたゲルマン系のアングロサクソンたちは、永遠のやすらぎを求めていたところだった

キリスト教が入るまでは、王様の宗教的意味は「神の子」あるいは「神の子孫」だった。その後、キリスト教に改宗した王様たちは、「神によって特別祝福された人」という意味合いに変わった。イギリスでは、王位につくとカンタベリー大司教に「戴冠式」をしてもらうが、これはこのようなキリスト教の歴史と関係があるようだ。

ヘンリー8世と王妃キャサリンとの間にできた娘が、のちの女王メアリー1世である。機内でもサービスしているカクテルの「ブラ

デー・マリー」は、この女王に因んでつけられた名前だ。

ヘンリー 8 世は、自分の都合で、イングランドをローマ・カトリック教会から離脱させ、独自のプロテスタント教会をつくった。そして、カトリック教徒を迫害し、プロテスタント教徒に改宗しない者を、次から次と火あぶりにした。そして、ローマ教皇の所有物である修道院を片っ端から壊してしまった。この時活躍したのが、トマス・クロムウェルである。これがイギリスの宗教改革の始まりとなる。1530 年頃の話である。

3 番目のお妃ジェーン・シーモアとの間に、やっと息子が生まれた。ヘンリー 8 世が死去すると、王位についたのは幼い息子のエドワードだった。ところが、病弱ですぐに死んでしまったので、次に王位継承権があるマリーが王位についた。マリーの母親は、男の子を生まなかった。そのため、何かと理由をつけられ離婚されてしまう。キャサリンの娘であるマリー 1 世は、母親同様に、熱心なカトリック教徒だった。そして、スペインのフェリペ王を婿に迎えた。またもや、イギリス王家とスペイン王家が結びついた。マリー 1 世の時代は、イギリスがスペインの影響を多く受けた時代だった。マリー女王は、王位につくとスペインの後ろ楯を得て、イングランドを元のカトリック国に戻そうとした。今度は、新教徒(プロテスタント)の司教をはじめ、信者を次々と迫害し火あぶりにしてしまった。イギリス人たちはこのマリー女王のことを、「残忍なマリー」つまり「ブラディー・マリー (Bloody Mary)」と呼び、今では飲物として、人々の心に残っている。

《エリザベス一世》

マリーの後に、王位についたのがエリザベス 1 世である。ヘンリー 8 世の 2 番目の王妃アン・ブーリンの娘である。アン・ブーリンが産んだのも、やはり女の子だった。ヘンリー 8 世は、またがっかりしていたところ、アンが不倫(姦通)していることが判った。ヘンリー 8 世は、ちょうどよいとばかりに、姦通を理由に王妃と相手の男を処刑してしまう。

そのため、母親を早く亡くしたエリザベスは、私生児として扱われ、王位継承権をもつことができなかった。ところが、イングランド人たちは、残虐なマリーにうんざりしていたので、彼女を処刑してしまった。ところが次に王位につく者がいない。そこで、王位継承権がなかったエリザベスを後押しした。その中心的役割を果たしたのが、ヘンリー 8 世の最後の王妃キャサリン・パーである。彼女の努力で、エリザベスは王位につき、エリザベス 1 世となった。おもしろくないのはスペインである。カ

トリック教徒であるマリーを処刑され、スペインは怒り、両国の関係は悪化してしまった。

この時代のイングランドは、外交問題や宗教問題などでゴタゴタしていた。当時のスコットランドは、フランスの息がかかっておりイングランドを狙っている。スペインもフランスと同じである。同じカトリック教国なのでお互い通じている。国内のカトリックたちも、マリー 1 世のあとは、スコットランドのマリー女王 (イングランドのマリー女王とは違う人物)がイングランドを治めるべきだと考えていた。

プロテスタント化を推進するエリザベス女王は、カトリックはインクランドから出ていこう通告して追い払った。そして、プロテスタントの英国国教会をさらに強固なものとした。エリザベス 1 世は、イングランドの王位を狙っているという理由でスコットランドのマリー女王を危険人物として処刑しよう。この女王は、夫を愛人と共に爆弾を仕掛けて殺してしまう。そのためスコットランドから追い出され、イギリスに逃げ込んだところを捕まってしまった。スコットランドのマリー女王は、エリザベス 1 世にとっては従姉妹にあたるのだが、スペインが後押しをしており、陰でコソコソやっていたことと関係があるようだ。おもしろくないスペインは、スペイン無敵艦隊でイングランドを攻め込んだのだが、イングランド艦隊はこの無敵艦隊を打ち破ってしまった。エリザベス 1 世の時代の話である。

この時代は、貿易と工業が発達し、シェイクスピアも活躍し文化も栄えた。エリザベス 1 世の舵取りのもと、外交的にも国内的にも、イングランドは国としてしっかりした基盤ができあがった。共通の法律、共通の聖書、国教会祈祷書、共通の文学、そして共通の言葉(英語)を使うようになった。幼いエドワードや残忍なマリーの時代に、ガタガタになった国内を建て直したのもエリザベス 1 世であり、イングランドの繁栄の基礎をつくった女王として有名である。

エリザベス 1 世は、一生独身のままだったので、1603 年に亡くなると、王位を継ぐ直系の者がいない。そこで生前に、エリザベス女王は、王位継承権を処刑したスコットランド女王マリーの息子ジェームズ 6 世に託すことにしていた。国が違っても当時の王室は、どこかでつながっている。ジェームズ 6 世も、血統的にはエリザベス 1 世の父方の親戚関係にあたるのだ。

《宗教改革》

王様の不純な動機で、イングランドはカトリックからプロテスタント

の国になった。同じ時期に、ヨーロッパ大陸でも、宗教改革が行われていた。はじめに、マルティン・ルター(Martin Luther)がドイツで運動を起こした。続いて、スイスに亡命していたフランス人のジャン・カルヴァン(Jean Calvin)が、ジュネーブ教会の改革に着手していた。旧教(カトリック教会)がキリストの精神を歪め、教会の財政が破綻すると、免罪符を売出して商売を始めるなど、道徳的にも墮落した状態に「抗議(プロテスト)」し、それに「抵抗(プロテスト)」した。

当初は、王様の離婚問題という世俗的な事件が発端となり、プロテスタントの国となったが、次第にカルヴァン主義の影響を受けるようになった。そして、宗教改革の徹底を主張するピューリタン(清教徒)が出てきた。

エリザベス1世の跡を継いだスコットランド王のジェームス6世は、ロンドンに入り、イングランド王ジェームス1世になった。この時はじめて、スコットランドもイングランドもウェールズも同じ王様になった。すでにアイルランドも植民地化していたので、アイルランドの王様も兼ねていた。ジェームス1世が4つの国の王様になったのが1603年だった。日本では、徳川家康が国家を統一し、征夷大將軍となり、幕府を江戸に開いた時期にあたる。ジェームス1世の時代の英国は、英国国教会(アングリカンチャーチ・聖公会)のプロテスタントと旧来のカトリック、そして、プロテスタントの過激派のピューリタンが勢力争いを行っていた。

ピューリタン派は、世俗的なことに対して、厳しい態度をとっていた。芝居もダンスも化粧もだめ、キリストの教えを徹底して守ろう、という考えだった。あまりにも厳しいことをいうので、大半の国民にとってはうさん臭い存在になった。そこで、ジェームス1世はピューリタンたちに対して、英国国教会に宗旨替えをしないと処刑すると脅かした。英国にいと命が危ないので、一部のピューリタン達は「メイフラワー号」に乗り、新天地を求めてアメリカのヴァージニアに向かった。1620年頃の話である。アメリカが、極端なまでに禁酒の国になったり、最近のように、極端に禁煙運動を行ったりするのは、ピューリタン思想が今も残っているからかもしれない。

《清教徒革命》

ジェームス1世の時代が終り、その次男のチャールズが王位についた。イギリスのプロテスタント化を押し進める議会とカトリック寄りのチャールズはそりが合わなかった。議会がカトリック禁止の法案を可決すると、チャールズは議회를解散してしまい、その後、11年間は王様1人で国を治めた。結婚した相手は、

フランス王家アンリ四世の娘アンリエッタ・マリアーだった。王妃がフランス王家出身であることは、プロテスタントにとっては脅威に映った。さらに、王チャールズが好き勝手なことをやるので、議会は反対し、ついに王と議会は衝突してしまった。内乱の結果、清教徒をバックにした議会派が勝利し、王チャールズを処刑してしまった。これが清教徒革命である。この時、活躍したのがオリヴァー・クロムウェル(Oliver Cromwell)である。さらに過激なプロテスタントの勢力が強くなり、カトリックがいじめられる時代が続いた。王様が処刑(1648年)されてしまったので、しばらく王政がなくなり無政府状態となってしまった。代わりに、クロムウェルの軍事政権が続いた。彼は、余勢を駆って、カトリック教国アイルランドをプロテスタント化するため東奔西走していた。

《プロテスタントとカトリックの共存》

清教徒革命が起きたが、しばらくすると、息苦しくなった国民は、清教徒とは反対の暮らしを求めはじめた。そこで、処刑されたチャールズ1世の息子で、清教徒革命の間、フランスに亡命していたチャールズ2世を迎えることにした(1660年)。フランスに亡命していたということは、父親と同様に、カトリックの影響を受けていた。イングランドに戻り王位につくと、いまままでいじめられ続けてきたカトリック教徒に対して、きびしくすることはなかったので、カトリックとプロテスタントが共存するようになった。

この後、1660年代には、ペストが流行し、ロンドンだけでも70万人が死亡した。ペストが終息すると、今度はロンドンの大火(Great Fire of London 1666年)が起こり、一万戸が焼けてしまった。

チャールズ2世は、議회를招集した。最初の議会では、ピューリタンたちを高い地位から締め出すことが決められた。そして、宗教的な目的での集会などを禁止してしまった。違反した者は牢屋に入れられたり、植民地に送られたりした。ところが、チャールズ2世は、フランスとオランダの戦争に力を貸す。フランスとの間で、イングランドをカトリックにするという取引をしてしまった。議会はそれに怒り、カトリック教徒が政府の高い地位につけないというカトリックの締め出しをした。この頃のフランスはルイ十四世の時代で、イギリスとは反対に、プロテスタントが迫害されていた。フランスにいたプロテスタントはイギリスに逃げ込んできた。フランスが何かにつけて、イギリスを狙っていた時代である。

そして、1600 年代後半になると、対外的問題もあり、国家の統一が叫ばれるようになり、名誉革命(1689 年)が起きる。憲法にあたる「権利章典」が定められ、国民の生命や財産の保護、言論の自由など基本的人権が保障されるようになった。ホーリー党とウィッグ党による政党政治が行われるようになった。王位継承権も議会在議決めるようになった。誰がどの宗教を信仰しても構わないということになった。宗教が違うからと言って、やたらと首を切られることがなくなったのだ。

《大英帝国》

いままで見てきたように、イングランドは、ノルマン・コンクエスト以来、フランスや他の大陸諸国とは兄弟のような関係できた。戦いもたびたびあったが、それも兄弟ゲンカのようなところがあった。それまでは、まだまだ大陸諸国から学んでいた後進国だった。

無敵のスペイン艦隊を撃退した頃から、大陸諸国とは一線を画し、独自の路線を歩むようになった。同時に、海外に進出していった。アメリカ、西インド諸島、アフリカ、インドに進出し、加えて産業革命が起こり、商業が発展し、貿易立国として名を成すようになった。大英帝国の時代の幕開けである。

1690 年から 3 次にわたって、英仏戦争がはじまる。フランスとスペイン対イギリス、オーストラリアの戦いになった。1707 年になると、今までフランスと仲がよかったスコットランドがイングランドにつき、連合条約を結ぶことになった。そして、対仏戦争に勝利し大英帝国(グレートブリテン)の誕生となる。その後、また、アメリカやカナダの植民地でフランスとぶつかり、5 次英仏戦争までつづくことになる。最後の戦争では、フランス皇帝ナポレオンとの戦いとなる。トラファルガー沖の戦い(1805 年)でフランス軍を打ち負かしたのが、有名なネルソン提督である。ヨーロッパ大陸内のワーテルローの戦いでは、ウェリントン公爵の活躍があり、ナポレオンはエルバ島に追放された。この時代になり、英・アイルランド同盟条約ができ、いままでフランスと強い絆で結ばれていたアイルランドを無理やり英国側に引き込んでしまった。スコットランド・アイルランド・イングランドの統一が行われ、国名が「United Kingdom(連合王国)」になった。(アイルランドは 1900 年代に入り連合王国から分離独立した)

《ビーフウェリントン》

「ビーフウェリントン」という料理がある。機内でも、ファーストクラス

で提供していたことがある。ロースビーフ用の肉塊の周りにペースト状のフォアグラを塗り、それをパイで包みローストする。そして、焼き上がったものを切りわけてサービスする。これほど美味しい肉料理はないと思う。最高の料理であり、一流ホテルで注文しても簡単には提供してくれず、事前に予約注文しておかなくてはならない。一人前最低 2、3 万円はとられる料理だ。このビーフウェリントンが、フランスを打ち負かしたウェリントン公爵を讃えてつけられた名前なのである。イギリスの誇りを表している料理だ。

《名前の話》

1990 年頃の統計資料によると、イギリスで新生児につける名前が一番多いのが、「ジェームス(James)」だった。男児の赤ちゃんの 14%に、「ジェームス」の名前がつけられている。多い順に列挙すると、

男 児

「ジェームス (James)」
「ウィリアム (William)」
「アレクサンダー (Alexander)」
「エドワード (Edward)」
「トーマス (Thomas)」
「チャールズ (Charles)」
「ジョン (John)」
「ジョージ (George)」
「デビッド (David)」

女 児

「エリザベス (Elizabeth)」
「シャロット (Charlotte)」
「アリス (Alice)」
「エミリー (Emily)」
「ビクトリア (Victoria)」
「エマ (Emma)」
「ソフィー (Sophie)」
「アレクサンドラ (Alexandra)」
「サラもしくはセーラ (Sarah)」
「ルーシー Lucy)」

出典 「アメリカ英語とイギリス英語」大石五雄著

丸善ライブラリー

大石五雄氏によれば、アメリカでは、男児は「マイケル」「マシュー

ー」「クリスティー」「ライアン」「ジェーン」「デビッド」の順となっている。女兒の場合は「サラ」「ジェニファー」「ジェシカ」「クリスティー」「アマンダ」「エリザベス」「キャサリン」の順に多い名前となっている。

イギリスでは、男児の名前は、歴史に登場してきた国王に因んだものが多いのが分かる。カトリックの家族は、カトリックの国王から名前を、英国国教会やプロテスタントの家族では、プロテスタントを愛した国王の名前をつけているかもしれない。

女兒の場合でも、「エリザベス女王」や「ビクトリア女王」からきているようだ。「エリザベス」はエリザベス 1 世やジョージ 6 世の王妃エリザベス、そして現女王エリザベス 2 世である。それ以外では、有名な王妃の名前や童話集に出てくるような名前に人気があるようだ。「サラもしくはセーラ」は聖書の創世記に出てくるアブラハムの妻の名前である。

2013 年の調査では、下記の順となっている。男の子ならハリーとかトーマスとかジャックなど子供の本に出てくるような名前などが加わっている。女の子にはかわいらしい名前をつけている。

男 児

「オリヴァー (Oliver)」
「ジャック (Jack)」
「ハリー (Harry)」
「ジェイコブ (Jacob)」
「チャーリー (Charlie)」
「トーマス (Thomas)」
「オスカー (Oscar)」
「ウィリアム (William)」
「ジェームズ (James)」
「ジョージ (George)」

女 児

「アメリア (Ameria)」
「オリビア (Olivia)」
「エミリー (Emily)」
「アヴァ (Ava)」
「イスラ (Isra)」
「ジェシカ (Jessica)」
「ポピー (Poppy)」
「イザベラ (Isabella)」
「ソフィー (Sophie)」
「ミア (Mia)」

(出典 英国国家統計局(Office for National Statistics))

日本でもそうであるが、人気のある名前は時代とともに変化している。

《世界制覇》

同じイギリス人なのに、なぜ髪の色が違うのかという疑問から、イギリス人が歴史の中でどのように他民族と交わってきたかをみてきた。国内での戦いや外国との戦争に、宗教や領土が絡んでいたことも分かった。エリザベス 1 世が統治した 1500 年代後半は、イギリス人が自分達の国づくりに励んだ時代と言える。そして、1600 年代は、議会と王様の宗教的対立から発したピューリタン革命、共和制政治、王政復古、政党政治の発展と国家の基礎固めをしていた時代だ。同時に、1600 年代から 1700 年代にかけて、イギリスはスペイン、オランダから海上権を奪い海外に進出していった。1607 年に最初の植民地をヴァージニアに建設した。1600 年には、日本にも最初のイギリス人が来ている。日本史の教科書に出てくるウィリアム・アダムス(日本名・三浦按針)がその人だ。1700 年代は産業革命の時代になる。最初に農業改革(囲い込み法)が起こり、生産が飛躍的に向上した。そして工業が発展した。1700 年代後半には、水素の発見、水力紡績機の発明、酸素の発見、蒸気エンジンなどの発明が続いた。万年筆が発明されたのもこの頃(1780 年)だそう。新聞の「ザ・タイムズ」が創刊されたのが 1785 年であり、工業化の進展とともに商業も発展していった。

英国という国は、しょっちゅうどこかの国と戦争をしているようなところがある。そして、負けるときもあったが、肝心なところで勝利してきた。だからこそ、大英帝国を築き上げることができた。現在の英国内では、150 ヶ国以上の言語が話されていると言われている。それだけ英国は、いろいろな国に進出し、またその国の人を受け入れてきた。植民地政策の結果、インド・パキスタン、中近東、アフリカ諸国の一部、中国の一部、カリブ諸島、シンガポール・マレーシアや南太平洋の国々などを英連邦に組み込んできた。カナダやオーストラリアでは、つい最近までエリザベス女王の肖像画が飾られていた。

英連邦の国々の人は、英国と自由に往来ができた。しかし第 2 次世界大戦後、これらの国が独立をしいはじめた。1997 年、香港の中国返還の時に見られたように、返還にあたり、英国政府は香港の人達に中国籍に戻るか、英国籍になるか、国籍の選択を認めた。当時、中国籍を取得

するのを嫌がった人の大半は、親戚をたよってアメリカやカナダに渡った。英国籍になった人もかなりいたようだ。同じように過去にも、それぞれの国が独立するにあたって、英国に流入してきた旧宗主国の人たちがイギリス人の一部を構成するようになった。

イギリスにはいろいろな色の髪や目の人がいる。髪の色や目の色が違っても、白い肌は共通していた。ところが、現在では、「イギリス人は白人である」と言えない時代になっている。アフリカ系黒人もいれば、黄色人種のシンガポール人や中国人もいる。中近東系の人もある。それだけでなく、海外に進出していったイギリス人が、現地の人と結婚し本国に連れもどしてくることも多かった。クラスのマリー・マーマーも父親がイギリス人であるが、母親はシンガポール人なので、アジア系の顔立ちだった。したがって、ロンドン基地 CA だからといって、すべての人が金髪系の白人ではないのだ。ロンドンのソーホー地区では、中国レストランが軒を揃えている。ヒースロー空港の近くにインド人が多数住んでいる街もある。ハイドパーク公園近くのランカスターゲート地区は、中近東の人たちの街と言えるくらいアラブ系の人たちを多く見かける。

第 4 章 アイルランド

《世界中のアイルランド人》

アイルランド系の人達は、世界中に約 8000 万人いる。しかし、アイルランド本国には約 464 万人(2015 年)しかいない。

昔、大飢饉やペストの流行、貧困などで、多くのアイルランド人は新天地を求め、祖国をあとにした。1845 年の大飢饉では、当時の人口 800 万人の約半分が、なかば難民に近い形でアメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドへ移住していた。

筆者が、乗務でシゴに滞在していたとき、ちょうど聖パトリックの祝日(St. Patrick Day)にあたったことがある。3 月 17 日は、世界中にいるアイルランド系の人たちが、聖パトリックを祝う日である。シゴの大通りでは、アイルランド系市民主催による、はなやかなパレードが 1 日中行われていた。どのパレードも、長老たちが先頭にたっている。そして、人々は緑のタスキをかけたり、緑色の服を着たりしている。緑はアイルランドの象徴の色なのだ。テレビでは、ニューヨークやホノルルやマイアミでのパレードも中継している。アメリカには 4400 万人前後の

アイルランド系住民がいる。アメリカの人口は約 3 億 2100 万人(2015 年)なので、9 人に 1 人弱はアイルランド系アメリカ人なのだ。

アイルランド人たちが新天地として選んだアメリカは、すでにプロテスタントのイングランド人や北欧系の人たちが主流の国になっていた。いわゆる WASP と呼ばれる人たちであり、かれらが支配階級を占め、国を動かしていた。WASP はホワイト・アングロサクソン・プロテスタント(White Anglo-Saxon Protestant)の頭文字であり、アングロサクソン系白人で、プロテスタント教徒を指している。なぜイングランド系と北欧系かといえば、イギリス人も北欧人も祖先がゲルマン系だからだ。

一方、カトリック教徒であるアイルランド人は、その祖先がアイルランド系ケルト人であり、ゲルマン系とは違う民族なのだ。

ニューヨークの中心街に聖パトリック教会がある。暗殺された元大統領の J・F・ケネディの葬儀が行われたことで有名な教会だ。やっとのことでアメリカに渡ったアイルランド人達は、みな貧しかった上、カトリック教徒である。本国でも、イングランドのアイルランド植民地化政策とプロテスタント化政策で、アイルランド人はずいぶんつらい思いをした。プロテスタント思想がより強い清教徒たちが多いアメリカでも、事情は同じだった。カトリックであるが故に、よい仕事につけず、貧しい生活を強いられた。貧しいアイルランド人たちが、自分たちの心のよりどころにするため、少しずつお金を出し合って建立したのが聖パトリック教会なのだ。

貧しかったアイルランド系の住民たちは、助け合い努力し、アメリカ社会の中で今日の地位を築いてきた。成功する者も出てきた。その代表がフィッツジェラルド家出身のジョン・フィッツジェラルド・ケネディである。フィッツジェラルドは典型的なアイルランド系の姓である。その大統領が暗殺されてしまった。アイルランド系アメリカ人にとっては、許せない事件となった。その葬儀は、アイルランド系アメリカ人の心のよりどころとなっている聖パトリック教会で盛大に行われた。アイルランド系出身で大統領になった人では、ロナルド・レーガンやビル・クリントンがいる。第 43 代大統領のバラック・オバマも、母方の先祖はアイルランド出身なのだ。

《パトリック》

アイルランド人 CA と乗務をしたとき、アイルランド人のことが話題になった。その CA が、
「イギリス人たちは、私たちアイルランド人のことを "パディ

(Paddy)"って呼ぶの。私たち自身も "パディ" って呼ぶこともあるわ。"パディ" はアイルランド人の別称なの」と話してくれた。アイルランド人はパディの他に、パット (Pat) と呼ばれることもある。イギリス人はジョン・ブル(John Bull) と呼ばれている。パディはパトリックの愛称である。カソリックの家では、男の子が生まれるとパトリック、女の子ならパトリシアという名前をよくつける。「パトリック」は聖パトリックからきている。カソリック系イギリス人もパトリックやパトリシアという名前をよくつける。筆者が担当した5期の「ティッシュ」のニックネームで呼ばれていたパトリシアがそうだった。彼女はイギリス人であるが、家族はカソリック系教会に所属していた。

アイルランド系カソリックの人たちは、このアイルランドの守護聖人である聖パトリックを、実に愛している。聖パトリックを信じているアイルランド人は、プロテスタントに改宗するようイギリスから迫害を受けても、自分たちの信仰を守り続けてきた。アメリカに渡ったアイルランド人たちも、また、自分たちの宗教を守り続けていた。そして、3月17日になると、何日も前から準備をし、家族とともに聖パトリックの日を祝うのである。

《聖パトリック》

聖パトリックが、アイルランドに入りキリスト教の布教を始めたのは432年である。イングランドに聖アウグスティヌスが入ったのが597年なので、アイルランドの方が、165年ほど早いことになる。聖パトリックは、もともとブリテン島に住んでいたが、アイルランドの海賊によって奴隷としてアイルランドに連れてこられ、やがてローマに売り飛ばされてしまう。そこから何とか逃げだし、今度は、福音を伝えるために再びアイルランドに渡り、全国くまなく伝道して歩いた。ついにアイルランドの司教と、人々から崇められるようになった。伝説では、アイルランドから毒虫と蛇を追い払ったとも言われている。アイルランドに蛇がいないのも聖パトリックのお陰だと信じられている。

《ケルト人》

また別のフライトで、アイルランド人のスチュワート(男性乗務員)と乗務する機会があった。彼は、筆者がロンドンで採用面接した1人である。俳優のシルベスタ・スタローンに雰囲気似ている。ややごつい印象だったが、前職が小学校の教師であり、話してみるとやさしい心の持ち主だったので採用することにした。「日本人から見ると、イギリス人もアイルランド人も同じに見える

のだけど」

「私たちも、日本人も韓国人も中国人も同じに見えますよ。ところで、典型的なアイルランド人は、ブロードと赤毛が混じったような髪の色をしています。肌は少し青白い(Pale Skin) 感じで、顔にはそばかす(Freckles) があり、目の色はややグリーンがかっています」これが、ケルト系アイルランド人の特徴なのだ。テレビや映画で、肌がいやに白く、赤毛のまつげがやたらと目立つ俳優を見たことがあると思う。

ケルト人は、アイルランドの他に、イングランドやスコットランドやフランスのゴール地方にも住んでいた。その昔、スペインのイベリア半島あたりから移住してきた民族と言われる。イングランドやスコットランドにいたケルト人は、アングロサクソンと混ざり合うか追い払われたりした。フランスのケルト人は北欧からきたノルマン人たちと交わり合った。

アイルランドは、歴史の中で、バイキングに襲われたり、イギリスの植民地政策を受けたりしたが、自分たちの民俗を守り続けてきているので、ケルト人がそのままアイルランド人になったと言える。イギリスほど他民族に侵略されていない。アイルランドにも、一部のバイキングやアングロサクソンやノルマン人が住みついたので、金髪で青い目の人たちもいる。

《首都ダブリン》

アイルランドの首都ダブリン(Dublin)は、バイキングがつくった町として有名だ。700年代の終りから800年代にかけて、植民地をつくるために、バイキングが大挙してアイルランドに押しかけてきた。その拠点を、ダブリン市中を流れるリフィー(Liffey)川の河口につくった。それが、のちにダブリン市に発展したのだ。「ダブリン」は「黒い水たまり」(Dark Pool) を意味している。英語読みでは"Dublin"であるが、ケルト人の言葉であるゲール語では、"Bailier Athol Cleat" と呼び、「町を二分する障害になる流れ」という意味だそう。これもアイルランド人CAが教えてくれた。

《アイルランド人お断り》

パディという言い方を教えてくれたアイルランド人CAが、「アイルランドが、共和国として独立したのは1948年なの。つい最近の話なの。それまでにも、何度か独立の機運があったけれど、Britainの介入があったり、国内での調整がうまくいかなかったりで、なかなか独立できなかったの。

独立したといっても、北アイルランドはまだイギリス領なの。「北アイルランドもアイルランド人に返せ」と言っている過激派組織のIRA(アイルランド共和軍 Irish Republican Army)は、イギリス国内で爆弾テロを行っていたの。イギリス人たちは、最近まで、商店の入口に〈犬とアイルランド人はお断り〉の看板を貼ってあったらしいの。この話をよくパパとママが話してくれたわ。私も含め、多くのアイルランド人は、テロによるやり方には賛成していないけど・・・」

《被征服民族》

韓国の人が、日本で居住したり働いたりすることは、簡単にはできない。同様に、日本人が韓国で仕事についたり居住したりするのも難しい。どちらも労働ビザが必要となる。このビザは簡単には取得できない。

ところが、アイルランド人がイギリスで仕事を見つかったり、住んだりするのは、それほどむづかしくない。だから、今回の採用募集でもアイルランド人が応募してきている。アイルランドとイギリスの往来はかなり自由だった。

けれど、アイルランド人がイギリスで生活するのは、それなりに緊張感をともなうらしい。言葉(アイルランドなまりの英語)や肌の色や顔つきでアイルランド人であることがすぐ分かる。イギリス人の中には、いまだにアイルランド人を見下している人もいる。反対に、日本人が韓国人と接するとき、朝鮮人と呼んだりしないよう気をつけているように、イギリス人も、アイルランド人と接するときは、話の内容や言葉づかいに気をつけている人もいる。

「いま話したこと、British Crewには言わないでね」

「君たちは、Britishと一緒に飛ぶし、滞在先では一緒に食事したりするんだろ。そんなとき、北アイルランド問題のことなどを話すことはないの」

「親たちは、Britishに対して一種の感情を持っているけれど、若い人たちはあまりそういう話はしないわ。アイルランドとBritainの関係について話しても、お互い気まずい思いになるだけだから、IrishもBritishもお互い無意識のうちに避けるようにしているわ。わたし自身、Britishの前では、決して口に出さないわ。だから〈犬とアイルランド人お断り〉の話も、British Crewたちの前で話題にしないでほしいの」

韓国と日本の関係でも、政治問題として、日本の韓国統治や日本軍の行なったことが槍玉に上がる。しかし、韓国人

同士で話をしているとき、この話題になることがあるかもしれないが、日本人の前では、やたらと口に出さない。これと同じである。市民レベルではお互い抑えている。

特に、アイルランドでは、若い人たちが、国内で仕事を見つけるのは簡単ではないし、見つかったとしても、給料はイギリスに比べ低い。だからアイルランドの若者たちは、仕事を見つけないでイギリスに渡ってくる。過去のことにわだかまりを持っていたとしても始まらない。

《800年の恨み》

アイルランドのことを知るには、英国との関係を抜きにはできない。先にも書いたように、アイルランドが、英連邦から完全に離れたのは1948年であり、戦後のことである。その翌年にアイルランド共和国として発足し、現在に至っている。

最初に、アイルランドをイングランドに併合しようとやってきたのはノルマン人だった。ノルマンコンクエスト(1066年)でイングランドを征服したノルマン人は、その勢いで、アングロサクソン人たちとともに、1169年ころからアイルランドに侵入し始めた。それ以来、1948年の独立まで、約800年の間、アイルランドは英国の支配下におかれてきた。しかし、独立したが、北アイルランドはまだ英国の領土のままとなっている。返却を望むアイルランド側と、それを拒む英国側の交渉がずっと続いてきている。アイルランドの完全独立まで、英国に対して過激的行動をしているのが、アイルランド共和軍(IRA)である。爆弾事件が、時折、新聞をにぎわせている。この過激集団に対して英国側も強力な取締りで対抗している。この50年間で、爆弾テロなどで、3200人以上が犠牲になっている。

1100年代の終り頃から、ノルマン人のアイルランド侵攻が始まった。ところが、ノルマン人の征服者たちはアイルランドが気に入らず、土着化していった。ノルマン・コンクエストでイングランドに入ったノルマン人もイングランド人化して、本国フランスと争いを始めるようになった。それと同じことが起こるのを恐れたのか、1300年代の中頃には、イングランドは、アイルランドを統治している総督に、人種差別政策をとるよう指示した。ノルマン人はアイルランドの名前や服装を禁止し、アイルランド人との結婚やアイルランド語を使うことも禁止した。

まだ、この頃までは、ノルマン人もアイルランド人も、同じカトリック教徒だった。ところが、例のヘンリー8世の時代(1500年代中頃)になると、イングランドは、ローマ・カトリック教会から離脱してしまう。ここから、イングランドとアイルランドの関係に、宗教問

題が入ってくるのだ。その後、イングランドはアイルランドに対して、プロテスタント化政策を行うようになった。

アイルランド人にとって、宗教は常に重要なものであった。しかも、イングランドがプロテスタントになったのは、王様の不敬がキッカケとなった。アイルランドのカトリック僧侶が中心になり、1534年に全面的な反乱が勃発する。

《エリザベス1世とアイルランド》

1500年代の後半になると、ヘンリー8世の娘であるエリザベス1世が、アイルランド政策を引き継いだ。彼女も、アイルランドを何とかイングランドのものにしようとした。その一つが「プランテーション(植民)政策」である。アイルランド人から土地を取り上げ、忠実なるイングランド臣民に与えてしまった。「プランテーション政策」に反対してアイルランド人は反乱を起こしたが、結局、イングランドに破れてしまう。エリザベス1世時代のイングランドは、スペイン艦隊を破り、勢いもあり国力がついてきていた。頼りにしていたスペインも応援に駆けつけてくれなかったのだ。

1600年代になると、エリザベス1世亡き後、スコットランド王ジェームズ1世が、スコットランド王とイングランド王を兼ねることになった。ジェームズ1世も、アイルランド侵略政策を踏襲した。もともとスコットランド王であったジェームズ1世は、アイルランド人から取り上げた北アイルランドの土地に、大量のスコットランド人を移住させる政策をとった。これが、現在の北アイルランド問題の発端である。このときに、土地を奪われたアイルランド人と、プロテスタントで植民者のスコットランド人、イングランド人の対立の構造ができ上がったと言われている。

1600年代の中頃、ヘンリー8世、エリザベス1世亡きあとのイングランド国内は、プロテスタント化したものの、カトリックも勢力奪回を図っていた。後ろには、カトリック国のフランスとスペインがついている。なんとかイングランドをカトリックに戻そうと画策していた。

ジェームズ1世の跡を引き継いだチャールズ1世は、カトリックにも理解を示した国王だった。カトリックの勢いが強くなることを恐れたプロテスタントは、1649年に「清教徒革命」を断行した。この時、活躍したのがクロムウェルである。国王のチャールズ1世の首を切り、カトリック教徒を徹底的に迫害した。

《クロムウェル》

国王を処刑したクロムウェルは、今度は、カトリック教徒を一掃するために、ダブリンに精鋭部隊を送り込み、アイルランド国内

で虐殺を行った。この虐殺でアイルランド人の4分の1が殺され、生き残った者の中には、西インド諸島に、奴隷として売り飛ばされてしまった人もいた。奪った土地は、活躍した兵士や入植者に与えた。このような背景からクロムウェルは、アイルランド人にとって、歴史上もっとも嫌いな人物として胸に刻まれこまれている。

イングランドの対アイルランド政策は、時の国王の宗教観によって多少違っていった。クロムウェルによって首を切られた王様チャールズ1世の息子たち、チャールズ2世とその弟のジェームズ2世は、清教徒革命の間、フランスに逃れていた。クロムウェルのカトリック教徒に対する弾圧は、あまりにも激しかった。やりすぎだと思っていた国民も、彼の死でひと安心した。そして、フランスに避難していたチャールズ2世を呼びもどし、王位につけてもらった。チャールズ2世のあと、王位についたのがジェームズ2世である。この2人の王様は、カトリック国のフランスに亡命していたくらいであるから、カトリック教徒に対しても同情的なところがあり、アイルランド人から奪った土地を返す政策をとったりした。あまり同情しすぎたため、英国国内のプロテスタント教徒たちから反発を受けることになる。弟のジェームズ2世は、カトリック寄りだということで国外追放にあってしまい、アイルランドに逃げて、そこで挙兵しプロテスタント軍と戦うが破れてしまう。

《独立運動》

プロテスタント寄りの王様になれば、アイルランド政策は、また逆もどりする。1700年代には、英国に議会ができ、新しい刑法典が決められた。その法典には、アイルランドのカトリック教徒は、投票したり、軍隊に入ったり、子ども達をカトリックの教えにそって教育することまでも禁止する旨書かれていた。

アイルランド人たちは、自分たちの文化を守るため、裏に隠れ、「文化防衛学校」をつくり、かれらの言語や文学を教えつづけた。

1700年代の後半になると、独立の機運が高まってくる。特に、フランス革命(1789年)の影響が大きかった。独立運動家たちは、フランスの援助を得て革命を起こすが、結局、失敗に終わってしまう。そして、英国の策略で、アイルランド議会は英国と連合を組むことを議決してしまう。1800年には連合法ができ、アイルランドは合法的に英国の一部になってしまいうのだ。

1828年になると、ダニエル・オコネル(Daniel O'Connell)と

いう弁護士が、独立運動を始めた。彼は、ダブリンを二分するリフィー(Life)川にかかっている橋にその名前を残している。市民からの信頼が厚く、ダブリン市長経験後、アイルランド議会に選出された。各地で集会を開きアイルランドの独立を訴えた。タウの丘の集会では、100 万人もの人が集まったと言われている。

オコーネルの運動に対して、英国はあらゆる策略をめぐらし妨害した。反面、集まったアイルランド人たちは、アイルランド独立のためには武力も辞さないと主張する者も多かった。しかし、オコーネルは平和主義的解決を図ろうとしたため、アイルランド人の力を、結集することができずに運動はバラバラになった。そこからアイルランド青年党のような武力解決を図る集団が出てきた。そして、アイルランド共和兄弟団 (Irish Republican Brothers) という秘密結社ができた。IRB は、日本の新聞でもときどき話題になる IRA の前身となる組織である。

《大飢饉》The Great Famine

1845 年から約 4 年の間、アイルランドは大飢饉になり、独立運動どころではなくなった。この飢饉で、100 万人のアイルランド人が飢えのため死亡した。また、飢饉を逃れるためにさらに 100 万人の人々が国を離れて、イギリス、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドに移住していった。移住していった人たちが、移住先でアイルランド人社会をつくり、国外からアイルランド独立を支援するようになった。

《ボイコット大尉》

"Boycott"という英語は、1800 年代後半に、アイルランドにいたイギリス人領主のボイコット大尉の名前からきている。この大尉は、領主の中でもひどい人物だったらしく、アイルランド人からとても嫌われていた。そこで、当時の人たちは、この領主に反抗することを「ボイコットする」という意味で使うようになった。

1700 年代後半は、イギリスで産業革命が起こり、物の生産が大きく飛躍し、好景気の時代になっていた。アイルランドにも新しい産業が入ってきたが、景気のよい産業はプロテスタントが握っていた。また、1700 年代から 1800 年代は、それぞれの国が自分たちの国家を意識するようになった時代である。

British の中にも、アイルランドに住むうちに、アイルランドを自

分の国と考える人も出てきた。1875 年頃には、プロテスタントのパーネルが独立運動の闘士として活躍した。

1800 年代後半から 1900 年代かけてのアイルランドは、自治独立を掲げたグループと、イギリスとのつながりを主張するグループとの、アイルランド国内での勢力争いの時代である。それぞれのグループが軍隊を作り、いつ内戦が始まるかわからない状態が続いた。

国内での勢力争いが続いているところに、第 1 次世界大戦が始まったので、勢力争いは、一時、休戦状態になった。アイルランドは英国につくべきか、ドイツにつくべきか迷っていた。英国のために戦い、その功績によってアイルランド自治独立を勝ち取るということになり、アイルランド連隊は英国軍側につきドイツと戦った。中には、英国の敵はアイルランドの味方と考えドイツを応援するグループもあった。

《アイルランド独立》

英国は、第 1 次世界大戦のとき、アイルランドに駐留させていた軍隊の多くをドイツ戦線に送り込んだ。その隙をついてか、アイルランド共和軍が反乱を起こした。イギリス人で構成するアイルランド警察隊とアイルランド共和軍の激しい戦いが続いた。この時、アイルランド共和軍を国外から支援したのが、海外にいるアイルランド人たちであった。物質的援助だけではなく、世界に対して、アイルランド自治独立の正当性をアピールした。その結果、世界中は英国に対して、冷やかな目を向けるようになった。

1921 年に停戦が合意され、プロテスタントが多く住む北アイルランド 6 郡を除く、26 郡がアイルランドとして独立することになった。しかし、全面独立を主張するグループがまだまだ活動しており、アイルランド自由国軍との間で、内戦がつづいていた。1938 年になって、やっと新憲法が議会を通過し、アイルランドはエール(Eire ゲール語)という国名になり、完全に英国の支配下から離れることができたのだ。因みに、アイルランドは英語読みの名前なのだ。

《中立国アイルランド》

第 2 次世界大戦中に、中立を守った国としてスイスが有名だが、アイルランドも頑固に中立を守り通した国であることは、あまり知られていない。

戦後、新政府は「アイルランド共和国法」を議会で通過させ、アイルランドを正式な独立共和国として世界に対して宣言した。

同時に、英連邦からも脱退した。アイルランド共和国を英語では "The Republic of Ireland" という。共和制の国だから、元首は大統領となる。1990 年に大統領になったメアリー・ロビンソンや 1997 年の大統領選に勝ったメアリー・マカリスは、二人とも女性大統領だった。

約 800 年にわたるイギリスの支配は終りを告げた。しかしアイルランド人には、真の独立は北アイルランドがアイルランドに戻った時だ、と主張する人々がいて、英国からの奪回をめざして武力闘争を行っている。

1998 年 4 月には、北アイルランド紛争についての和平交渉が、イギリスの首相トニー・ブレアとの間で行われ、かなりの進展が図られていると当時の新聞が伝えている。

《アイルランド人の名前》

ある時、アイルランド出身のグローニャと話をしていると、名前の話題になった。

「グローニャ、典型的なアイルランド人の名前ってあるのかい」

「私の "グローニャ(Grainne)" って名前は、英語読みになるとグレイス (Grace) なの。グローニャは典型的なアイルランド人の名前よ。グローニャの "Grain" は "Love" っていう意味よ」

「ほかに、女の子ならアッシュリン(Aishling)、キアラ(Ciara)、男の子ならリアン(Rian)なんかもアイルランド名なの。たぶん British たちは、私の名前のつづりを見ても、こちらから教えないかぎり "グローニャ" と発音できないはずよ。Britain にはない名前だから……。アッシュリンの意味は "夢 (Dream)" よ。夢見る女の子って感じなの。男の子のリアンは、リトルプリンス (Little Prince) よ」

「典型的なアイルランド姓っていうのもあるのかい」

「"O" や "Mac" で始まる姓は、たいていアイルランド

人よ。"Mac" はスコットランドでも使われているけど……」

パトリックは、アイルランドの守護聖人からきた名前であることはすでに書いた。またフツジェラルドも、アイルランド系の姓であることも分かった。独立運動のリーダーだったダニエル・オコーネル (Daniel O'Connell) も典型的なアイルランド人の名前である。オニール (O'Neill)、オブライエン (O'Brien)、オコーナー (O'Connor)、オドネル (O'Donnell)、オドフィー (Odey)、オシェア (O'Shea) など、“O”ではじまる名前は、ほとんどがアイルランド系の人たちだ。また、ハンバーガーで有名なマクドナルド (MacDonald) のように、Mac で始まる姓もアイルランド人に多い。Mac で始まる名前は、もともとスコットランド人に多い名前

である。アイルランド人に多いのは、昔、祖先がスコットランドからアイルランドに移住してきたためである。シェイクスピアの小説にでてくる「マケベス (Mac Beth)」はスコットランドの王様だったことから分かる。Mac で始まる名前には、マックブライド (McBride)、マックマーロー (McMurrough)、マックニール (McNeill) などがある。Mac は「誰その息子」を意味する。マクドナルドは「ドナルドの息子」ということになる。

《姓名と出身地》

“O”で始まる姓はアイルランド系の名前であり、Mac もしくは Mc で始まるのは、スコットランド人やアイルランドを祖先に持つ家系に多いことが分かった。たとえば、イギリス人が“オブライエン”という名前を耳にすると、この人はアイルランド系かもしれないと思う。「李(リ-)さん」とか「朴(パク)さん」と聞くと、日本人は「ああ、韓国系の人だな」と、思うのと同じ感覚と考えてよい。

これ以外にも、出身が分かる名前がある。ジョーンズ (Jones)、ジャックス (Jacks)、デービス (Davis)、ウィリアムズ (Williams) のように、“S”で終わる名前は、ウェールズ人の場合が多い。Son で終わるのはイングランド系の人たちに多い。たとえば、ジョンソン (Johnson)、アディソン (Addison)、デイヴィッドソン (Davidson) 等がそうである。Mac と同じように「誰その息子」の意を表している。グラッドストーン (Gladstone)、リビングストーン (Livingston) のように、Stone (石) で終わるものも多いが、これはスコットランド系の人たちの名前である。

《アイルランド系有名人》

ジョン・F・ケネディが、アイルランド系一族の出身であることはすでに述べた。レーガン元大統領も、アイルランド系であることは知られている。

日本の学生なら誰でも知っている、ラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn) も、母親はギリシャ人であるが、アイルランド出身である。英文科の学生におなじみのバーナード・ショウ (George Bernard Shaw) やオスカー・ワイルド (Oscar Wilde)、ウィリアム・バトラー・イエーツ (William Butler Yeats) 等も、アイルランド系の作家なのだ。

人物以外にも、歌では、「庭の千草」や「ダニー・ボーイ」が、アイルランドからきたことは、意外に知られていない。

《エメラルド・グリーンの島》

聖パトリック記念日のパレードでは、みどり色のタスキをかけたり、服装自体をみどり系でまとめた行進する。みどり色は、アイルランドを象徴する色なのだ。今、手元にアイルランド各地を紹介した本がある。平原地帯は、なだらかな丘陵がどこまでも続いている風景写真が出ている。また、あちこちにある湖水は、自然がそのままになっている。起伏のある海岸線もアイルランドの魅力となっている。平原地帯では牧牛を、高原地帯では牧羊が行われており、国全体が牧草地帯であるかのようだ。北アイルランドは、英国の影響もあり工業も盛んであるが、南アイルランド地方は牧畜・農業が中心となっている。土壌はあまり肥えていないため、栽培はジャガイモや麦類が中心だ。土壌の関係で、農産物も限られていることや、自然破壊が少ないため、町を少し離れただけで、自然と出会える牧歌的な国なのだ。その草原には、季節になると、草木が一面に咲きみだれている。そのようなところから、アイルランドは、別名エメラルド・グリーンの島と呼ばれている。

1990年代は、アイルランドも国家経済を向上させるため、工業誘致を盛んに行っている。現地に生産工場を建設し、アイルランド進出をしている日本企業も増えている。

《アイルランド人》

筆者自身、イギリス人もアイルランド人も区別がつかなかった1人である。ところが、彼女たちと何ヶ月間一緒にいて、だんだん違いが分かってきた。アイルランド出身のCAたちは、イギリス人CAたちに比べ、「情がある」というか「世話好き」というか、ウェットな心の持ち主が多い。そして、どちらかというとおとなしく、素朴なところがある。悪く言えば、田舎っぽい感じである。その点、イギリス人CAたちは、アカ抜けているが、ややクールなところがあった。アイルランド人CAは、相手への気のつかい方が、日本人に似たところがある。日本人に相通ずるところがあるのも、アイルランド人CAをかなり採用している理由のひとつになっている。飛行中に、あるアイルランド人CAに、

「アイルランドの人たちって、どんな人たちの」

と聞いたところ、

「アイルランド人って、ものをすすめるのが好きなの。うちの母なんか、ケーキを誰かにすすめて、相手が“欲しくない”と言っても、それでも“ほんとにいいの”と言いながら、またす

すめるの。相手が“本当に結構です”といっても、“あなたはこのケーキ、きっと好きなはずよ”と言ってまだすすめているの。そうそう、もつひとつ、アイルランド人って、お互いのきずなが強いところがあるわ。イギリス人は、たとえば、海外でお互いイギリス人だと分かってても、知らん振りしているところがあるけどアイルランド人は違うわ」

このアイルランド出身のCAの話聞いて、彼女たちがよく使う言い回しを思い出した。休憩時間に、

「You like tea?」(紅茶いらない?)

と聞いてくる。今は飲みたくないので、

「No, Thank you」

といって断ると、

「Are you sure?」(本当に?)

とかならず言う。そして

「I'm sure」(本当に飲みたくないんだ)

と答えても、また、

「Really?」(本当に?)

と言っていた。また、訓練最後の日、修了式のあとで、クラス全員にお別れの挨拶をしてところ、アイルランド出身のアンマリーがきて、

「You miss us?」

(私たちがいなくなってさびしくない)

「I miss you all. But I'm OK.」

(さびしいけど、大丈夫だよ)

「Are you sure?」(本当に大丈夫なの)

「I'm OK.」(大丈夫だよ)

「Really?」(本当に?)

と何度も念を押すのだった。「Are you sure?」は、いろいろな場面で使える表現であり、相手のことを思いやる言い回しなので、覚えておくとよい。だれかがどこかぶつけたり、転んだりしたとき、「大丈夫かい」と聞いて、「大丈夫」と答えても、「Are you sure?」となるのである。

《アイルランド英語》

英語と米語が、表現や使う単語に違いがあるように、アイルランド英語もイギリス英語とやや違う。訓練が始まって最初の頃、よく分からなかったが、慣れてくると彼女たちの喋る言葉が、少し違うことに気がついた。しかし、なんとなく違うような気がするが、具体的にどこが違うのか分からなかった。休憩時間に、また、英語の話題になった時、アイルランド

出身の教え子に、

「君たちアイルランド人の英語は、British 英語と、なんとなく違うような気がするんだけど」

「使う単語も少し違います。例えば、“運動靴”のことを、British は “Trainers” と言いますが、私たちは “Runners” を使います。British 英語では、“戸だな”は “Cupboard” ですが、アイルランドでは “Press” と言います」

「発音も違うところがあるのですよ。“Film”のことを、イギリス人は “フィルム” と発音しますが、多くのアイルランド人は “フィム” と発音してします。th 音もすこし違います。“That” は “ダット”、“Those” は “トース” にちかい音です」

英語は、イギリス人がアイルランドに持ち込んできたものであり、アイルランドには、ケルトの流れを組むゲール語(Gaelic)がある。アイルランド英語は、ゲール語の中に英語が入ってきて混ざり合った。そのため、アイルランド独自の英語表現や発音が形成されてきた。

アイルランド人は、歴史の中で、自分たちの言葉を使うことを禁止されてきた。しかし自分たちの言葉を忘れないように、隠れてゲール語を伝承してきた。アイルランドは、英語国として知られているが、英連邦から完全独立後、ゲール語を国語として復活させる運動も盛んである。いまや、学校の授業にも、ゲール語の時間が取り入れられている。隠れて自分たちの言葉を伝承する必要がない時代になったのだ。(参考 「物語アイルランドの歴史」波多野祐造著)

一次ページへ続くー

第5章 街に出て

《信号無視》

訓練の合間の休日には、渋谷や原宿に行っていた。ショッピングをしたり、ブラブラしたりするには楽しい街らしく、よく繰り出していた。品川からは銀座の方が近いのだが、銀座にはあまり行くことがないと言う。理由を聞くと、銀座は若い彼女たちにとってあまり楽しくないらしい。

イギリスでは、信号は車のために設置されているようなところがあり、信号無視して道路を横断している歩行者をよく見かける。それを見ても、警官は何も咎めない。自分の責任で道路を横断する。車に轢かれずに自分で注意する。自分の身は自分で守るのが、イギリス人の考え方になっている。日本人は信号にしたがって道路を渡るが、イギリス人は車が来なければ横断してしまう。

ある朝、朝礼のとき、ランチエスカが警察官に注意された話になった。何人かで連れ立って、土曜日に渋谷へ出たらしい。信号が、「赤」だったけど車も来ないので横断し始めた。ちょうど道路の真ん中に差しかったところ、おまわりさんにピピッと笛を吹かれたそう。よくわからないが自分たちが注意されているようすなので、とにかく元の歩道に戻った。

「日本では勝手に横断してはダメなのですか」

「歩行者(Pedestrian)も車のドライバーも“信号に従う”というのが、日本社会でのコンセンサスになっているのだ」

馬車から車社会に移行したヨーロッパと、駕籠から車社会に移行した日本では、交通安全に対する考え方も違う。馬はいつ暴走するか分からない。ヨーロッパ人は、馬がいつ自分の方に暴走してきてもいいように、心構えをしておかなければならなかった。車も、馬と同じく暴走することがある。暴走することがなかった駕籠文化の日本では、交通事故に遭うこともなく、自分で自分の身を守る習慣ができていない。

日本では、信号にしたがって横断していて事故に遭う人が決して少なくない。小学校の交通教室でも、道路の横断は、「青は渡れ」「赤は止まれ」と教えている。もう一歩踏み込んで、横断するときは車が止まるのを確認するところまで教えるといふ。

イギリスで信号待ちをしている時、車道に目をやると、「Look Left」(左側を見よ)とか「Look Right」(右側を見

よ)と書いてある。信号を見るより、まずは手前側の車線を走る車が来る方向を見ることが大切なのだと教えている。そして、信号が青になればすぐに横断しはじめる日本人と違って、信号に従っている時でも、イギリス人は、「赤」で車が止まるのを見届けてから横断しはじめる。

《日本人の肌》

誰でもそうだが、自分にないものがあると、人はそれにあこがれる。当時、日本の若者たちの間では、髪を茶や金色に染めるのが流行っていた。欧米人の金髪や栗毛色の髪、そしてブルーやグリーンの瞳は、憧れの的だったのかもしれない。また、まわりの人とちょっと違う印象を与えることで、目立とうとしていたのかもしれない。一方、ロンドン基地 CA たちは、

「日本人の肌って、とてもきれいなのでうらやましいわ」

この「きれい」を、彼女たちは Gorgeous(ゴージャス)という言葉で表現していたのを思い出す。日本人は、黄色人種と言われているが、彼女たちの目には、日本人の肌はきめが細かく、ゴージャスに映るらしい。欧米人は、日本人に比べ、女性はうぶ毛が多いし、男性は毛深い人が多い。肌もありきめ細かくない。彼女たちもそれを知っている。

「日本人は、私たちみたいな髪の色に染めて楽しんでいて羨ましいわ。だって私たちは、日本人のような肌になりたいけど、できないんですもの」。

《こどもが大好き》

本社見学や都内見学などで、ロンドン基地 CA を連れて東京の町に出ることが何度あった。彼女たちは、街で赤ちゃんを見つけると、かならず近寄っていく。そして“So cute!”とか“Lovely!”を連発する。他人の赤ちゃんなのに写真を撮る娘もいる。クラス谁也が、赤ちゃんや小さい子が好きだという。日本の赤ちゃんや小さな子は、彼女たちに言わせると、ポチャポチャしていて何とも言えなくかわいいそう。ヨーロッパの若い娘たちは、小さな子に関心などないと思っていただけに、意外なことだった。

イギリス人は、元来、動物やこどもが大好きな国民だそうである。こどもを大切にしている。産業革命で国が豊かになる前は、こども達は重労働に駆り出され、十分な食べ物も与えられず、何時間も働かされた時代が長く続いた。貧困のみならず、衛生状態もよくなく、何度かコレラやペストなどの

伝染病にも見舞われた。1800 年代前半には、1 才から 4 才までの乳児の死亡率は、特に工業地帯では、50%近くになったという統計もある。小さな子の半分を失った過去の経験が、イギリス人をこども好きの国民にしたのかもしれない。

親が、7 才以下のこどもだけを残して留守にすることを禁止しているし、こどもを道路で遊ばせてはいけないことになっている。こどもの命を社会全体で守っている。

大事にするが故に、こどもへのしつけもきびしい。他人に迷惑をかけたり、公共の物を大切にできなかったりした時は、親のみならず社会全体でこどもに注意をする。話題がしつけの話になったとき、カレン・M が次の英語表現を教えてくれた。子供たちが友達の家で食事に招待され、家を出るとき、母親は子供に向かって、

「Mind your P's and Q's !」

とかならず言うそう。直訳すると「人さまのところに行って P と Q を忘れないこと」であるが、意味は「マナーに気をつけなさい」ということなのだ。「P」は Please、「Q」は Thank you のキューを意味している。Please と Thank you を必ず言いなさいとしつけている。

《まわりへの配慮》

イギリス人の、まわりの人たちへの心配りには見習うべきものがある。他人がいるようなレストランや公共の場所などでは、決して大きな音を出さない。大きな笑い声も上げない。いつも静かにしているかという、やはり若い人たちである。騒ぐのは大好きだ。どのような時に騒ぐかと言えば、たとえば部屋を借り切ったのパーティーのように、他人の迷惑にならないときは思いっきり騒ぐ。

邦人 CA たちと、ときどき食事会や飲み会をすることがあった。そして、たいていは、場の雰囲気盛り上げる娘がひとりやふたりはいる。まわりの人たちも、ついつられて、いつの間にか盛り上がり、他のお客のことは目に入らなくなる。話し声も一オクターブ上がっていく。日本の町ではよく見かけるが、外国ではほとんど経験しない光景だ。部下たちが楽しんでいるので、まわりの人たちに迷惑にならない限り、ワイワイさせておくのだが、ときどき「もう少し静かに!」と注意することがある。

文化比較研究によると、一般的に、日本人の方が英語国民より声が高く、音量も大きいそう。加えて、日本の若い

女性は、わざと、「少女」のような声を出すことが多い。日本の男性がそれを好むことが背景にあるようだ。また、腹式呼吸の英語国民と違い、日本人が胸式呼吸で発声するから、どうしてもトーンが高くなる。ロンドン基地 CA と邦人 CA を見ていると、もの静かな話し方をするイギリス人は大人の女性に見える。日本の若い女性たちが子供っぽく見えるのも、話し方や話しているときのしぐさに起因しているようだ。

《騒音について》

音に対する比較研究もされているが、日本人が心地よいと思う周囲の音は、欧米の人たちには相当うるさく感じる。家でテレビをみている時の音量もけっこう大きい。駅や列車のアナウンスもしつこく感じる時がある。レストランやバーでかかっている BGM の音量もガンガンしている。BGM は Back Ground Music であるのに、Back ではなく、Music が前面に出てしまっている。ましてやパチンコ屋に入れば、耳をつんざくような音が 1 日中聞こえてくる。筆者も、パチンコ屋が嫌いではないのでよく行くが、夢中になると気にならない。それよりあのうるささがないと今ひとつ気が乗らない。

騒音に対しては、中国人も似たようなところがある。香港などの中華料理レストランで食事をする分分かるが、どのテーブルでもワイワイ言いながら食事をしている。まわりがうるさく話しが聞こえないので、ついこちらのテーブルでも大きな声で喋ることになる。これが中国式食事法なのだ。これに慣れると、あまり静かすぎると中国料理を食べた気がしなくなる。

ヨーロッパ社会では、騒音に関してはかなりナーバス(神経質)なところがある。例えば、夜に洗濯機や掃除機を使っていると、隣人から苦情がきたりする。緊急の場合を除き、他人の家へ、夜に電話をかけることも非常識とされている。国によっては、夜半に、車のクラクションを鳴らしてはいけないことになっている。ましてやアパートなどでは、子供が飛んだり跳ねたりしていると、昼間といえども階下の住人がすっ飛んでくる。このように、欧米社会では静寂さを大切に、お互いに騒音で迷惑をかけないようにしている。

《歩き方と足音》

街中や電車の中で気になるのだが、日本の高校生や若い人は、かかとを引きずった歩き方をする。そのような歩き方をする、足音がだらしく聞こえる。大人でも引きずっ

て歩いている人を見かけることがある。

「日本人の歩き方って、なんだか幽霊が歩いているみたい」

欧米に行くチャンスがあったら、旅行の先々で、人間ウォッチングをしてみしてほしい。できれば日本人観光客とその国の人の歩き方を見比べてみるとよい。日本人はひざをよく上げないで歩いている。一方、欧米人はひざをしっかりと上げて歩く。欧米人からみると、日本人の歩き方は、欧米の幽霊を連想させるようだ。日本の幽霊は足がないが、欧米の幽霊には足がある。そして、幽霊は、かかとを引きずったように歩く。

これはタミ文化とイス文化の違いからきている。タミ社会で育った日本人は、タミを歩くときには「すり足」という歩き方をしてきた。着物を着ているため、ひざを上げることは作法に反していた。そして、ゾウリ・ゲタ文化である。ゲタでの歩き方は、カラコロンと音を立てるのがゲタらしい。ゾウリはかかとをすりながら歩く。ケツ文化の国々では違う考え方をしてきた。加えて、音に対する感覚の違いがあり、欧米では、かかとを引きずっているような音を出さないようにしている。

《走る》

日本人はよく走る民族のようだ。日本の中にいると、あまり気にならないが、欧米社会に行くと分かる。ホテルのロビーで、部屋に忘れ物をしてきたと言っては、エレベーターに向かって走っていく日本人旅行者をよく見かける。日本人が走るのを見て、欧米人は何か大変なことが起きたのではないかと心配する。欧米人は火事でも起きないかぎり走らない。

邦人 CA のたまごたちも、廊下を走っているのを見かける。その都度、「走るな!」と注意する。会社の中で走るのは、仕事の準備や手順が十分でないからだ、と教えている。忘れ物をするのも同じだ。

イギリスや他のヨーロッパでは、紳士や淑女たる者は走ってはいけなく、と教育されている。紳士たる者は、どんなことが起きてもあわてずに、冷静な判断とともに、落ちついて行動することが要求されている。女性が走るのも、大人として、はしたない行為と見なされる。ロンドン基地 CA たちも、廊下を走ることはしなかった。

《日本人は白い車が好き》

日本人は、一般的に清潔好きな国民と言われている。そして、「好きな色は?」と聞かれて、「白」と答える日本人が多いことも統計に出ている。カレンが風邪で授業を欠席した。そのため、放課後 1 人残させて補講することになった。補講が終わる時間帯には、当時の訓練所から京浜急行の旧羽田駅まで行くバスは終わってしまっている。筆者は通勤に車を使っていたので、途中、寮でカレンを降ろしてから帰宅することにした。

教官の車に乗っているからか、男性の車に乗っているからか、やや緊張気味だったカレンが独り言のように「日本って白い車が多いのね」

とホツリと言った。当時、筆者の車も白色だった。確かに自家用車は白が多かった。経済誌で、車の色について興味ある記事を読んだばかりだった。その記事では、日本では景気のよい時は、白色の車がよく売れると書いてあった。その記事のお陰で、日本人は白を好むことや、景気がよい時は白色の車が売れることを、カレンに解説できた。その後、街中を走る白色の車がどのくらいの割合なのか調べてみたが、自家用車の 10 台中 5 台前後(当時)が白色をしていたのを思い出す。最近では、当時に比べると白い車はめっきり減ってしまった。景気が悪くなると、同じ車の所有期間も長くなるので、白系よりダーク系の車が売れるようだ。それでも、ヨーロッパの国で走っている白色の車の数に比べると、ケタはずれに多い。

《ヨーロッパの自動車》

ヨーロッパといっても暖かい国もあれば、平均気温が低い国もあるので、一概には言えないが、ヨーロッパの町では白色の車が似合わない。特に、空がどんよりした冬場には、白色は雲の色と同系色になるので映えないし、くすんで見えてしまう。白は青空に合う色である。イギリスやフランスで見ると、濃い色の車が圧倒的に多い。

《日本のデパート》

訓練合間の休日には、日本のデパートにも行った。日本のデパートも、ロンドン基地 CA にとって、何か異文化を感じる場所らしい。

「日本のデパートでは、中に入ると、案内係の人がお辞儀をして挨拶してくれます」

「エレベーターの中にも案内の女性がいて、いろいろ説明しています」

ロンドンにも、Harrods、Liberty's、Mark & Spencer、Selfridges など、高級品を扱うデパートから大衆的なデパートまである。しかし、現在ロンドンのデパートでは、入口に入っても誰も挨拶してくれないし、エレベーターガールもいない。

イギリス人作家のジェフリー・アーチャーが、「チェルシー・テラスへの道」(As the crow flies) という本を書いている。1900 年代初頭に、ロンドンの下町から身を起しデパート王になった主人公を描いた物語だ。この本を読むと、イギリスのデパートも、当時は高級感を売りにしており、中産階級以上の顧客を相手にしていた様子がうかがえる。昔は、ロンドンのデパートにもアーマンや案内係もいたようだ。それが時代とともに大衆的になり、経営の効率化が求められ、余分な人員の配置はしないようになってしまったらしい。その点、日本でもデパートは大衆化した。同じ大衆といっても、日本人は中産階級意識がつよい。それらの顧客を相手にしている日本のデパートは、信用と格式を重んじていないと、消費者にソッポを向かれてしまうので、適度に高級感を維持している。案内係もエレベーター係もそれらの役割を担っている。

因みに、チェルシー街というのはロンドンの中でも高級住宅地として有名な場所である。

《いらっしゃいませ》

授業の合間に、日本の印象について意見を述べさせた。人々がぶつかってくることや、電車に乗るときに押されて戸惑ったりもしていたが、感心することもけっこうあったようだ。その一つに、「日本では、店員がニコニコしていてうれしそうに働いている」というのがあった。

「日本では、どの店でも店員がスマイルするし、客に "いらっしゃいませ" と挨拶しています。みんなハッピーそうに働いているのでうらやましいです」

「日本の店員は元気です!」

確かに、デパートをはじめ、一般の商店でも、店員は愛想がよいし、客が店に入ってくると、「いらっしゃいませ」と言う。銀行でさえも、「いらっしゃいませ」と言っている。そしてニコシしながら対応している。

ロンドンでデパートに入っても、誰も「いらっしゃいませ」とは言わない。レストランでは、「Good afternoon !」や「Good evening !」とか「How are you, today ? sir.」とは言うが、

「いらっしゃいませ」に相当する表現を使うことはない。ましてや、両替するために銀行に入っても、「Hello!」の一言もなく、事務的な言葉だけで終わってしまう。日本人旅行者が、ヨーロッパの町々で買い物をして感じるのは、店員の愛想のなさである。特に、有名ブランドを扱っている店の店員は、「簡単に笑顔は見せないわよ」といわんばかりだ。日本人から見ると、日本人が相手だから愛想がないのかしらと思ってしまう。欧米では、知らない相手にやたらとニコシしないことは前にも書いた。お客になる人なのか、ただのひやかしなのか分からないうちは、店員にとって利害関係のない相手なので、やたらとニコシしない。店員の愛想のなさは、イギリスだけでなくヨーロッパではどの国でも同じような傾向にある。

《ガイジンとガイジン》

みなさんが「ガイジン」というとき、どの国の人をさしますか。アジアの国の人達を呼ぶとき、私たち日本人は、「ガイジン」という言葉を使っているだろうか。私たちが「外人」という漢字をみたり、「ガイジン」と呼んだりするとき、そのイメージは、欧米人が対象になっていることが多い。

これは、歴史と関係がある。特に、大日本帝国時代に関係があるようだ。昔の日本にとっては、東南アジアのほとんどの国は、大東亜共栄圏の一員であり、身内と考えていた。

一方、日本にとって欧米諸国は、身内ではなく、外の人であり、日本人と考えを異にするコントロールできない人たちだと考えていた。「外人」ということばには、そのような響きが含まれている。「ガイジン」という言い方は、ロンドン基地 CA が、一番嫌いな日本語だった。そして、誰も教えていないのに、覚えた言葉なのだ。

「どうして日本人は私たちのことを“ガイジン”と呼ぶのですか」

「…」

「私たちの国では、“ガイジン”という言い方をしません。あえて他国の人を指す時には、どことこの国の人と呼びます」

と、よく言われた。確かに、外国を旅行していると、旅で一緒になった人や、おみやげ屋の人に、「あなたは日本人か」とよく聞かれる。

そして、日本人は、「ガイジン」と呼ぶだけではなく、宇宙人

がきたというような目で必ずジロジロと見る(Stare at)らしい。街の中でも、会社の中でも、同じ経験を味わっていた。濁音が入ったこの言葉の響きも、聞いている彼女たちにとっては、あまり気持ちのよいものではなかった。

私たちは、「ガイジン」という言葉を、何気なく使っている。意図がないのであれば、「外国からきた人」という意味で「ガイコクジン」の方を使ったほうがよい。テレビを見ていると、一部のタレントは平気で使っているが、放送コードでは、「ガイジン」は差別用語なので使わないようにしている、と聞いている。

《ジロジロ見る》

無意識のうちに、内と外を区別してしまうのは、日本人の昔からの癖になっている。昔の日本では、村人はお互い共同運命体として助け合いながら生きてきた。村の掟がつくれ、それを破る者は村八分にされた。よそ者が入っていくのは難しく、村人たちはよそ者に対して一種の警戒感を抱いていた。よそ者が来ると、村人たちは、そのよそ者を村に迎え入れてもよい人物かどうか品定めをする。

時代が変わっても、日本人の意識の中には、身内意識は強く残っている。国際化が進んだ現代でも、日本人は、同胞を信用するが、価値観の違う外国人に対しては色メガネをかけて見てしまう。悪い言い方をすれば、外国人は信用できない、と思っているフシがある。そこで、外国人を見ると、つい品定めのためにジロジロ見てしまう。

訓練の休みを利用して、クラスの何人かが箱根へ日帰り旅行に行ってきた。その次の月曜日の授業の合間に、隣のクラスのアリスが、

「箱根旅行の途中、電車の中でも、旅先でも、日本人にジロジロ(They stared at us)見られるし、子供たちは私たちを指さしました。とても不愉快な思いをしました。日本では他人をジロジロ見るのは失礼なことではないのですか」と強い口調で言ってきた。

「まだ日本では、欧米の若い女性を見ることはあまりないのだ。それに皆が魅力的なので、ついジロジロ見てしまったんだと思うよ。マスキの取材があったように、君たちは、日本ではまだまだ、めずらしい存在なんだ」

外国人があまりいないパキスタンのような国では、街を歩いていると、日本人がめずらしいのか、ジロジロ見られることがあった。しかし、ヨーロッパやアメリカでは、そのような経験は

ない。へたすると、ロンドンやニューヨークの街で、イギリス人やアメリカ人に道を聞かれる。

ロンドン基地 CA たちが入社してまもない頃、社内の人達でさえ、訓練を受けている彼女たちを見学にきた。「彼女たちがイギリス人なんだ！」と話しているのをよく耳にした。現場の邦人 CA たちも、最初のうちはロンドン基地 CA と同乗するとき、仲間というよりは、宇宙人でも見るような目で見ていた。しかし今では、彼女たちを好奇の目で見る者はだれもいない。だれも見向きもしない。これと同じように、日本も、訪日外国人が年間 1900 万人(2015 年現在)を超える時代になり、外国人をジロジロ見る人は少なくなってきた。

《ぶつかっても謝らない》

「街を歩いていると日本人がぶつかってくる」というのも、彼女たちにとってあまり愉快なことではなかったらしい。

日本人はとにかくよくぶつかってくるらしい。欧米人は、前方に人がいると、ぶつからないようにと、方向を変える動作が、日本人に比べ早いそうだ。日本人はぎりぎりまで他人との接触を回避しない。寸前で避けようとするが、結局ぶつかってしまうらしい。

日本人は、狭い国土に住んでいるせいか、毎日満員電車に乗っているせいか、他人と接触することをあまり気にかけていないところがある。ぶつかっても、コワイお兄さん達以外は、文句も言わない。ぶつかられて手に持っていたものを落とされても、しょうがないなという顔をして拾っている。

他人にぶつかって一言も謝らないのは、彼女たちの社会では考えられない。他人にぶつからないようにするのは、欧米では大切なマナーになっている。ましてや、ぶつかってしまったら、"Excuse me."とか"Pardon me."といって謝るのが、当然のこととなっている。ぶつからないようにすべきであるのに、それができなかったのだから謝る。欧米の街を歩いていると、ちょっとでも身体に触れられることがあると"Excuse me."と謝られる。ぶつかった方もぶつかられた方も、お互い謝っている姿をみる。

《他人に触れるのはタブー》

当時の京浜急行は、今と違い、品川方面から羽田空港行きの直行電車はなかった。訓練中のロンドン基地 CA たちは、蒲田駅で空港線に乗換えて羽田まで通っていた。北

品川駅から蒲田駅までは、下りなので混雑はさほどでもない。ところが、蒲田・羽田間の空港線は、車両の数も少なく、空港関係者の通勤でとても混んでいた。

大半の教官は、授業の準備があるため早めに出社する。ところが、一番年上のアレックスや CA 経験があるルイスや元 OL のフィオナが、教官たちより早く出社している。あるとき聞いてみた。

「どうして、早くきているのかね」

よく聞いてくれましたとばかりにアレックスが、

「通勤電車(Commuter train)が混むので、早い時間の Train に乗っています。乗車するとき、日本の通勤者(Commuter)は、私たちを押します(触ります)。我慢できません!」

《ソレハ侮辱デス》

訓練中に、「他人に触れる」問題でトラブルが起きた。授業は、他の教官にお願いすることもある。そこである教官の行動が、授業を一時ストップさせてしまったのだ。食事サービスの実技訓練の時、CA 役をしていたジャネットのサービスが、何かもたついていた。くだんの教官はイライラして、私が見本を見せるから後ろに下がっていなさいと言って、ジャネットの袖をつかんで後ろに下がらせた。邦人 CA であれば、自分ができなかったのだからしょうがないか、少し気恥ずかしいな、と思いながらも後ろに立って教官の手本を見ている。

ジャネットはまったく違った反応を示した。教官が袖を引っ張り、侮辱したということになってしまった。本人は、侮辱されたと思い、その場で泣き出してしまった。くだんの教官もビックリしてしまい、どう取りなししてよいのか困っている。

筆者は、たまたま授業がなかったので、自分のクラスの人たちが、しっかりとサービス実技を身につけているか様子を見ていた。授業が中断してしまったので、ジャネットをモックアップから連れだし、別の場所に移動し、落ちつくのを待って話を聞いた。彼女がいうには、自分はいろいろ考え工夫しながらサービスを行っていた。それなのに、皆の前で袖を引っ張られ、侮辱され、人格を無視された、というものだった。

くだんの教官が、袖を引っ張ることなく、「自分が手本を見せるから、見ているように」と説明していれば、このようなことは起きなかった。他人に触れることが、侮辱にまで発展することがある、というよい見本となった。

電車のなかで他人に触れられることも、袖を引っ張られることも、欧米人にとっては我慢のならないことなのだ。そこで、社内の掲示板に次のような案内が出た。

—ロンドン基地乗務員からのお願い—
私たちの社会では、他人に触れることは、とても失礼な行為となっています。私たちロンドン基地 Crew も、他人から触れられることに慣れていません。どうかお願いします。仕事中に私たちに触らないようにしてください。

日本では、「ねえー、ねえー、ちょっと聞いてよ。

彼ったらさあ…」と言っては、友達の肩をポンと叩いたりする。機内でも、「ジュリアン、ちょっと、これやってくれる」と言いながら、ロンドン基地 CA たちの背中をポンとやる。邦人 CA たちは、この行為に親しみを込めているのだが、相手はドキッとしている。

欧米では、相手の身体に触れるだけでなく、相手の持ち物や衣服に触れることもマナー違反となる。日本人は、「あなたのバッグ、すてきね」と言いながら、相手のバッグを勝手に触ることがある。くれぐれも注意を…。

《Good は普通》

訓練生がうまくできなかった時、教官としてどのような態度をとればよいか、いろいろ調べた。訓練生たちが、うまくできた時のほめ方も、知っておく必要がある。日本の感覚では、訓練生がうまくできても、「悪くなかったよ」「まあまあだったよ」程度の言い方で終わることが多い。そして、訓練生の方も、それを肯定的評価としてとらえる。小学校の生徒が相手ならいざしらず、社会人である CA のたまご達に対して、面と向かって、「よくできました」とはあまり言わない。教官の方も、訓練生だからこの程度だろうくらいに思っている。

「悪くなかったよ」を英語に訳すと "Not bad" となる。"Not bad" は、ヨーロッパ人の感覚では「良い」という評価にはならない。これを聞いて、ちょっとしょげている。

「まあまあできたな」と思って "Good" と言うこともあった。ところが、彼女たちの感覚では、"Good" は「普通」評価に近い程度なのだ。本当によくできたと思ったときは、

"Good" に "Very" を加えて、"Very Good" もしくは "Excellent"と言わなくてはならない。"Good"を使って、
「よかったよ」

と伝えと、

「どうすれば "よくできた" と言ってくれるのですか」

という質問が飛んでくる。欧米社会での評価は、Poor-Fair-Good-Very Good-Excellent の順になっている。"Good"は5段階評価法では普通評価となるのだ。

《人間(ひたひた)距離》

欧米人と接するとき、「欧米人は、日本人より安全空間が広い」ことを知っていたほうがよい。

人間は、他人があまり近づくと落ちつかなくなる。公園のベンチで、1人で座しているところに、すぐ横に他人が座ったら、誰でも、その人との間に距離をおこうとする。

よく見ていると、イギリス人は、握手が終わると、一歩引いて立ち、相手と話しをしている。日本人は握手をした後、そのままの位置に立っている。イギリス人と日本人が握手をすると、イギリス人は、日本人が近づいたままなので落ちつかなくなる。

欧米人にとって、腕を伸ばしてぐりと回した範囲が、自分たちにとっての最低限の安全空間と考えている。そのため、その安全空間の中に、他人が入ってくると落ちつかなくなる。できればもう少し離れてくれればとよいのに、と思っている。もちろん、これは他人同士の話しであって、恋人同士や家族の場合は、この空間距離はせまくなる。

欧米では、恋人同士や家族同士で抱き合っている姿をみる。欧米人は、無記名の他人との距離はある程度保っていたと考えている。一方で、身内同士の距離は近く、接触度も多い。日本人は、他人との距離はあまり気にならないが、身内との距離も欧米人に比べ広く保つ。接触度も少ない。

欧米人は、電車の中でも、エレベーターの中でも、混んでいてもできるだけ他人に触れないように努力する。電車の中で、座っている乗客の両足の間に、立っている人の足が入り込むなどということは考えられないことなのだ。

《丈とフィート》

ドイツ哲学者の大橋良介氏によると、たたみ一畳は、ひとりの人間が寝起きするのに必要な最低限の広さだそうだ

(『日本的なもの ヨーロッパ的なもの』大橋良介著 新潮選書)。「イチジョウ」の「ジョウ」を表す漢字は「丈」であり、昔の日本男子の身長を意味していた。日本人は、この一枚の畳の広さを基本に、室内空間を作ってきた。四畳は、4人の大人が生活するのに、最低限必要な広さである。ちょっと手を伸ばせば物がとれるし、お互いがぬくもりを感じる広さなのだ。ただし、四畳ではゆとりがなく、お互いぎすぎすしてしまうので、こたつ分の半畳を加えることによって、お互いの「間」とった。この四畳半が、日本人にとって落ちつく広さなのだ。長い間、このような生活をしてきたところに、日本人の空間感覚がある。

一方、欧米人の空間の広さは、Footの複数形であるフィート(Feet)で測られる。フィートは人間の歩幅をもとにした単位である。フィート法による家屋は、立って生活する空間である。立って生活するには、それなりの広さが必要となる。このような家屋で育ってきた欧米人の生活空間は、日本人より広いことが容易に想像つく。

加えて、ヨーロッパ大陸は陸続きであり、常に他民族が侵入してくる危険があった。何度も繰り返すが、その歴史は、侵略したりされたりの繰り返しであった。他民族に対する警戒心(身の安全に対するとらえ方)は、日本人が持っている感覚とかなり違う。

《エレベーターの中で》

アメリカでよく経験することだが、エレベーターに乗り合わせたアメリカ人同士が、お互い見ず知らずの間柄でも、"Good morning!"とか「ハイ!」と言葉を交わしている。多民族が集まったアメリカ人の生活の知恵といえる。

単一民族で形成されてきた日本では、他人に対する警戒心はうすい。征服された経験がないため警戒することに慣れていない。同じ日本人同士ということで、「私はあなたの敵ではない」ことを表現する必要などなかった。

ヨーロッパやアメリカでは、状況が日本とは違う。人種の違う人たちが大勢いる。人種が違えば価値観も違う。多様な価値観の人種が集まっている国では、お互いに敵でないことを、いつも表現していなくてはならない。知らぬ同士でも挨拶の言葉を交わす。言葉だけではなく動作でも表す。エレベーターの中で目が合うとほほえんだりする。日本の社会では、エレベーターの中で目があっても、見知らぬ人には無表情である。

これは習慣であり、マナーに近いものとなっている。日本人が海外に出るときは、自分たちの生活習慣をそのまま持ち込まないほうがよい。いつもニコニコしている必要はないが、相手がニコッとしたら「ほほえみ返し」ができるようになるとよい。

一方、ヨーロッパ人は、アメリカ人ほど愛想よくしているのを見かけない。どちらかというと無表情でいる。異民族に対して、この人は敵かもしれない、と無意識のうちに緊張しているのかもしれない。

《ドアがハッタン》

日本でも、欧米式に押ししたり引いたりして開けるドアが多い。ところが、日本では、開いたドアを後の人のために、しばらく手で押さえることをしない。手を放してしまうので、次の人は閉まりかけたそのドアをふたたび開けて出入りすることになる。押して開けるドアの時、へたすると、前の人が解き放ったドアが、自分のところめがけて勢いよく向かってこることがある。

欧米では、後ろに人がいるときは、開けたドアをしばらく手で押さえ、そのまま次の人に渡すのが習慣(マナー)になっている。次の人は、前の人に「サンキュー」と言いながら、ドアを引き継ぐように開けたまま押さえる。次の人は、その次の人のためにドアを開けたままで押さえている。人の流れが続いている限り、この動作が繰り返される。

ロンドン基地 CA も、街でデパートやレストランに入るときは、同じようにしている。かならず次に入ってくる人がいないかをふり返って確認している。後ろに人がいれば開けたドアをそのまま押さえているし、いなければドアを放す。

ところが、自分たちの習慣が日本でも行われているといい、そのつもりでいると、前の人はさっさと行ってしまい、ドアが勢いよく閉まりかけてくる。「オット!」と言いながら、ドアがぶつかって来そうになるので押し止める。ある CA は、閉まりかけるドアで思いっきり高い鼻を打ってしまった。

元来、日本の家屋は、玄関にしてもふすまにしても、戸を横にスライドさせて開閉する方式になっている。ドアというより「戸」という感覚である。ドアは押し開けるものであり、横に開けるのを英語では、あえて「スライディング・ドア」と呼ぶくらいだ。日本の家屋の影響もあり、日本では「スライディング・ドア」もかなりあり、それを自動ドア化している建物も多い。欧米型のドアを設置しているのは、洋風住宅やビルディング

などで見かける。反対に、欧米ではスライディング・ドアをほとんど見かけない。見かけるのは押し開け式のドアか、ホテルなどにある回転式ドア(Revolving Door)である。日本では、洋式ドアは取り入れたが、その背景にあるドア文化までは取り入れきていない。また、日本人のせっかちな性格も、次に続く人のことまで考える余裕はないのかもしれない。

《定時運行》

日本の印象は、と聞かれて、彼女たちは、

「日本では列車の運行時間が正確である」

と答える。イギリスでは、日本に比べ列車が遅れることが多いらしい。特に、中長距離列車がよく遅れるらしい。

授業の合間に、ロンドン基地 CA たちは、東京郊外の鎌倉や日光や箱根に足をのばしていた。東京駅から横須賀線に乗ったり、新宿まで出て小田急ロマンスカーで湯本まで行き、そこから箱根登山鉄道に乗換えたり、浅草から東武ロマンスカー(スペーシア)に乗ったりした。外国で、1 人で鉄道を利用できるようにになったら旅行者として一人前であると、前にも書いた。外国人旅行者にとって電車に乗るのは、停まる駅のことや時刻のことが不安である。日本の郊外型電車は、外国人の利用頻度も多くないためか、電車の行き先表示が、英語で書かれていることは少ない。英語で書かれていても、電車の行き先と自分の行き先が違うことの方が多い。この電車は、自分が目指している駅に停まるのだろうかと不安になる。

ロンドン基地 CA たちも、ちょっとした旅行で電車に乗る時は、時刻表をたよりにせざるを得ない。そして、降りる駅は、何番目の駅かを調べておく。日本では、電車が正確に出発するので、大いに助かるようだ。

《カラオケ》

パリ滞在中に TV を見ていたら、フランス語で「カラオケ」と言っていたのを耳にした。東南アジアの国々では、繁華街のいたる所にカラオケの看板がでている。最初の頃は、日本人駐在員が利用していたが、最近は、その国の人々もカラオケがすっかり気に入っているようすだ。その国で流行っている曲を用意しているカラオケ店が増えている。

翌年、5 期を担当したとき、「カラオケに行ってみよう」という

ので、何人かのロンドン基地 CA を、寮近くのカラオケスナックに連れて行った。日本のスナックは、イギリスではパブにあたる。パブというと、少し背の高いバーカウンターで飲物を注文し、受け取って自分たちのテーブルで飲む。カウンターで立ったまま飲んでる人も多い。日本のスナックは、カウンターは低く、中にいるのはバーテンダーではなくママさんが多い。お客には、飲物だけではなく、手料理も提供し、ときに、おふくろや女房の代わりをつとめてくれる。それを売り物にしているところが多い。

マイケル、アンマリー、ホーラ、マリーと5人でスナックに入った。カウンターに座ると、外国人の客を迎えるのが初めてなのか、「あらどうしよう!」という顔をしている。

「実は、日本に來たばかりなのだが、カラオケに興味があるというので連れきた。よろしく」

と云うと、

「外国人もカラオケに興味があるの?」

と、うれしそうに歌詞カードを持ってきてくれた。

最近のカラオケでは、ヒットチャートに入るような、外国の最新曲も用意しており、英語でも歌えるようになっていところが多い。当時、街中のスナックでは、若い外国人向けの曲など用意していない。1960年代に流行したビートルズやプレスリーの曲くらいだった。それでも、居合わせた客たちがカラオケで歌っているのを見て、自分たちも歌ってみるという。ビートルズナンバーは、いまではスタンダード曲になっている。イギリス人なら誰でも知っているようだ。筆者も若いころよく歌った。マイケルが「イエスタデイ」にするという。ママさんが準備してくれる。なつかしい曲が流れてくる。

"Yesterday, all my troubles seemed so far away.

Now it looks as though they're here to stay. Oh, I believe in yesterday."

ところが、カラオケも慣れが必要なのだ。音をとるのがむずかしい。キーが日本人用になっているらしい。マイケルのキーとカラオケのキーが合わないらしく、なかなか音が取れない。聞いていて何か変なのだ。もう一度、やってみたがやはりダメ。そこに居合わせたビートルズ育ちらしい客が、一緒に歌ってくれるという。出だしを彼にリードしてもらったところ、今度はうまく歌うことができた。

宴会文化の日本で育ったカラオケは、カラオケの騒音を気にするよりも、思いっきり歌うことによって、ストレス解消ができ

るため、人々に受け入れられている。騒音をあまり気にしない東南アジアの国々でも受け入れられている。

イギリスのパブやバーで飲むことがあるが、どこもワイワイガヤと騒々しいということはない。みな静かに飲んでいる。あちこちのテーブルで話しているのだが、静かなのだ。ロンドン滞在中、邦人 CA たちと飲みについて、つい大きな笑い声をあげてしまう。すると、たいていジロツと冷たい眼差しを向けられる。

このような社会でカラオケ文化が育つか、楽しみにしている。ヨーロッパ人の、静肅さを好む部分とストレスと発散したい部分の綱引きがしばらく続きそうだ。一つ言えることがある。その後、1000人近くのロンドン基地 CA が誕生しているが、カラオケをうまく歌える人が増えているのは確かだ。

《香典袋》

機内の仕事だけでなく、外国人 CA たちに、もっと日本の日常生活を知ってもらおうと、訓練部長の発案で、「ホームビジット(Home Visit 家庭訪問)」をすることになった。週末に、訓練部の教官や課長の家に招いて、それぞれの町の様子を案内したり、日本の家庭料理をご馳走したりした。発案者の部長も、先頭に立って、何人もの訓練生を招待していた。

月曜日の朝、教官室にいと、週末にホームビジットをしてきた訓練生がやってきた。先週、自分たちを招待してくれた教官に、これを渡して欲しいと香典袋を差し出したのだった。香典袋を出されたので、不審に思い尋ねてみると、袋の中には、ホームビジットの礼状が入っていると言う。

「きみたち、これをどこで買ってきたんだい」

「会社の生協の売店でを見つけました。赤い色のものと黒い色のものがあつたのですが、黒い方が、品がよかったので、お礼状を入れるには黒い方がよいと思って買ってきました」

「これはね、香典袋といってね、葬式に参列するときに、中にお金を入れて差し出すものなんだよ。赤い方は、結婚式などの時に使うもので、やはり中にお金を入れるのだ。赤はお祝い用、黒は弔意用なのだ」

それを聞いた彼女たちは、売店にすつ飛んで行ったのだ。

一次ページへ続くー

第 6 章 乗務開始

訓練が終り、帰国の途についた訓練生たちが、無事にロンドンに着いたとのテレックスが入った(当時は、まだインターネットが普及していなかった)。彼女たちは、翌日から 3 日間の休暇が与えられることになっていた。それぞれの故郷に帰り、ひとときを過ごしていた。アイルランド人は、なつかしのアイルランドにすっ飛んで帰っていった。4 日後には、全員ロンドンに集まらなければならない。そこで、これから始まる 1 ヶ月の OJT フライト(機上訓練)に関して、ロンドン基地側のフリーフィングが予定されていた。

《悲 報》

訓練部で、訓練報告書を作成していると、突然、ロンドン支店からテレックスが入ってきた。テレックスには、この前まで、元気に訓練を受けていた、アレックスが亡くなったと書いてある。詳細がよくわからないが、テレックスには交通事故に遭ったようだと書かれていた。

アレックスは、クラスで一番年上のおだやかで、いつもニコニコしている娘だった。クラスのメンバーが、イライラしたときなど、なだめ役にまわり担任をよく助けてくれた。

又、テレックスが入ってきた。それによると、道路を横断中に、酒に酔った若者が運転する車にはねられたらしい。その日彼女は、結婚する女友達を祝うために、女性だけで集まるヘンパーティー (Hen-Party)に出かけた。その帰りの出来事だった。警察では、所持品に身元が分かる物がなく、彼女は一晚警察に安置され、翌日の新聞に事故の様子が報じられた。

〈昨夜若い女性が車にはねられ死亡した。身元が不明であるが、この女性の財布には日本のお金が入っていた〉

家では、アレックスがいつまでも帰宅しないので心配していた。次の日、母親が、財布に日本のお金が入っていたと書いてある記事を目にした。まさかと思い警察に問い合わせたところ、事故に遇ったのがアレックスだったことが判明したのだ。ひき逃げに遇ってしまい、だれにも見取られずに亡くなり、一晚中ひとりで警察に安置されていたのだ。

ロンドン支店の方で、葬儀参列について話し合った結果、会社代表として、ロンドン乗務員セクションのマネジャーが参列することになった。そして、クラスの代表として、東京訓練中、寮で 2 ヶ月半同じ部屋だったカレン・R に行ってもらうことを決めた。

ところが、カレンは、一緒にの部屋で過ごした友人の死に強くショックを受けており、とても葬儀に参列するところではないと泣きながら断ってきた。やむなく、代わりにクラスで一番しっかりしているティッシュに行ってもらうことになった。

葬儀に参列したティッシュによると、アレックスの母親にお悔やみの言葉をかけたところ、

「娘は、東京での訓練を終え、元気に帰ってきた。帰ってきた日には、家族に、日本のことや訓練のことなどいろいろ話してくれた。自分の希望がかなって東京に行き、思い存分有意義な日を送ってきたようだ。彼女が居なくなってさびしいが、彼女はよい思い出をもって神に召された」

と話していたという。アレックスの ^{ひつぎ} 柩の上には、明後日からはじまる OJT フライトで着る予定だった真新しい制服と制帽が、きちんと乗せられてあった。



アレックスの死は、筆者自身も、クラスメイトにとっても、そうとう堪えた。しかし、まもなく始まる OJT フライトもおそろかにできない。ショックで、実機訓練がうまくはかどらないようなことになれば、彼女たちの評価を落とすことになる。一緒に乗務する邦人 CA や旅客は、外国人 CA 訓練生が、交通事故に遇いクラスメイトがショックを受けていることなど知る由もない。仕事ができなければ、それなりの評価が下ってしまう。そちらの方も心配だった。

《OJT フライト初乗務》

しばらくすると、ロンドン基地を飛び立ってきた我が 3 期のメンバーが、日を追って順番に成田に到着しはじめた。邦人 CA の場合は、地上訓練が終われば、訓練生は教官の手から離れ、あとは現場に任せる。しかし、大量のヨーロッパ人 CA が、OJT 乗務をするのは今回が初めてとなる。邦人 CA と外国人 CA がお互いうまくいこう、コーディネートする海外基地担当セクション(通称 K グループ)が発足していたが、まだまだヨーロッパ人 CA たちの扱い方が分からない。そこで、彼女たちひとりひとりをよく知る担当が、成田乗員部に詰め

ることになった。

1 週間ぶりの再会だ。乗員部で待ち構えていると、フニーと 4 期のキャロラインが、元気そうな顔をしてオフィスに入ってきた。

「Hello!! Kawai-san、How are you?」

長時間の乗務とその間の緊張感で、まだ気持ちが高揚したままのようだ。

「初めてのフライト、どうだった?」

「今回は、初めてのフライトですと挨拶したら、チーフパーサーから、先輩の仕事をよく観察しているように言われました。先輩に付いて、ビジネスクラスのサービスを担当しました。ファーストクラスのサービスも見せてもらいました。機長が、離陸と着陸のとき、操縦室に招待してくれたので、離着陸のとき操縦室で何が行われているのかも分かりました。離着陸の風景もすばらしかったです」

ロンドンでの授業で、ジャンボ機を見学に行ったとき、機長席にちゃっかり座っていたのは、そういえばフニーだったのを思い出す。

「フニー、アレックスのことは本当に残念だった」

「私も聞いたときは、ショックで眠れませんでした。みんなもショックを受けています。アレックスの分もガンバります」

「そうだ、アレックスのためにも、OJT を成功させような」

その後に着陸した何人かとも、アレックスのことを話した。もちろん、だれもがショックを受けている。しかし、それを乗り越え、機内では笑顔でサービスにあたってくれているようで、ひと安心した。

《髪を下ろすって》 Let one's hair down

何日後に、スワンソン大学で心理学を専攻したペニーが到着した。一緒に乗務してきた邦人 CA たちが、帰着ブリーフィングで集まっている所に、お礼を言うために出向いていった。チーフパーサーが、

「初フライトの印象はどうだったか、皆に聞かせてください」と言っている。

そこで、ペニーは立ち上がり、10 数名いる先輩邦人 CA の前で、感想を述べはじめた。

「Thank you, everyone. You let your hair down during the flight.」

と言っているのが聞こえてきた。そして、旅客があまり多いのでビックリしたとか、飛行中は緊張していたとか、話していた。

"You let your hair down"と言われて、邦人 CA たちはキョトンとしている。直訳すれば、「あなたはあなたの髪を下ろした」となる。それに対して、なぜペニーが「ありがとう」と言っているのか、だれも理解できなかったようだった。

実は、この表現は、彼女たちの間でよく使われる言い回しなのだ。欧米社会では、女性が髪を下ろすしぐさは、「親しみ」を表す身体表現(ボディランゲージ Body Language)なのだ。したがって、彼女は「みなさん、飛行中、親しくしてくれてありがとう」と言っていたのだ。

映画「タイタニック」でキャメロン監督は、ローズに髪を下ろさせるしぐさをさせることで、彼女がジャックに心を開いたことを表現しているシーンがあった。ジャックを部屋の招き入れる。ローズの許婚者キャルが部屋に入ってくるのではないかと落ちつかないジャックに、自分の肖像画を描く約束をさせる。ジャックにデッサンの用意をさせ、着替えのためにとなりの部屋に行く時、ローズがさりげなく髪を下ろしたのを、読者のみなさんは覚えているだろうか。

洋画のシーンで、このようなしぐさを見たことがある読者もあると思う。彼女もしくは彼の部屋に行き、2 人でワインでも、ということになった。よい音楽とワインで、ムードが高まってくる。彼は、彼女を口説き始める。男性側は、言葉で女性を口説くことができるが、女性はそうはいかない。今夜はもっと彼と親しくなりたいと思っていても、それをなかなか口に出せない。そのような時、彼女は、さりげなく、いままでアップにしていた髪をほどき下ろすしぐさをする。監督はさりげない演出で、彼女の気持ちを観客にも伝える。日本人同士では、この動作はあまり意識されていないが、欧米の男女の間では、それなりの意味を持った動作なのだ。だから、人前でやたらと髪を下ろすことはしない。つまり、この動作はリラックスしている、気を許している、という意味を持っている。

CA の世界では、ロングヘアーの人は、かならず髪をアップにし、まとめなければならないことになっている。大きな理由は、食品を扱っているためであるが、もうひとつは、髪を下ろしている姿は、旅客の目には、気がゆるんでいるように見えるからなのだ。

《外国人が日本語を話すと…》

外国人、特に欧米人が日本語を話すと、日本人は「えっ」という顔をしたり、笑ったりする。そして、日本語で受け答

えしてよいものか、英語で答えるべきか、迷っている姿を見かけることがある。相手が一生懸命、日本語を話そうとしているのに、わざわざ英語で答えている人もいる。英語を少しでも勉強したことのある人は、特にその傾向が強い。筆者もその1人だ。日本人の、外の人に対する思いやりの心がそうさせるのか。日本語は、むずかしい筈なのにそれを喋っているからビックリするのか……。そして、ビックリしていることを日本人は笑いで表現する。

ロンドン基地 CA たちが飛び始めた当時、訓練中に勉強した日本語を使って自己紹介をしたところ、

「ワー、外人が日本語をしゃべっている」

という雰囲気につつまれることになる。

「日本人はどうして笑うのか」

とよく聞かれた。笑われると、自分が使っている日本語が、間違っているのではないか不安になる。

「間違っているのなら、指摘してくればよいのに」

とよく言われた。

一方、欧米人、特にアメリカ人は、日本人が英語をしゃべろうとすると、大抵の場合、“You speak English very well.”と先ずほめ、相手に自信をつけさせている。そして、自分はどんどん英語でしゃべりまくる。イギリス人たちも同じ傾向だ。

飛行機の中でも、スペイン人などは、私たち客室乗務員が、知っている限りのスペイン語で話しかけるだけでもとても喜ぶ。そして、その喜びを「ことば」で表現する。欧米人は、日本人に比べ、喜びをことばで表現するが、日本人は笑いで表現することがある。彼女たちにとって、この笑いがカルチャーショックとなった。

《Smile と Laugh》

日本語では、“Smile” も “Laugh”も、同じ言葉で表している。最近の日本では、Smile が少なくなり、Laugh が多くなってきている。いわゆる、声高の笑が多い。そして、女性は、笑うときに口に手をあてる。それさえしない女性もいる。昔の日本では、既婚の女性は「お歯黒」といって歯を黒く塗っていた。笑うと黒い歯が見えてしまうので、手をあてていたそう。それが習慣となり、今でも、日本人は笑うとき口に手をあてる。これはどうも日本独自の習慣のようである。

欧米では、大人の女性、つまり Lady は、口に手をあてるほ

どの笑いをしない。口に手をあてて笑うのは品位に欠けることなのだ。ましてや日本の若い女性たちがよくやる、誰かの話にウケて、「言える、言える」と言いながら、膝を叩いてまでして大笑いをするなどほとんどない。我が訓練生たちも、訓練が辛くとも笑いを忘れなかったが、それはいつも Smile だった。

彼女たちは、痛みや悲しみに対しては、日本人がおどろくほど、痛がったり泣いたりする。一方、笑いの表現は、日本人に比べおとなしいことが分かった。

《逆カルチャーショック》

あるとき、ロンドン基地 CA と乗務員が一緒だった。サービスが一段落して、訓練時代の話になった。来日後、どのようなことがカルチャーショックだったのか聞いてみた。

異文化の中に2、3年もいると、その生活に慣れてしまい、その国の人たちと同じ感覚で行動するようになる。今では、ロンドン基地 CA たちも、日本人の行動スタイルに、違和感を覚えなくなっている。来日当初、感じたカルチャーショックにどのようなものがあったか、聞かれても思いだすのに苦労するらしい。もはや逆カルチャーショック状態なのだ。

欧米人は、レストランで、ウェイトレスが食事を運んでくれたとき、相手の目を見て「サンキュー」という。お礼を言うときは、かならず相手の目を見るのがマナーとなっている。日本では、「ありがとう」という代わりに頭を下げることが多い。したがって、相手の目を見ない。

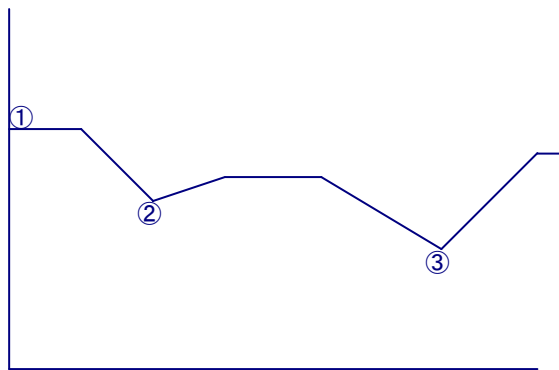
彼女たちもいつの間にか、「サンキュー」と言う代わりに、頭を下げている。機内は、大半が日本人旅客で占められている。ロンドン基地 CA たちも、いやおうなく日本人旅客を相手にサービスすることになる。仲間の CA たちも日本人である。日本人は、頭を下げる動作をよくする。何かにつけて、うなずいたりお辞儀をしたり、頭を上下に振る動作が多い。相手の話を聞いている時でさえそう。また、日本人の旅客に飲物か何かを注文され、持っていくと頭を下げられる。そのような環境の中にいると、日本で買い物や食事をするときは、いつの間にか、自分も頭を下げてしまっている。

自国に戻り、友達やボーイフレンドとレストランに行く。メニューを見て、ウェイトレスにオーダーする時、「私には～をください」と言いながら首を上下に振っているらしい。横にいる友達に、「みっともないから、首を上下に振るのはよしなさい」とたしなめられる。すっかり日本的になっている自分がお

かしくてしょうがない。自宅で電話しているときも、「あなた、お辞儀スタイルになっているわよ」と家族に言われるらしい。「サンキュー」などと言っている時、電話口で、いつの間にか頭を下げている。日本の寮生活で履き慣れたスリッパも、今や離せないものになっている。「スリッパでいると気持ちがいいの」と話していた。

《カルチャーショック論》

人が異文化に接すると、下のような W カブに似た反応が起こる、と言われている。



はじめて海外旅行したり、その国に住んだりすると、今までの生活とがらりと変わり、最初のうちは、見るもの、聞くものすべてが素晴らしく感じる。この時期をハネムーン期間 (Honeymoon Period) ①と呼ぶ。

そこに住み、いろいろなことが新鮮に感じる時期が過ぎると、少しずつ生活面での違いが分かってくる。今まで自分が育ってきたやり方をすると、何かまわりから浮いてしまったりする。ロンドン基地 CA にとって、地震はいままで味わったことのない、天地がひっくり返ったようなカルチャーショックだった。また、日本にきた外国人の多くは、日本のタクシーに乗ろうとすると、ドアが自動的に開くので、初めはビックリするそう。このようなことが、日常生活でいろいろ起きてくる。そのため 24 時間緊張状態にさらされるようになる。ロンドン基地 CA も、いままで自分が過ごしてきたものと違う、日本の衣食住や企業生活に、自分はやっていけるのだろうかと不安になり、第 1 回目のカルチャーショック②に見舞われることになる。

そのうちに、仕事で現地の人と接したり、地域の人たちと友達になったりして、その国の生活習慣等が分かるようになり、再び適応度が高まってくる。ところが、2 回目のカルチャーショック③で、一番落ち込む状態になる。

この 2 回目のカルチャーショックの原因は、基本的な価値観の違い

が分かってきて、生活や仕事をしていく面で、本当のむずかしさを感じるようになった時に起きる。欧米と日本とでは、狩猟(契約)社会と農耕(村)社会の価値観の違い、キリスト教的価値観と仏教・儒教的価値観の違い、地理的自然環境からくる価値観の違いなどが背景にある。ものごとを論理的に考える習慣を身につけて育った欧米人が、日本社会で感じるのは、論理が通じない点である。反対に、日本人が欧米社会に入って感じるのは、あまりにも論理的に押しつけてくるので疲れる点なのだ。

外国人も、この 2 回目のカルチャーショックを乗り越え、日本にいる限り、例えば、謙虚(Humble)に振る舞うことが必要なのだ、と考えるようになると、再び、異文化に対する適応度が高まる。それ以降は、小さなカルチャーショックに出会うことはあるが、その社会とうまく適応していけるそう。いまでは、2 回目のカルチャーショックを乗り越えたロンドン基地 CA たちが多数乗務をしている。

そして、おもしろいことに、異文化にすっかり慣れてしまい、その文化に心地よさを感じてしまった人が帰国すると、自国文化に逆カルチャーショックを感じてしまうそう。自国の友達から「お前なんか変だゾ!」と言われたりするのは、前述のとおりだ。

《ボル/雑誌で税関トラブル》

日本でも、ヘアーが解禁になり、ヘアーヌード写真が一般の人の目にも触れるようになった。当時はまだ、アメリカで発売されていた「プレイボーイ」や「ペントハウス」といった雑誌は、日本に持ち込むことができなかった。持ち込もうとすると、税関検査で没収され、へたをすると処罰された。

ある時、訓練部に、香港基地 CA がボル/雑誌持込み容疑で、税関トラブルになっていると報告が入った。その CA は、香港にいるボーイフレンドに頼まれて、「プレイボーイ」を買ってきたらしい。彼女はロスアンゼルスから日本に到着し、翌日、別の便を乗務し香港に帰ることになっていた。彼女としては、その雑誌を香港に持って帰る予定だった。ところが、たとえ香港に持って行くのであろうと、一旦日本に持ち込むことになる。日本国内に持ちこめば許されるはずはなく、税関で取り調べを受けるハメになった。彼女は乗務にあたり、入国先の規則について、訓練部で習ったことを、メモにして持っているほど真面目な CA だった。取り調べ中、彼女はメモを税関係官に見せ、訓練部で習ったことを説明した。実は、

訓練部では、外国人 CA に、ヘアヌード写真を含むポルノ雑誌の日本持込み禁止について教えておらず、テキストにも記載されていなかった。

邦人 CA たちは、日本の法律で育ってきているので、日本ではポルノ雑誌の持込みが禁止されていることを、常識として知っている。そのため、教官の雑談の中では話すことがあっても、テキストには記載していない。外国人 CA 訓練で使う英語版テキストは、元とは言えば、邦人 CA 用のテキストを英語に訳しものだった。教官たちも、外国人 CA も、ポルノ禁止のことについては、香港でも同じであり、訓練生は当然知っているだろう、と考えて、敢えてそのことについて触れていなかった。

一方、その香港基地 CA は、自分の国の法律にそって行動していたのだ。香港では、イギリスと同じように、当時すでに、ヘアヌード入りの写真が解禁になっていたのだ。彼女は日本も香港と同じだと思い、ホーイフレントに頼まれるままに米国版「プレイボーイ」を日本に持ち込んだのだ。税関の係官も、彼女がしっかりと仕事のためのメモを持っており、理由が判明したので「プレイボーイ」の没収だけで、彼女を放免してくれた。その後、訓練部では、外国と日本の法律の違いについてもテキスト記載内容に注意を払うようになった。

《サンキュー》

「日本の男性は、どうして”サンキュー”と言わないのですか。私たちは”サンキュー”を、日本語で”ありがとう”だということは知っています」

とロンドン基地 CA から質問を受けた。

機内で、いろいろな国の旅客に出会う。サービスの受け方も違う。邦人 CA たちは、欧米人旅客はサービスの受け方がうまく、サービスする側をも、よい気分にしてあげることが多いと言う。筆者も同じ感想を持っている。欧米人旅客は、サービスする側の人格を認めた上でサービスを受けてくれる。そして、何かしてあげると、「サンキュー」が必ず返ってくる。そして、「サンキュー」と言いながら、目でも「感謝の気持ち」を伝える。いわゆる「アイコンタクト」がある。

一方、日本人旅客はどうだろうか。「ありがとう」と言ってくれるのは、どちらかというと、女性の方が多い。女性の中でも、お年寄りのマナーに感動することがある。CA たちが忙しそうなので、のどが乾いても我慢していることが多く、注文するときも遠慮がちにする。飲物を持っていくと、必ず

「ありがとう」と言ってくれる。一番すばらしい光景は、飛行機を降りるとき、ドアのところで一旦立ち止まり、客室乗務員に丁寧なお辞儀をして行かれるときである。

次に、若い女性たちがすばらしい。なぜかという、若い女性たちは声がよく出ている。学生時代にファーストフードなどでアルバイトしている人が多いからかもしれない。「ありがとうございます」と言うことに抵抗感がないようだ。とにかく元気だ。機内で接しているかぎり、「ありがとう」のひと言が一番少ないのは、中堅ビジネスマンかもしれない。街中の喫茶店での注文のやりとりを想像すると分かる。

店員「ご注文は何になさいますか」

お客「コーヒー……」

そして、

店員「お待たせいたしました」

お客「……」(僅かばかりうなづく)

よく見かける光景だ。機内でも同じような場面に出会う。単語しか言わないで注文する人がけっこう多い。もちろん中には、サービスする側として見習わなければならないと思う方も多くいる。ファーストクラスを長年担当してきて、すばらしい方々にお会いすることができた。一流企業や財界のトップの方には、さすがにトップになる人は違う、と感激することが何度もあった。物腰の柔らかさ、心遣いの一言が、サービスする側の人達を勇気づけてくれる。そして、決して偉ぶらない。

《殿様文化》

日本では、サービス業は、「士農工商」でいえば「商」にあたる。ビジネスマンは「企業戦士」と呼ばれ、昔でいえば「サムライ」であり「士」の地位にあった。武士が目指したのは殿様である。殿様は、側近が食事を運んできても「ウム」というだけだった。沽券にかかわるので、決して「ありがとう」とは言わない。せいぜい言っても、「ご苦労」くらいであろう。一方、商人たちは「いらっしゃいませ」と「毎度ありがとうございます」で商売をしてきた。ときには、「もみ手」をすることもあった。その風習がいまだに残っている。

日本人は、感情をあまり表に出さないよう教育されてきている。国際化の時代に入り、異文化の人を接する機会も多くなっている。気持ちは表現されてはじめて相手に伝わることを、忘れないで欲しい。

《Must と Should》

彼女たちは、邦人 CA の中で乗務をする。当時、イギリス人の先輩 CA はいなかった。機内で、ロンドン基地 CA にいろいろ教えるのは邦人 CA たちだった。

「これは、こうするのよ」

というようなことを英語で伝えるのだが、その英語が日本人英語のため、聞いているロンドン基地 CA にとって、

「そんな言い方しなくていいじゃないの」

と感情的になったことがたびたびあった。邦人 CA は、「こうするのよ」を英語で、

“You should do like this.”

とか

“You must do it.”

というように、“should”と“must”を使ってしまう。日本人同士なら、“should”や“must”を使っても、日本語に訳せば、それほど強い意味にならない。ところが、この2つの単語は、英語国の人達の間では、かなり強い意味合いを持って使われている。

「なんで、そんなやり方しているの、こうしなくちゃダメじゃないの」

のニュアンスがある。場合によっては「あんた、バカじゃないの」くらいの意味合いになることもある。同じ英語でも、日本人と英語国の人たちでは、意味の受け取り方が違って、それが、お互いの感情のすれ違いを起こす原因となった。どうしても“Should”や“Must”を使いたいのであれば、その前の人称を“We”にするとよいのだ。

“We should do this.”

とすれば、相手だけではなく、自分もそうするのだということを表示でき、相手を非難している意味合いがなくなる。できれば、

“We are supposed to do this.”

のように、“Be supposed to”を使えば、「こうすることになっているのよ」となり、相手も素直に受け入れてくれる。

《ギャレーヘルプ無用》

ある日、到着便のドイツ人 CA が興奮して、コーディネーターセクション(外国人担当セクション)のオフィスに飛び込んできた。邦人 CA のことで、だいぶ頭にきているらしい。

「邦人 CA に侮辱された」

と言っている。気持ちを落ちつかせて、何があったのか聞

いた。

くだんのドイツ人 CA は、その便では最後部ギャレー(Galley)担当だった。日本人同士ならよくやることだが、そのときの客室担当の邦人 CA は、彼女が、ギャレーで大変そうな様子だったので手伝った。ところが、そのドイツ人 CA はすごい剣幕で怒りだしたのだ。善意で手伝った方も、「せっかく手伝ってやったのに」と気持ちが収まらない。売り言葉に買い言葉でなってしまった。

「なんで手伝うのよ。」

私を半人前に扱うとは失礼よ!

「失礼なのはどちらよ。」

ありがとくらい言ったらどうなの!」

「勝手に手伝っておいて、

“ありがと”を言えていうの!」

「だいたいあなたがモタモタしているから

いけないのよ!」

エコミークラスを統括しているパーサーが仲裁に入り、お互いの誤解を解くよう努めたが、中々収まらない。最後には、客室責任者であるチーフ・パーサーが、いざこざは後にしろ、と指示を出し、その場を収めた。

そして、東京に着くやいなや、冒頭のように、頭に来ているドイツ人 CA がコーディネーターセクションの部屋に入ってきて、「日本人は失礼だ」と興奮している。そこに、一方の邦人 CA も入ってきて、「今回の外国人 CA は、日本人のやり方を理解しようしない」と言っている。

コーディネーターセクションでは、はじめに、個別に話を聞くことにした。双方から、問題点はどこにあるのか話させた。

外国人側「他人の仕事を勝手に手伝うのはその人をバカにすることになる」

日本人側「他人が大変そうな時は、手伝うのが当たり前」
問題点がハッキリしたので、興奮が落ちついてきたところで、2人を引き合わせ、もう一度話しをさせた。習慣と価値観の違いから起きた問題なので、それぞれ相手の価値観を知ることが一番の近道なのだ。異文化は、どちらが正しくてどちらが間違っている、というものではない。お互いの違いを理解し、受け入れることが大切なのだ。この2人も、最初は感情的になっていたが、しまいには、「そうだったのか」ということになりハッピーエンドとなった。

《議論か言い合いか》

日本人は、議論が不得意な民族である。「和」を大切にするため、できるだけ議論や口論を避けようとする。自分の意見を押し通そうとすれば、「あいつは自己主張が強い」というレッテルを貼られる。また、角が立ってしまう。

欧米社会では、反対に自分の意見を持たない者や、それを相手に伝えることができない者は、ダメな人と見なされる。授業中も、折りにつけて、彼女たちは自分の考えを述べていたし、時に、議論になることもあった。

欧米社会では、「Chat 雑談」―「Talk お話」―「Discussion 論議」―「Debate 討論」―「Argue 議論」―「Quarrel 口論」のように、相手との話し合いには序列がある。

ところが、ヨーロッパ人 CA の方は論議しているつもりで、自分の意見を述べている。それを聞いている邦人 CA の方は、相手が主張している内容より、相手の言い方や態度の方に目が言ってしまう。そして、この外国人は生意気だ、と感情的になってしまう。相手が感情的になれば、ヨーロッパ人 CA の方も感情的になりケンカになる。

日本には、「Discuss」や「Debate」そして「Argue」という発想は希薄である。相手と議論するより、摩擦を起こさない方に重点が置かれている。日本では、上司に対し、何か主張したいときは、「僭越ですが…」とか、「生意気なようですが…」とか、「お言葉ですが…」という接頭語をつけないといけない。日本では、自己主張はあまり歓迎されないのが現実だ。

《顔をつぶされた》

香港基地のベテラン中国人 CA が、浮かぬ顔をして、コーディネーターセクションのオフィスに入ってきた。筆者が、よく知っている CA だったので、気になり、声をかけた。彼女は、一緒に乗務した 4 人の香港基地 CA の中では、リーダーであり、後輩の指導をする立場にいた。ところが、邦人 CA たちは、彼女がリーダーだということを知らなかったの、彼女が後輩の香港基地 CA にいろいろ指導してきたことを、否定するような発言をしてしまった。それも、後輩がいる前で、「そんなことしなくてもいいのよ」的なことを言われ、すっかりメンツをつぶされた。彼女は、長い間、邦人 CA と仕事し、学んできたことを後輩に指導したのだが、そのとき一緒に乗務した邦人 CA たちは、違うやり方をしていた。頭から彼女の

やり方を否定してしまったのだ。

外国人 CA の歴史が長くなってきた現在、どの基地でも、ベテラン CA たちに、後輩を指導する役割を与えている。教え子の何人かは、基地のマネジャーの片腕となり、スーパーバイザーとして、後輩の指導・管理をしている者もいる。その彼女たちも、乗務する時は、時には、自分より後輩だけど、客室責任者になっている邦人 CA のもとで、一乗務員として仕事をするようになる。邦人 CA たちも、そこらへんの事情を理解するようになり、いまでは外国人ベテラン CA の顔を立てながら、一緒に働いている。

《日本人はトイレが近い》

欧米生活が長い犬養道子さんによると『日本人が外に出るとき』犬養道子著 中公文庫)、海外で日本人が集まる催しものがあると、主催者側は、トイレをいつもより多く用意するそうだ。それほど、日本人はトイレが近い民族なのだ。「日本人のお客様は、食事のあと、すぐにトイレに行く人が多いです!」

これも彼女たちの感想である。食事サービスが終わったとたんに、トイレに立つのはきまって日本人旅客なのだ。欧米人は、日本人ほど頻繁にトイレに立たない。

《それはプライバシーです》

ロンドン基地 CA たちが、乗務を開始してしばらくたってから、教え子のフィオナが困惑したような顔をしてオフィスに入ってきた。

「日本人 CA と話すと、必ず”結婚しているの”とか”ボーイフレンドはいるの”とか、プライバシー(Personal matter)のことを聞かれます。私たちは他人のプライバシーについてあまり質問しません」

日本では、自分のことをあまり他人に話さないのが一般的なのだ。話すことによって、相手に余計な心遣いをさせないようにしている。たとえば、ある人が、「自分の子供はいま病気なの」と話せば、聞いている人は、子供が病気なら何かお見舞いをしなくてはと考える。お見舞いに何を贈ればよいのか。金額はいくらぐらいの物を贈ればよいのか。いろいろ思案することになる。そのため、自分のことを話して相手に心配させるより、相手のことを聞いた方が相手に心配をかけない、というのが日本人の考え方なんだ。だから相手のことを聞くことに重点をおいている。相手のことを

聞くことは、また、相手に関心があることを伝えることにもなる。

日本では、プライバシーと思われることでも、相手のことを聞くのが礼儀と考えているフシがある。一方、自分のことを知ってもらうことを基本としている欧米人は、相手のことを聞くより、自分のことを話す。筆者が担当した訓練生も、こちらから話すまでは、プライバシーに関する質問は一切してこなかった。それより、自分のことを話す。「自分の家族」や「出身地」や「将来の夢」とかを話していた。

一方、邦人 CA は、「教官は、お子さんは何人ですか」とか、「いつ結婚したのですか」とか、「奥様は元 CA ですか」と聞いてくる。

私たちは、話すネタがなくなると、仲間の噂をして会話をつなごうとすることがある。他人の噂話をしたり、相手のプライバシーについて質問したりする。しかし、噂話やプライバシーの話は、他人を傷つけたりすることがある。

自分のことを話しているかぎり、だれにも迷惑はかからない。特に、親しい間柄でないときは、簡単に相手のプライバシーを聞かない。相手のプライバシーについて関心があるなら、なおさら自分のプライバシーを先に話すといふ。「自分のプライバシーを話してもいいのに、相手のプライバシーを聞くのはマナー違反よ」というのが、邦人 CA に対する彼女たちの最初の印象だった。もしプライバシーに関わることを聞きたければ、「May I ask you?」という断りを入れるのがマナーとなっている。

《写真を持つ》

欧米人は、財布や手帳の中に、家族や恋人の写真を入れ持ち歩いている。欧米人はちょっとした会話の時に、この写真を活用する。

クラスのイギリス人たちも、家族や恋人やペットの写真を持っていた。お互い見せ合っていた。筆者も折にふれて見せてもらった。

会話の根底にあるのは、自分のことを知ってもらうことである。自分自身だけでなく、写真を見せることによって家族までも紹介する。時には、飼っているペットの写真などのときもある。若い人は、家族だけではなく恋人の写真も入れている。

「これは、ジョージと旅行に行った時の写真なの」

「ポールは今アメリカにいるの」

とか言いながら見せる。そうすると、相手が、

「彼ってすてきじゃない。あなた幸せそうね」

「今度のパーティーにジョージを連れて来ない?」

などとやっている。パーティーで会っても、彼のことはいろいろ聞いているし、すでに写真で見ているので、前から知っている友達のように、すぐに打ち解けてしまう。大人同士の会話でも、写真を見せながら、「自分の妻はすばらしい」とか、「息子は自慢の子だ」とか、「娘は性格がよくて魅力的な子」などと紹介する。

このようなことは、日本人は苦手である。日本人は、仕事場に家庭を持ち込まないし、家族のことについて、やたと話さないのが社会習慣になっている。ましてや、家族の自慢話をすれば嫌われる。

家族や恋人のことを話しているかぎり、会話もスムーズにいくし、だれも傷つけないですむ。そこで活躍するのが写真なのだ。これも欧米人の生活の知恵となっている。

《上陸許可証》

外国人 CA が、乗務で日本に滞在する時は、日本での行動範囲は決められている。好き勝手に京都や北海道に行くことはできない。観光でなく、乗務で日本に来ているので、滞在する場所や地域は限定されている。彼女たちが成田に到着した時は、千葉、東京を中心とした地域が、許されている行動範囲となっている。そして、街に出るときは、身分を証明するために、パスポートの所持が義務づけられている。邦人 CA たちが海外に滞在している時も同じだ。2、3泊あるからといって、遠出は許されていない。外出時には、パスポートを常に持っていなければならないが、海外はスリが多いこともあり、パスポートはホテルに預けて、会社の身分証明書のみを所持して外出することもある。

日本政府は、外国人乗務員に対して、入国時に上陸許可証を記入させる。それに入国管理官がスタンプを押すことによって入国を許可する制度になっている。また、外国人乗務員たちは、スタンプが押された上陸許可証を、パスポートとともに常に所持していることも義務づけられている。また、日本を出るときは、上陸許可証を出国管理事務所に戻却しなければならない。この制度によって、日本の出入国管理事務所は、外国人乗務員の日本の出入りをしっかり管理している。

《私、体調悪いの》

訓練中に、教官を悩ませたことの一つに、病気のことがあった。熱を出して訓練を休んだり、お腹が痛くなって救急車で病院に運んだりした。

飛びはじめてからも、機内で、“I'm sick”と言いながら、チーフパーサーのところにくる者がいた。邦人 CA が、「調子が悪い」と言ってきた場合、同じ日本人なので、どの程度の調子の悪さか見当がつく。横になって休ませた方がよいか、少し座席に座っていれば治るのか判断できる。

ところが、ロンドン基地 CA に、「I'm sick」と言われると、どの程度の悪さなのかよく分からない。そこでむげにもできないので、「とにかく乗務員用席で休んでいなさい」と言って休ませることになる。そして、くだんのロンドン基地 CA は、チーフパーサーのお墨付きをもらったので、休むことになる。

ここでまた、文化の違いから摩擦が起きる。日本の社会では、工作中に調子が悪くなって医務室に行ったり、休憩室で休んだりするときは、まわりの人達に対して、工作中に抜けて申し訳ない、という態度をとる。また、少し休んで気分がよくなった時は、「ご迷惑をおかけしました」の一言をいう。もちろん、日本でも、周囲の人たちは、体調が悪くなった人に気をつかうが、体調が悪くなって仕事に穴をあけた方も気をつかう。

彼女たちの場合、周囲の人の方が、より気をつかい、「あなた、だいじょうぶ。なにかできることはないの」と声をかけている。調子が悪くなった方は、「体調が悪いのだから仕方がないのよ」という顔をしている。

この違いは、少し休んで気分がよくなり、仕事に戻ったときに出る。邦人 CA なら、「どうもすみませんでした」と言いながら仕事につくが、ロンドン基地 CA からは、その一言がほとんど聞かれない。邦人 CA たちは、「いない間、あなたの分までカバーしていたのよ」という気持ちがある。ところが「すみませんでした」の一言がないのでカチンとくる。

一方、ロンドン基地 CA の方は、「私は調子が悪いのに、やさしい一言をだれもかけてくれないの」と、これもまたカチンときている。

《Ill と Sick》

ロンドン基地 CA たちは、気分が悪いときは、“I'm sick”ということが多い。しかし、この言葉を聞くと、チーフパーサーは、「この娘は病気なのだ」と思ってしまう。日本人は、学校で

「Sick＝病気」と習ってきている。日本で教えているのはほとんどが米語なのだ。米語では、たしかに「Sick＝病気」でよい。だが、イギリスでは「Ill＝病気」であり、「Sick＝気分が悪い、吐き気がする」という意味となる。空酔いのことは Airsick というし、船酔いは Seasick である。これらの言葉から判るように、もともと、Sick は病気そのものよりも、気分が悪くて吐きそうな状態を表した言葉なのだ。新人 CA なら、病気というより、よくある空酔いで Sick の状態も考えられる。

したがって、イギリス人は、風邪を引いて熱が出ている時は、病気の状態なので Ill を使っている。

この 2 つの言葉の違いが判れば、イギリス人 CA たちに、「I'm sick」と言われても、すこしも恐れることはなくなる。Sick であれば、少しの間休ませて様子をみればよい。Ill であれば、熱があつたり、痛みが伴っているかもしれないので、症状を聞き、薬を飲むよう言ったり、横になって休むよう指示できる。休ませるにしても、どの程度の時間休ませればよいか、判断もできるようになる。

《え、食中毒!》

Food poison も、日本人が理解している意味と、ロンドン基地 CA が使う時の意味に、少しずれがある。お腹が痛くなった時、ロンドン基地 CA たちは、この言葉をよく使った。訓練中、初めてこれを言われた時、「うわっ、食中毒が発生!」と少しあわてたのを思い出す。その後も、「Food poison で腹痛がするので、授業を休みます」と言ってきた訓練生が何人かいた。日本人の感覚では、「Food poison＝食中毒」なのだ。

「Food poisoning って、熱は、嘔吐は、下痢は?」

「熱も嘔吐もアリマセン。お腹が痛イだけス」

「Food poisoning なら、熱や嘔吐があるだろ」

「イエ、アリマセン」

「それじゃ、ただの腹痛ではないか」

「ハイ、Food poisoning デス」

日本語には、「食べ合わせが悪い」という言葉がある。食べ合わせが悪ければ、後で、お腹が痛くなったりする。また、冷たいものを飲みすぎたときにも、お腹が痛くなることもある。食中毒は、サルモネラ菌など、細菌性のバクテリアを食物と一緒に摂取すると、具合が悪くなり、症状はひどくなる。Food poisoning と言っている CA の話を聞いても、どうも

食中毒の症状ではない。彼女たちが、この言葉を使うときは、本当に食中毒の場合もあるが、たいていは、食べ合わせが悪かったり、冷たいものを飲みすぎたりしたため、お腹が痛くなっている。そう考えても、間違いないことの方が多かったのを覚えている。

“Food poisoning”は、「食べ合わせが悪くおなかをこわしている」の意味もあることが分かった。

《ネームバッヂ》

外国人CA訓練が始まってまもなくの頃、ドイツ人CAから、名前を呼ぶときは、Family Name(姓)で呼んで欲しいと要求があった。それ以降、ドイツ人CAを呼ぶときは、「姓」で呼んでいる。今も、ドイツ人を呼ぶときは“Family Name”で、イギリス人やブラジル人を呼ぶときは“First Name”で呼ぶよう使い分けている。シンガポール人や香港中国人CAを呼ぶときは「シンさん」「ホーさん」と「姓」で呼んでいる。

CAたちは、制服の胸ポケットあたりに、ネームバッヂをつけている。このネームバッヂに、「姓」を入れるのか「名」を入れるのかで一悶着おきた。

邦人CAの場合は、漢字で「姓」が書いてあり、その下にローマ字が入っている。その昔は、「姓と名」共、入れていたのだ。姓名が分かると、お客さんの中には、住所を調べたりして、直接CAの自宅に電話をかけてくる人がいたため、「姓」だけにすることになった背景がある。

外国人CAのネームバッヂは、どちらにするか検討した結果、ドイツ人は「姓」、イギリス人とブラジル人は「姓・名」とも、中国系の人達は「姓」とすることにした。ところがイギリス人CAの方から、「姓」だけにして欲しいと言ってきた。話を聞くと、「機内で、お客さんにFirst Nameで呼ばれるので嫌なんです」

「君たちは、お互いFirst Nameで呼び合っているじゃないか」

「友達同士ではそうですが、知らない人にFirst Nameで呼ばれるのは嫌です」

彼女たちが所属するロンドン基地からも強い要請がきた。外国人CAも邦人CAと同じように、ネームバッヂには、「姓」だけを入れる方向に固まりつつあった。今度は、ブラジル人CAから、「ブラジルでは、お互い姓で呼ぶことはほとんどないので、姓だけにしてしまうと、誰のことかさっぱり分から

なくなってしまう。絶対反対である」と言ってきた。ブラジル基地に問い合わせると、ブラジル人CAたちが言っているとおりとの答えが返ってきた。筆者も、ブラジル人CAの訓練を担当したことがあるが、そういえば、彼女たちのFirst Nameは、今でも覚えている。ところが、Family Nameはすぐに出てこない。それほどFirst Nameに慣れ親しんでいた。

それぞれの基地の事情もあるが、最終的には、ブラジル基地に泣いてもらうことにし、どの基地のCAもすべて、「姓」だけのネームバッヂで統一することにした。

《外国人CA採用の歴史》

国際線が主流だった日本航空の外国人CA採用の歴史は古く、1966年に始まっている。最初に採用されたのが香港中国人CAたちだった。当時、香港はまだ英連邦の一員であり、香港から東京経由で、カナダやアメリカへの移民が多く搭乗していた。移民の人たちは英語が通じないことが多かった。そこで、通訳兼機内サービス要員としてバンクーバー便やサンフランシスコ便に乗務していた。

1969年には、韓国線通訳要員として韓国人CAが数名採用されたが、すぐに廃止になった。

1982年に、JAL系列の日本アジア航空が台湾路線に台湾人CAを投入している。その後、日本航空に統合されたため、現在はJALCAとして乗務している。

1985年には、ブラジル・リオデジャネイロ//サンパウロ便の開設があった。旅客の多くは、里帰りする日系ブラジル人やブラジル生まれの日系人だった。ブラジルはポルトガル語の国で、やはり英語が通じない。そこでブラジル人CAを採用することにした。

1988年に、初めてヨーロッパ人CAの採用を行なった。ロンドン基地70名、フランクフルト基地40名が採用された。併せて、シンガポール基地70名も採用された。その後、上海基地も開設され、中国人CAが誕生している。

1995年にリゾート路線を中心のJALウェイズ社が設立された。CAは、JALから出向している日本人CAがいるものの、タイ人CAを中心に機内サービスにあたっていた。その後、JALウェイズ社もJALに統合されたため、タイ人CAはJALCAとして乗務している。

今や、JALでは、さらに国際化が進み、5、6人に1人が外国人CAとなっている。

《外国人 CA 採用の当初目的》

外国人 CA 採用の目的は、時代によって変わってきている。当初は通訳要員としての役割が強かった。

1980 年後半は、日本ではバブルの絶頂期だった。円が強くなり、土地も物価も高騰していた。日本人 CA の給料も上がった。CA の給料をドル換算してみると、日本人 CA が世界で一番高い給料となってしまった。CA の世界だけでなく、日本のサラリーマンの給料も高騰していた。

そのような中で、日本の航空会社の課題は、コスト競争力を強化する必要に迫られた。当時、シンガポール航空の CA やタイ航空の CA は、日本人 CA の 5 分の 1 の給料だった。イギリスやドイツでも、日本人 CA の 60%程度だった。外国人 CA の採用は、人件費削減に大きな目的があった。

《外国人旅客獲得》

時代が変わり、今や、訪日外国人数が 1900 万人（2015 年）を越えた。2020 年の東京オリンピックまでに、政府は 4000 万人まで増やしたいと考えている。外国人旅行者は、日本にお金を落としてくれる。それは、日本の国際収支の黒字化に役立つ。

一方、出国日本人数は、年々減少傾向にある。その分、日本の航空会社は外国人旅客を増やしていく必要がある。

タイ、シンガポール、香港、台湾からの日本観光が増えている。クールジャパンの影響で、日本に来るヨーロッパの若者も少しずつ増えている。

日本人も、外国航空会社を利用したとき、日本人 CA がいてくれるとなにかと便利に感じる。それと同様に、外国人旅客にとって本国人 CA が乗務してくれているのは心強い。今や、外国人 CA たちは、外国人旅客を獲得する上では、欠かせない存在になっている。

《最後に》

本書では、読者になじみのある「キャビンアテンダント Cabin Attendant」もしくは「CA」の呼称を使ってきました。

実は、「キャビンアテンダント」は日本で生まれた呼称なのです。筆者が乗務を始めた 1969 年には、すでに社内略称として使われていました。パイロットは「Cockpit Crew」で、「C/C」の略称を使っていました。客室乗務員も、正式な英語では、「Cabin Crew」となり、「C/C」を使いたいところです。そうすると、パイ

ロットの「C/C」と重複してしまうため、客室乗務員は、Cabin Attendant の「C/A」を使うようになりました。

ロンドン基地 CA たちも、自分たちのことを「Cabin Crew」と呼んでいます。Cabin Attendant は正式な英語ではありませんので、彼女たちの会話では使いません。日本人 CA たちも、自分たちのことを「Cabin」もしくは「Cabin Crew」と呼んでいます。

「キャビンアテンダント」は、1970 年代以降、「アテンションプリーズ」や「スチュワーデス物語」などの TV ドラマで使われ、メディアを通して、世間でも使われるようになりました。

「Cabin Crew」は、イギリスをはじめ旧英連邦など英語圏で使われている名称です。

戦後、航空機産業に力を入れた米国は、英語に対抗して新たな呼称を作りました。それが「Flight Attendant」(米語)です。この呼称は米語圏で使われています。

エピローグ

ヨーロッパ人訓練を始めてから 20 数年の時間が経ち、ロンドン基地の教え子たちは、その後、結婚して退職したり、他航空会社に移籍したり、転職したりで、長い間、音信が途絶えていました。

数年前、もしかしたら彼女たちの何人かは、フェイスブックをやっているかもしれないと、名前を検索してみました。彼女たちの名前を検索しても、同姓同名が何百と出てきます。そこで、教え子でちょっと変わった名前を検索してみることにしました。スペイン人と結婚していた「カレン・イトロシス」です。めずらし名前なので、やはりヒットしたのは 2 名だけでした。もしかしたら教え子かもしれない。はやる気持ちを抑えて、彼女のページを覗いてみました。すると、友達リストに、教え子たちの名前が何人も出てきたのです。これは間違いのない。さっそく連絡を入れてみました。「How are you, Kawai-san. Long time no see you.」とメールが返ってきました。やはり教え子のカレンでした。

彼女を見つけたお陰でほとんどの教え子とフェイスブックでつながることができました。彼女たちも、同じ釜の飯を食った仲間として、今でも連絡を取り合っていたのです。同じ時期に訓練を受けていた他のクラスの人まで出てきました。そして、そのうちの二人が、2014 年に日本観光に来ました。20 数年ぶりの再会を果たしたところです。

《フェイスブックにみる文化の違い》

彼女たちと再会できたのも、フェイスブックのお陰です。そのフェイスブックに、彼女たちの近況が送られてきます。大きくなった息子や娘の卒業式や家族や友人とのパーティ写真なども送られてきます。ご主人や家族の写真も入っています。自分だけでなく家族の近況も知らせてきます。日本人の場合は、ご主人の写真などを出してくるケースはとても少ないのです。ご主人の顔が出てくるのは結婚式したときぐらいとなります。その後、写真は出てこなくなります。そして、子供が生まれると、子供の写真が多くなります。それと、料理の写真も多くなります。その料理を楽しんでいる姿を出したらどうですかと言いたくなるくらいです。

ブラジル人の教え子ともフェイスブックでつながっています。ときどきは自分が撮ったステキな風景写真を送ってくることもありますが、やはり自分もしくは家族・友人が写っている写真がほとんどです。

フェイスブックの使い方でも、異文化を感じる今日このごろです。



参考文献

「イギリス人と日本人」
ピーター・ミルワート著 講談社現代新書 1987 年

「イギリスと日本」ーその教育と経済ー
森嶋通夫著 岩波新書 1987 年

「続イギリスと日本」ーその国民と社会ー
森嶋通夫著 岩波新書 1988 年

「もうひとつのイギリス史」
小池 滋著 中公新書 1993 年

「とびきり愉快的なイギリス史」
ジョン・ファーマン著 筑摩書房 1996 年

「豊かなイギリス人」
黒岩 徹著 中公新書 1992 年

「イギリス・ルネッサンスの女たち」
石井美樹子著 中公新書 1997 年

「イギリスは愉快だ」
林 望著 文春文庫 1996 年

「イギリス王室の強き妃たち」
渡辺みどり著 講談社文庫 1997 年

「イギリス人はおかしい」
高尾慶子著 文芸春秋 1998 年

「イギリス人、フランス人、ドイツ人の性格」
池田徳眞著 学生社 1991 年

「ジョンブルとマリアンヌ」
倉田保雄著 文芸春秋 1980 年

「イギリスの学校生活」
清水正昭著 サイマル出版会 1986 年

ビジネス・トラベルガイド「イギリス」
The Economist 社 1988 年

「日本人のホス」
キャスリーン・マクロン著 草思社 1991 年

「物語アイルランドの歴史」
波多野祐造著 中公新書 1996 年

「とびきり哀しいスコットランド史」
フランク・レンウィック著 筑摩書房 1996 年

「日本の教育 ドイツの教育」
西尾幹二著 新潮選書 1988 年

「ラインからきた妻と息子」
湯浅慎一著 中公文庫 1988 年

「キリスト教文化の常識」
石黒マリローズ著 講談社現代新書 1994 年

「仏教とキリスト教」
ひろさちや著 新潮選書 1995 年

「しぐさの比較文化」ジェスチャーの日英比較
リージャー・ブロスナハン著 大修館書店 1990 年

「ヨーロッパ人の奇妙なしぐさ」
ピーター・コレット著 草思社 1997 年

「日本人が海外に出るとき」
犬養道子著 中公文庫 1995 年

「私のヨーロッパ」

犬養道子著 新潮選書 1974 年

「世界比較文化事典」

マクミラン・ランゲージハウス社 1999 年

「街角のイギリス英語」

大村善勇著 丸善ライブラリー 1992 年

「アメリカ英語とイギリス英語」

大石五雄著 丸善ライブラリー 1994 年